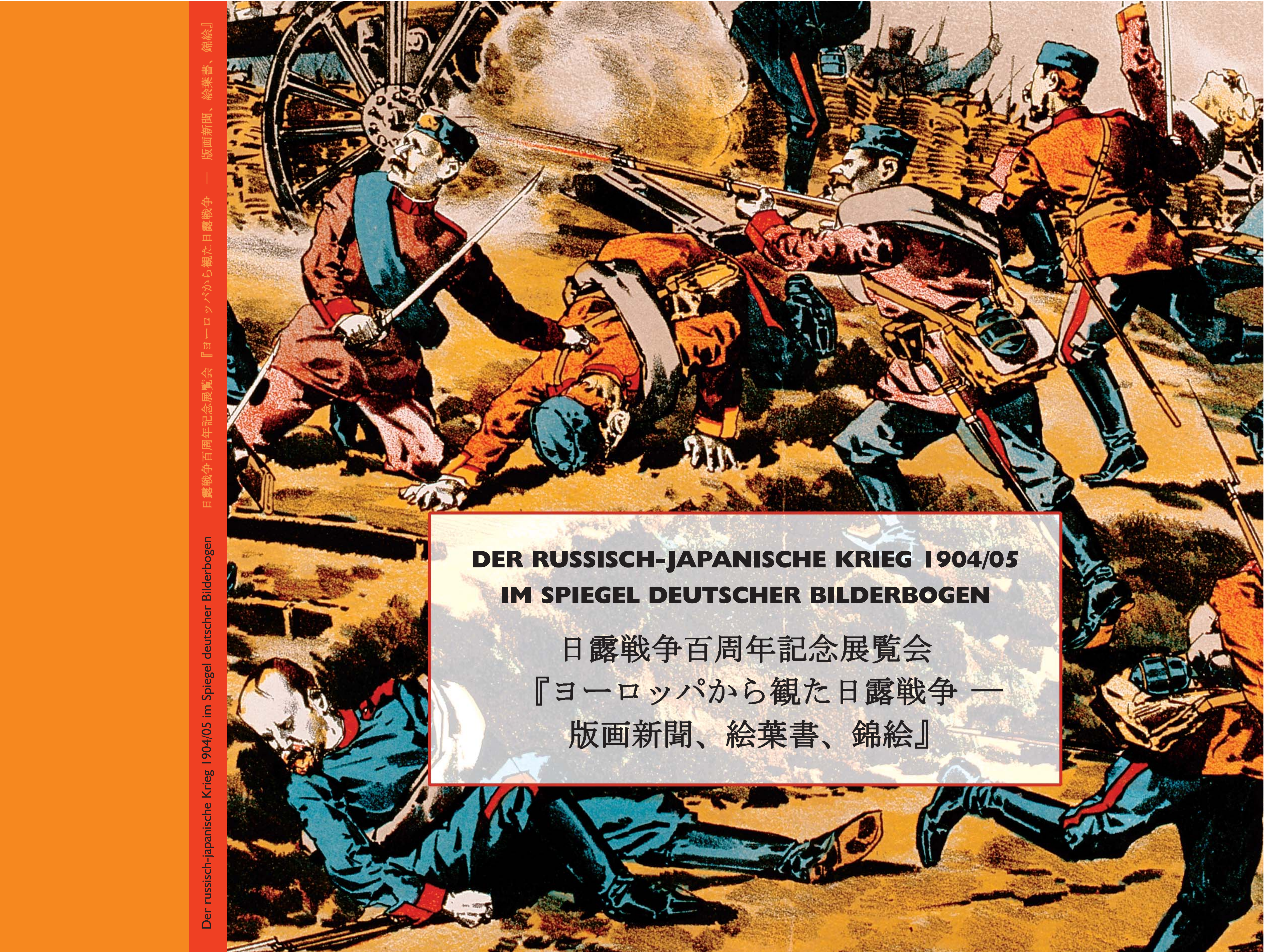


DER RUSSISCH-JAPANISCHE KRIEG 1904/05
IM SPIEGEL DEUTSCHER BILDERBOGEN

日露戦争百周年記念展覧会
『ヨーロッパから観た日露戦争 —
版画新聞、絵葉書、錦絵』

Der russisch-japanische Krieg 1904/05 im Spiegel deutscher Bilderbogen
日露戦争百周年記念展覧会『ヨーロッパから観た日露戦争 — 版画新聞、絵葉書、錦絵』

DER RUSSISCH-JAPANISCHE KRIEG 1904/05
IM SPIEGEL DEUTSCHER BILDERBOGEN

日露戦争百周年記念展覧会
『ヨーロッパから観た日露戦争　―　版画新聞、絵葉書、錦絵』

№ 1831.

DER RUSSISCH-JAPANISCHE KRIEG 1904/05
IM SPIEGEL DEUTSCHER BILDERBOGEN



日露戦争百周年記念展覧会
『ヨーロッパから観た日露戦争 –
版画新聞、絵葉書、錦絵』

日露戦争百周年記念展覧会 『ヨーロッパから観た日露戦争　—　版画新聞、絵葉書、錦絵』

主催：
ドイツ－日本研究所、日露戦争研究会

後援：
在日ドイツ連邦共和国大使館
ノイルッピン一枚絵資料センター (Bilderbogen-Dokumentationszentrum Neuruppin)
静岡県立中央図書館
日南市
犬山市
名古屋国際センター

協力：
朝日新聞社

会場及び会期

2005 年 5 月 18 日～ 6 月 5 日
宮崎県日南市　飫肥城址　松尾の丸

2005 年 6 月 8 日～ 19 日
愛知県名古屋市　名古屋国際センター

2005 年 6 月 25 ～ 9 月 25 日
愛知県犬山市　博物館明治村

2005 年 10 月 3 日～ 10 月 14 日
大阪府大阪市　朝日新聞大阪本社　アサコムホール

2005 年 10 月 29 日～ 2005 年 11 月 17 日
東京都　朝日新聞東京本社　朝日新聞ギャラリー

DER RUSSISCH-JAPANISCHE KRIEG 1904/05 IM SPIEGEL DEUTSCHER BILDERBOGEN

Ausrichter:
Deutsches Institut für Japanstudien, Russo-Japanese War Association

Schirmherrschaft:
Botschaft der Bundesrepublik Deutschland, Tōkyō

Unterstützung und Kooperation:
Bilderbogen-Dokumentationszentrum Neuruppin
Shizuoka Prefectural Central Library
The Asahi Shimbun
Nichinan City
Inuyama City
Nagoya International Center

AUSSTELLUNGSORTE UND TERMINE

18. Mai bis 5. Juni 2005
Nichinan City, Miyazaki; Obi Castle, Matsuo-no-maru

8. Juni bis 19. Juni 2005
Nagoya City, Nagoya International Center

25. Juni bis 25. September 2005
Inuyama City, Meijimura Museum

3. Oktober bis 14. Oktober 2005
Osaka City, Asahi Shimbun, Asa-Com Hall

29. Oktober bis 17. November 2005
Tokyo, Asahi Shimbun, Asahi Shimbun Gallery

内容

INHALT

百年前　―　それはどういう時代であったのか、我々は興味を覚えることがある。というのも、百というきりの良い数が何かを暗示し、我々の歴史への記憶が区分を必要とし、百年が我々個人の記憶より長い時間であり、また、だからこそ我々が、百年前に起きたことと、今もそれを思い起こすことが重要だと信じる気持ちを持っているからである。

百年前、日本は戦争のまっただ中にあった。従来の尺度で測るなら、戦争は重要であった。なぜならこの日露戦争は、その十年前の日清戦争とは全く異なったやり方で、日本が列強の中で一等国になろうとする意欲を表していたからである。これほど日本の大国思想を鼓舞したできごとは他にない。

日露戦争は、朝鮮半島と満州をめぐって戦われた。清国は、国内の脆弱性と西洋列強の圧力により瓦解し、国外への影響力を維持できなくなっていた。その清国に、両地域とも隣接していた。日本は大陸に自らの未来を見いだした。ロシアは極東に不凍港を求め、シベリア鉄道を満州にまで延長し、その建設は旅順まで迫っていた。日本の領分を侵してきたのだった。

我々はそれらのこと、そして他にも多くを知っている。しかし、我々は当時起きたことを本当に知っているのだろうか。当時、前線を遠く離れたヨーロッパで、人々は戦争の原因や当事者たちについて何を知っていたのか。本展覧会に集められた版画新聞と、そこに添えられた説明が、そうしたことを概観させてくれる。これらの版画新聞（一枚絵）の価値は、旅順攻防や、鴨緑江渡河の詳細を伝えるところにあるのではない。これらは今、我々にとって、より興味深い、極めて今日的なメッセージを含んでいる。それらの絵は、当時の人ができごとをどのように想像し、描いたかを見せてくれる。これらの一枚絵は、昔のマスメディアとして、それを手にした人々に彼らが現場にいあわせなかったできごとのイメージを伝えた。今日から見ると、表現されたものと「実際に起きた」こととの間に大きな差があることが注目される。同時に、この落差が、現代の戦争について真実を伝えると思わせる媒体の写真でも、けっして小さくなっていないことを想起させる。従って我々は、一枚絵から、百年前の世界がどのような姿で、どのように理解されたかを学べるだけでなく、今日我々が世界をどう見ているかの一端をも知ることができるのである。

フロリアン・クルマス

1. VORWORT

Vor hundert Jahren – manchmal interessieren wir uns dafür, was vor hundert Jahren war; weil runde Zahlen suggestiv sind; weil wir eine Einteilung für unser historisches Gedächtnis brauchen; weil hundert Jahre eine Zeitspanne sind, die länger ist, als unsere persönliche Erinnerung reicht, und weil wir deshalb bereit sind zu glauben, daß, was vor hundert Jahren geschah und immer noch erinnert wird, wichtig ist.

Vor hundert Jahren war Japan im Krieg, und das war – an herkömmlichen Maßstäben gemessen – wichtig, denn auf ganz andere Weise als zehn Jahre zuvor im Japanisch-Chinesischen Krieg markierte dieser, der Russisch-Japanische Krieg, Japans Anspruch auf einen Platz in der ersten Reihe unter den Großen der Welt. Kein anderes Ereignis hat Japans Großmachtstreben so viel Auftrieb gegeben.

Im Russisch-Japanischen Krieg ging es um Korea und die Mandschurei, beides Gebiete an der Peripherie des chinesischen Kaiserreichs, das aus innerer Schwäche und unter dem Druck der westlichen Mächte zerfiel und nicht mehr in der Lage war, seinen Einflußbereich nach außen zu sichern. Auf dem Festland sah Japan seine Zukunft. Rußland suchte im Fernen Osten nach eisfreien Häfen und drang mit dem Bau der mandschurischen Eisenbahn bis nach Port Arthur vor. Man kam sich ins Gehege.

Das wissen wir und vieles mehr. Aber wissen wir wirklich, was damals geschah? Und was wußte man damals, fernab von der Front in Europa, vom Kriegsgeschehen, von den Gründen des Krieges, von den kriegführenden Parteien? Die in dieser Ausstellung versammelten Bilder und die ihnen beigefügten Erläuterungen gewähren Einblicke. Der Wert dieser Bilder ist nicht, daß sie uns Details vom Kampf um Port Arthur oder von der Überquerung des Yalu mitteilen. Sie bergen für uns heute eine viel interessantere Botschaft, die brandaktuell ist. Sie halten uns vor Augen, wie man sich von dem Geschehen ein Bild machte. Als ein frühes Massenmedium vermittelten die Bilderbogen den Betrachtern eine Vorstellung von Ereignissen, deren Zeugen sie nicht waren. Aus heutiger Sicht springt der große Abstand zwischen der Darstellung und dem, was „wirklich geschah“, ins Auge und erinnert uns gleichzeitig daran, daß dieser Abstand durch das trügerische Medium der Fotografie, mit dem uns über heutige Kriege berichtet wird, keineswegs geringer geworden ist. So lernen wir von den Bilderbogen nicht nur, wie die Welt vor hundert Jahren aussah und wie sie gesehen wurde, sondern auch ein wenig, wie wir sie heute sehen.

Florian Coulmas

ヨーロッパの近代日本に対する認識を大きく左右したのが、1894–95 年の日清戦争であり、1904–05 年の日露戦争での日本の勝利であった。軍事大国だと立証したことによって、極東の島国であった日本は、はじめてヨーロッパから対等な存在として認められたのである。とりわけ、すでに日本陸軍の近代化に大きく貢献したドイツも、日本を一等国とみなすようになった。一方、新興国日本に対する脅威、差別的思考もなお根強いものがあったことは、「黄禍論」といったスローガンや皇帝ヴィルヘルム 2 世の「フン族演説」などからもうかがえよう。しかし、どちらの立場をとるにせよ、日本が当時軍事大国の筆頭格とみなされていたロシア帝国に勝利をおさめたことは、ドイツならびにヨーロッパが日本に対する認識を改めるため、きわめて重要な役割を演じたのである。

「日本におけるドイツ年」の一環として、また日露戦争百周年を記念して開催される本展覧会は、ちょうど一世紀前にドイツやヨーロッパがどのように日本を受容していたのかを示そうとするものである。展示品の中心をなすのは、「一枚絵」（Bilderbogen）としてはヨーロッパ最大の規模を持つ、ノイルッピン市美術館版画新聞コレクションの収集物である。一枚絵の中の一つのジャンルである「版画新聞」とは、絵入り新聞の前身であり、19 世紀及び20世紀初頭における典型的なマスメディアであった。当時ニュースは、版画新聞として挿絵入りのかたちで広められた。東アジアの政治状況が版画新聞に登場しはじめたのは、19 世紀の半ば以降のことであった。これらの版画新聞は、東アジアがどのように認識されていたのか、またドイツやヨーロッパの日本イメージはどのようなものであったのか、を目に見える形で示してくれる。すなわち、その後の日独関係を規定することとなった決定的な時期に、政治史的にも文化史的にもきわめて興味深い同時代史料といえよう。版画新聞以外には、ヨーロッパで発行された絵葉書、日本に残る錦絵、石版画などが展示に含まれる。

スヴェン・サーラ

2. EINLEITUNG

Die Perzeption des modernen Japan in Europa wurde maßgeblich beeinflußt durch die japanischen Siege in den Kriegen gegen China 1894/95 und das zaristische Rußland 1904/05. Erst durch den Beweis der militärischen Stärke wurde das fernöstliche Inselreich in Europa und gerade in Deutschland, das viel zur Modernisierung des japanischen Militärs beigetragen hatte, als gleichberechtigt anerkannt. Andererseits verdeutlichten Slogans wie der von der „Gelben Gefahr" oder die „Hunnenrede" Kaiser Wilhelms II. anhaltende Ressentiments gegenüber der jungen Großmacht Japan bzw. Ostasien insgesamt. In jedem Falle spielte der Sieg Japans über das damals als militärische Großmacht angesehene Zarenreich eine überaus wichtige Rolle im Zusammenhang mit der deutschen und europäischen Perzeption von Japan.

Im Rahmen des „Deutschland in Japan"-Jahres und zeitgleich mit dem hundertjährigen Jahrestag des Russisch-Japanischen Krieges soll die Ausstellung – vor allem anhand von Bilderbogen aus der Bilderbogengalerie Neuruppin, der größten Bilderbogensammlung Europas – die deutsche und europäische Japan-Rezeption vor hundert Jahren veranschaulichen. Bilderbogen sind Vorläufer der Illustrierten und waren ein frühes Massenmedium im 19. und frühen 20. Jahrhundert, durch das u. a. „illustrierte" Nachrichten verbreitet wurden. Seit Mitte des 19. Jahrhunderts findet auch die Politik Ostasiens Eingang in die Inhalte dieser Bilderbogen, was von einem großen Interesse in der Öffentlichkeit an den Vorgängen im Fernen Osten zeugt. Die in dieser Ausstellung präsentierten Bilderbogen sind politisch und kulturhistorisch aufschlußreiche Zeitdokumente, welche die damalige Wahrnehmung Asiens und das deutsche bzw. europäische Japanbild in einer für die deutsch-japanischen Beziehungen entscheidenden Periode veranschaulichen. Während japanische Farbholzdrucke und Litographien aus dem Chinesisch-Japanischen Krieg und dem Russisch-Japanischen Krieg bereits einen hohen Bekanntheitsgrad besitzen, sind uns die in dieser Ausstellung zusammengeführten Medien bisher nur wenig vertraut.

Neben deutschen Bilderbogen, die sich mit dem Russisch-Japanischen Krieg in seiner Zeit beschäftigten, werden noch weitere europäische Medien ausgestellt, nämlich deutsche, österreichische und französische Postkarten, Erinnerungsliteratur von nach Ostasien entsandten Journalisten und Militärs sowie auch einige japanische Farbdrucke *(sekihanga)* und Farbholzdrucke *(nishiki-e)*, die bereits von Zeitgenossen als Sammelobjekte ihren Weg nach Europa fanden.

Sven Saaler

　色彩豊かな「一枚絵」が、これまでノイルッピンで作られたどんな製品にもまして、ブランデンブルク州のこの町をドイツ中に知らしめた。ドイツのほとんどの家庭には、このような一枚絵が飾られていた。ノイルッピンの一枚絵によって、家庭や「庶民」の作業場に最新のニュース画像がもたらされ、子供たちが、広い世界はどんなものか、関心を持つようになった。

　一枚絵は、時代の移り変わりによって大きく変化したメディアである。技術的な面で、木版画は石版画にとってかわられた。当初は手漉きの紙に、型を使い手作業で極彩色に着色された一枚絵が、19 世紀末には安価な紙にカラー印刷されるようになった。また技術の変遷と同様に、様式、題材、内容も変化していった。大人のための宗教画や時事的な画像（版画新聞）から、年寄りも子供も対象とした風刺画も作られた。さらには子供のための遊び道具、切りぬきおもちゃまで、さまざまなものが一枚絵として売られた。今日、19 世紀の一枚絵と言われるもののほとんどが、ビーダーマイヤー（Biedermeier、1815 年～ 1848 年までのドイツ・オーストリアにおける芸術様式）の風俗画と滑稽な絵物語である。だが、これらは一枚絵というメディアが辿ってきた大きな変化の歴史において、数千に及ぶ題材のほんの一部に過ぎない。一枚絵の 3 分の 1 弱が宗教的題材、4分の1強が時事問題であった。

　時事問題を扱う一枚絵は、19 世紀の中頃から、世界の最新のできごとを描くものとして、今日の写真週刊誌やテレビのような役割を果たしていた。その日のうちにというわけにはいかないが、事件の 2 週間から 3 週間後には、手刷りで彩色を施した版画が発送できる状態になっていた。もちろん 150 年前の人々も、口伝えや回覧版などの方法で、ノイルッピンの一枚絵より早く、国内外でなにが起きているか、情報を得ていた。だが、人の話はあやふやであるし、当時の新聞はまだモノクロで、挿画はなかった。そうした時代に、彩色画が、ともかく詳しいタイトルと説明つきで、ノイルッピンからやって来たのである。一枚絵が人気を博した理由は、文字通り「絵（画像）」を提供したところにある。そしてこれらの絵は、二つの意味で多彩であった。一つには、事実それらの絵は直接的な意味でカラフルであり、彩りが豊かだった。他方、造形のドラマチックな内容と斬新な形態において、つまりは比喩的な意味で多彩であった。これらの絵は、実際、デジタル画像の氾濫を知らない当時の人々の心の奥底にある感覚に訴えたのである。ノイルッピンの絵は、人々の記憶に一生残ることもまれではなかった。

　ノイルッピンの出版社は、商業的な理由からしてもドラマチックな題材を好んで扱った。1840 年から 1920 年の間は言うまでもなく、こうした題材に事欠くことはなかった。一枚絵は流血の事件をいくつも報じている。ノイルッピンの二つの大きな出版社は、事件を報じるに際して、まずは自らが年代記の編者であると感じ、たとえば日露戦争を伝えたときのように、両者に対して公平な描写に努めた。その事実は、描写内容がいかに悲劇的であったとしても、見逃されるべきではないだろう。

ペーター・シュミット

3. MEDIENGESCHICHTLICHER HINTERGRUND: DER BILDERBOGEN, EIN MASSENMEDIUM DES 19. JAHRHUNDERTS

Bunte Bilderbogen machten die brandenburgische Stadt Neuruppin – mehr als jedes andere hier jemals hergestellte Produkt – weit über die Landesgrenzen bekannt und populär. Fast jeder Haushalt in den deutschen Landen besaß einen oder mehrere dieser Drucke. Neuruppiner Bilderbogen brachten in die Häuser und Werkstätten der „kleinen Leute“ ein Bild vom Zeitgeschehen und in die Kinderstuben eine erste Ahnung von der weiten Welt.

Bilderbogen waren nicht zu allen Zeiten gleich. Der Holzschnitt wurde von der Lithographie, dem Steindruck, abgelöst und die als Feder- oder Kreidelithographie zunächst noch auf handgeschöpftem Papier gedruckten und unter Verwendung von Schablonen in leuchtenden Farben in Handarbeit ausgemalten Bogen gegen Ende des 19. Jahrhunderts durch Farbdrucke auf billigem holzhaltigem Papier ersetzt. Wie die Technik, so änderten sich auch Stil, Motive und Inhalte. Von Andachtsbildern und Aktualitätenbogen für Erwachsene über mannigfach variierte Motive aus der älteren populären Druckgraphik über lustige Bildergeschichten für Alt und Jung bis hin zu Ausschneidebogen und Ziehfiguren für Kinder, all das und vieles mehr verkaufte sich als Bilderbogen und war doch sehr verschieden. Die Genrebilder des Biedermeier und die lustigen Bildgeschichten, die man heute zumeist mit dem Bilderbogen des 19. Jahrhunderts gleichsetzt, machten in der wechselvollen Geschichte dieses Mediums nur einen kleinen Teil der in die Tausende gehenden Motive aus. Ein knappes Drittel der Bilderbogen hatte religiösen Inhalt, ein gutes Viertel waren Aktualitätenbogen.

Der Aktualitätenbogen war der Bildreporter seiner Zeit. Bilderbogen waren seit der Mitte des 19. Jahrhunderts für die Darstellung des aktuellen Weltgeschehens das, was heute illustrierte Tageszeitungen oder das Fernsehen sind. Zwar nicht am gleichen Abend, doch nur zwei bis drei Wochen nach dem jeweiligen Ereignis waren die auf Handpressen gedruckten und anschließend schablonenkolorierten Lithographien versandbereit. Natürlich erhielten die Menschen auch vor 150 Jahren auf anderen Wegen – über mündliche Berichte oder umlaufende Zeitungen – schnellere Kunde vom politischen Zeitgeschehen als durch den Neuruppiner Bilderbogen, doch die Rede war vage und die Zeitung damals noch schwarz-weiß und unbebildert. Das farbige Bild zum Ereignis kam – mehr oder minder ausführlich betitelt und erläutert – aus Neuruppin. Der Erfolg des Bilderbogens lag buchstäblich darin, ein Bild zu liefern. Und diese Bilder waren im doppelten Sinne farbig: Zum einen waren sie wirklich bunt, vielfarbig im direkten Sinne, zum anderen waren sie in Inhalt und Form von dramatischer Gestaltung, farbig also im übertragenen Sinn. Ihr Anblick erregte somit die Sinne des Publikums, dem die Flut elektronischer Bilder damals noch unbekannt war. Bilder aus Neuruppin blieben oft ein Leben lang im Gedächtnis.

Dramatische Motive, die bei den Neuruppiner Verlagen schon aus kommerziellen Gründen in hoher Gunst standen, mußten in den Jahren zwischen 1840 und 1920 nicht lange gesucht werden. Das blutige Zeitgeschehen lieferte diese Bilder zuhauf. Daß beide großen Neuruppiner Verlage sich in diesem Geschehen zuerst als Chronisten empfanden und sich – wie in der Berichterstattung zum Russisch-Japanischen Krieg – um eine beiden Seiten gerecht werdende Darstellung bemühten, das sei bei aller Tragik des Dargestellten nicht übersehen.

Peter Schmidt

ノイルッピンの一枚絵を制作した会社の中で、もっとも古いのがキューン社である。製本職人の親方であったヨハン・ベルンハルト・キューン（1750年－1826年）は、1791年、書店のかたわら、本の印刷所を営む権利を得て、1810年頃から一枚絵も制作した。キューンはノイルッピンの一枚絵の創始者とされる。1822年に父親の事業を引継いだ息子のグスタフ・キューン（1794年－1868年）が、1825年に新しい、優れた石版刷り（リトグラフィー）をノイルッピンに導入し、一枚絵の制作は最盛期を迎えた。会社のオーナーとして、同時に営業面と芸術分野の責任者として、グスタフ・キューンは、完成度の高いノイルッピンの一枚絵を作り上げた。彼の孫は1892年、出版社と印刷所を売却した。しかし、会社の名前は残り、グスタフ・キューンのマークで合わせて1万種類を越える一枚絵が生産された。

ノイルッピンの一枚絵を制作したナンバーツーは、エーミケ＆リーメンシュナイダー社である。同社は、キューン社の一枚絵と生産量では肩を並べ、質においては勝っていることも多かった。1828年、フィリップ・エーミケ（1807年－1858年）はノイルッピンに書店を開き、その3年後にヘルマン・リーメンシュナイダー（1806年－1856年）が共同出資者として加わった。二人は1835年、事業を拡大して印刷所を作り、一枚絵の制作を開始した。1861年、この会社の一枚絵制作部門では、10台の手動プレス機に22名の労働者、彩色作業に男性65名、女性20名が働いていた。エーミケ＆リーメンシュナイダー社の名前でも、やはり1万枚を越えるさまざまな一枚絵が制作され、販売された。

ノイルッピンの出版社はヨーロッパ各地の卸売りと取引があり、輸送には船や馬車、あるいは鉄道が使われた。価格は買い取り量に応じて決められ、大幅な割引も行われた。小売り価格は長い間、3ペニヒと変わらなかった。一枚当たりの利益が少なかったため、多量に販売できるような題材を選択することが重要であった。一枚絵の取引は常に大量取引で、長期に利潤を確保するには、部数を増やす以外に道はなかった。とはいえ、一枚絵はよく売れた。遠近を問わず、事件が発生し、そのうわさが広がると、時事問題を扱う一枚絵の需要は高まった。

19世紀の半ば以降、各地で起きた事件に関するさまざまな画像情報が、プロイセン・ブランデンブルクの地方都市ノイルッピンから、世界中に供給された。しかし、毎年数万枚の一枚絵が印刷所と彩色作業場から旅だっていったものの、ノイルッピンの出版社が支配できなかった地域は数多く存在した。国内にも、他のヨーロッパ諸国にも競争相手がいて、成功を収めていることを彼らは知っていた。また、しばしば同じ版下を使ったり、競争相手の版下を使ったりすることさえあった。彼らは時代の趣味に影響を与えたのではなく、それを追いかけた結果、20世紀初めには共に新しいメディア、挿画入り雑誌に屈服することになった。

ペーター・シュミット

4. NEURUPPINER BILDERBOGEN

Das älteste Unternehmen, das in Neuruppin Bilderbogen produzierte, war die Firma Kühn. Der Buchbindermeister Johann Bernhard Kühn (1750–1826), der im Jahre 1791 das Privileg erworben hatte, hier eine Buchdruckerei nebst Buchhandel zu betreiben, stellte seit etwa 1810 auch Bilderbogen her. Er gilt als der Begründer der Neuruppiner Bilderbogen. Unter seinem Sohn Gustav Kühn (1794–1868), der im Jahre 1822 das väterliche Geschäft übernommen und 1825 den modernen und leistungsfähigen Steindruck (Lithographie) in Neuruppin eingeführt hatte, erlebte die Bilderbogenproduktion ihre eigentliche Blüte. Als Inhaber und zugleich kaufmännischer und künstlerischer Leiter des Unternehmens prägte Gustav Kühn das charakteristische Erscheinungsbild des Neuruppiner Bilderbogens. Seine Enkel verkauften im Jahre 1892 Verlag und Druckerei. Der Firmenname blieb jedoch bestehen, so daß unter dem Signet Gustav Kühn insgesamt mehr als 10 000 verschiedene Bogen produziert worden sind.

Der zweite große Neuruppiner Bilderbogenverlag, die Firma Oehmigke & Riemschneider, war dem Kühnschen Unternehmen quantitativ ebenbürtig und qualitativ oftmals überlegen. 1828 hatte Philipp Oehmigke (1807–1858) in Neuruppin eine Buchhandlung eröffnet, in die drei Jahre später Hermann Riemschneider (1806–1856) als Teilhaber eintrat. 1835 erweiterten die Buchhändler ihr Unternehmen um eine Druckerei und begannen mit der Produktion von Bilderbogen. 1861 beschäftigte die Firma in ihrer Bilderbogenabteilung an 10 Handpressen 22 Arbeiter und 65 männliche und 20 weibliche Colorierer. Auch unter dem Namen Oehmigke & Riemschneider wurden in Neuruppin mehr als 10 000 verschiedene Bogen hergestellt und vertrieben.

Die Geschäftsbeziehungen der Neuruppiner Verlage reichten zu Großhändlern in ganz Europa, geliefert wurde per Schiff, Fuhrwerk oder Bahn. Die Preise richteten sich nach der abgenommenen Menge und es gab umfangreiche Rabatte. Im Detailhandel wurde der einzelne Bogen über lange Zeit unverändert zu drei Pfennigen verkauft. Bei den geringen Verdienstmargen pro Bogen war es wichtig, Motive anzubieten, die mit hohen Auflagen verkauft werden konnten. Das Geschäft mit Bilderbogen war stets ein Massengeschäft; wirtschaftlicher Gewinn ließ sich dauerhaft nur mit hohen Auflagen erzielen. Aber die Bilderbogen fanden lebhaften Absatz. Die Nachfrage setzte bei Aktualitätenbogen fast unmittelbar mit der Kunde von fernen und nahen Ereignissen ein.

Seit Mitte des 19. Jahrhunderts mochte es aus Neuruppiner Sicht fast erscheinen, als ob die Völker dieser Erde nur von hier – aus einer brandenburgisch-preußischen Kreisstadt – das Bild der Welt, zumindest ein Bild von den Geschehnissen und Merkwürdigkeiten dieser Welt, geliefert bekamen. Doch trotz zehntausender Bogen, die in jedem Jahr die Neuruppiner Druck- und Kolorierstuben verließen, gab es genügend Regionen, deren Märkte die Neuruppiner Verleger nicht beherrschten. Sie kannten die Erzeugnisse ihrer deutschen und europäischen Konkurrenten und auch deren Erfolge. Sie benutzten oftmals die gleichen Vorlagen und manches Mal auch die der Konkurrenz; sie prägten nicht den Zeitgeschmack, sondern folgten ihm – und sie unterlagen schließlich am Anfang des 20. Jahrhunderts gemeinsam einem neuen Medium, der illustrierten Presse.

Peter Schmidt

Der Baum der Liebe.

Mitten zwischen grünen Blättern,
Auf dem schönen Liebesbaum,
Saß ein Heer von Liebesgöttern
Oben in der Aeste Raum,
Braun und blond und schwarz von Haaren,
Rund und schlank, von jungen Jahren,
Alle herzlich sind betrübt,
Daß sie noch kein Mädchen liebt.
Christelchen und Gustchen gingen
An dem Liebesbaum vorbei,
Hörten Sehnsuchtslieder singen
Und ihr Herz brach morsch entzwei.

Ha! das kommt uns ganz gelegen,
Laß uns schnell den Baum umsägen,
Alle haben wir sie dann, —
Und sie fingen hurtig an.
Fiekchen kam herbei geflogen,
Sah das Wunder auch mit an,
Schnell hat sie am Strick gezogen,
Sich zu schütteln einen Mann;
Hannchen will es kühnlich wagen,
Mit dem Stock herab zu schlagen
Dort den Herrn mit Stock und Hut
Was thut doch die Liebesglut! —

Doch die zärtliche Dorinde
Blickt mit schmachtend-süßem Blick
Nach dem Baume, ob sie finde
Für ihr Herz der Liebe Glück. —
Ein Husar blitzt durch die Blätter,
Emma läuft nach einer Letter,
Steigt, voll Freude, schnell hinan
Und holt sich den Kriegesmann.
Auf der tiefsten Aeste einen,
So, daß man ihn greifen kann,
Sah man einen Alten weinen. —
Magarethchen schleicht heran,

Schnell ward er herab gezogen
Und im Tanz davon geflogen,
Lieber einen Alten dann,
Als am Ende keinen Mann. —
Holder, lieber Baum der Liebe;
Wo befindest du dich doch!?
Mit dem sehnsuchtvollsten Triebe
Sucht dich manches Mädchen noch.
Der mit der Champagnerflasche,
Mit der immer leeren Tasche,
Wenn er's noch so arg auch treibt,
Wird am Ende doch beweibt.

No5778. Neu-Ruppin zu haben bei Gustav Kühn

BILDERBOGEN

Alle Bilderbogen sind eine Leihgabe des Bilderbogen-Dokumentationszentrums Neuruppin

展示されている一枚絵・版画新聞はすべてノイルッピン一枚絵資料センター *(Bilderbogen-Dokumentationszentrums Neuruppin)* 所蔵

NO. 5778

Der Baum der Liebe

愛の樹



NO. 6695
Wilhelm I. Deutscher Kaiser
König von Preussen und
seine Gemahlin
Kaiserin Königin Augusta
zur Feier der goldenen
Hochzeit am 11. Juni 1879

ドイツ皇帝ヴィルヘルム1世と皇妃アウグスタ
1879年6月11日、金婚式のために

NO. 1918
Neue bildliche Darstellung verschiedener Zeitwörter

新現代語図解




Die Geburt des Heilandes Jesu Christi
Die Weisen aus dem Morgenlande
Ich steh' an Deiner Krippe hier,
O Jesu, Du mein Leben;
Zu Dir komm' ich und schenke Dir,
Was Du mir hast gegeben.
Nimm hin, es ist mein Geist und Sinn,
Herz, Seel' und Muth, nimm Alles hin
Und laß' Dir's wohlgefallen.
Kommt, laßt uns niederfallen
Vor unserm Mittler Jesus Christ,
Ihn preisen, daß er Allen
Erretter, Freund und Bruder ist.
Er gleicht der Morgensonne
In ihrem ersten Strahl,
Verbreitet Licht und Wonne
Und Leben überall.
Von ihm strömt Heil und Gnade
Auf unsre Welt herab;
Er führt auf lichtem Pfade
Uns über Tod und Grab.
Original u. Eigenthum. №1587.
Neu-Ruppin, zu haben bei Gustav Kühn

◁ NO. 1587

Die Geburt des Heilandes Jesu Christi und Die Weisen aus dem Morgenlande

救世主イエス・キリストの誕生／東方の三博士

▶



▷ NO. 2838

Ankleide-Puppen

着せ替え人形

プロイセンがドイツ諸領邦の最初にして唯一の国家として日本と外交関係を樹立したのは、ペリー来航によって日本が開国を余儀なくされてから7年後のことであった。1861年1月24日、オイレンブルク伯爵は、江戸幕府と日普修好通商条約を調印した。本条約は、いわゆる不平等条約であって、他の同様の条約を結んだ諸国と同じく、プロイセンにも治外法権や関税決定権が付与されていた。この条約を基礎として、1890年代にはいるまで、プロイセン（ドイツ）は日本との交流をすすめた。

プロイセン、そして1871年に成立したドイツ帝国が有していた東アジアにおける権益は、イギリス、ロシア、アメリカ合衆国と比較すれば、わずかなものであった。ドイツの東洋政策は経済・商業の領域に限られており、対日姿勢も基本的に友好的で控えめなものであった。他の西洋諸国が外交上のイニシアチブをとったため、ドイツは自己の権益に抵触する場合のみ共同歩調を取るのが常であった。一方、日本は、1870年代以降の近代化の過程で、法制度、憲法、軍事などの分野を西洋から学びはじめ、そのなかでドイツも次第に重要視するようになった。

交流が盛んとなった1880年代に入ると、ドイツは日本が近代化する上でなくてはならない存在とみなされるようになった。医学、教育、科学、技術、法律や政治制度に関する西洋の知識を移入するべく、ドイツ人の教師や専門家が多数招へいされた。こうした近代化のため、ドイツから数々の援助がなされたが、日本がもっとも頼りとしたのは軍事面での支援であった。日本は、強力な陸軍を作り上げ、軍事力をテコにして国際的な舞台に踊り出ようとしていた。

1894年、日清戦争が勃発すると、長年続いてきた東京とベルリンのあいだの友好関係に齟齬が生じた。ドイツはロシアとフランスとともに三国干渉に参加し、戦勝国日本に中国の遼東半島の獲得を断念させた。それだけではない。ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世は「黄禍論」を唱えて、軍事大国日本の指導下にアジアが統一され、将来欧米の脅威となる、と訴えた。

1904年2月に始まった日露戦争は、西洋列強が非西欧の国家に打ち破られた最初の戦争となった。この戦争によって明治日本が欧米と対等な立場を勝ち取ったことは、誰の目にも明らかであった。1905年以降、日本は国際的名声を得るようになった。このことは、「文明国」として認められるか否かはその国の軍事的な力次第である、という考えを日本国内にますます広めることになった。

1898年、ロシアは三国干渉によって、日本が返還した遼東半島を租借し、また1900年の義和団の乱に際しては満州を占領した。これにより日露両国の関係は目に見えて悪化してきた。ロシアは繰り返し満州からの撤兵を約束しながら、実際にはその部隊を部分的に撤退させたにすぎず、緊張緩和にむけた真摯な努力をおこなわなかった。日本の当時の関心は朝鮮を自己の勢力圏として保持し、ロシア勢力の進出をできる限り食い止めることにあった。ロシアとの関係悪化に直面した日本は、背面の援護をイギリスに求め、1902年に日英同盟締結に成功した。

日露両国の勢力範囲を画定しようとする東京とサンクト・ペテルブルクのたび重なる交渉も決裂し、1904年2月8日、日本は旅順港のロシア艦隊に対する奇襲攻撃をもって日露戦争に突入した。続く18ヶ月間にわたって日

5. HISTORISCHER HINTERGRUND

Sieben Jahre nachdem Japan durch das Geschwader des Commodore Perry 1854 „geöffnet" worden war, gelang es Preußen als erstem und einzigem deutschen Staat, offizielle Beziehungen mit Japan aufzunehmen. Der von Graf Eulenburg am 24. Januar 1861 mit dem Shogunat ausgehandelte Vertrag war ein sogenannter „Ungleicher Vertrag", der Preußen, wie auch den anderen Vertragsmächten, bestimmte Vorrechte einräumte. Er blieb bis in die 1890er Jahre hinein die Geschäftsgrundlage der deutsch-japanischen Beziehungen.

Im Vergleich zu England, Rußland und den USA hatten sowohl Preußen als auch ab 1871 das Deutsche Reich an Ostasien nur geringes Interesse. Da sich die deutsche Politik in Ostasien vorwiegend auf die Wirtschafts- und Handelsbeziehungen stützte, war die deutsche Haltung gegenüber Japan eher freundlich-zurückhaltend. Man überließ diplomatische Initiativen anderen westlichen Mächten und schloß sich diesen an, sofern sie im deutschen Interesse lagen. Deutschland erlangte seit den 1870er Jahren für Japan im Rahmen des beginnenden Modernisierungsprozesses immer größere Bedeutung, da Japan im Westen nach Vorbildern für Rechtssystem, Verfassung, Militär und andere Fachgebiete suchte.

Insbesondere in den 1880er Jahren, die einen intensiven Austausch brachten, war Deutschland als Lehrmeister in zentralen Bereichen der japanischen Modernisierung sehr begehrt. Deutsche Instrukteure und Experten wurden von Japan engagiert, um westliches Wissen über Medizin, Erziehung, Wissenschaft, Technik, Recht und Verfassung zu vermitteln. Vor allem die deutsche Modernisierungshilfe im militärischen Bereich wurde in Japan hoch geschätzt und trug entscheidend dazu bei, dem modernen Japan eine schlagkräftige Armee zu schmieden, die zur Grundlage für seinen Aufstieg in der internationalen Arena werden sollte.

Der Ausbruch des Chinesisch-Japanischen Krieges im Jahre 1894 sollte die langjährigen freundlichen Beziehungen zwischen Berlin und Tokyo allerdings trüben. Nicht nur beteiligte sich Deutschland zusammen mit Rußland und Frankreich an der Intervention von Shimonoseki (Triple-Intervention), die das siegreiche Japan um den territorialen Gewinn der Liaodung-Halbinsel in China brachte. Der deutsche Kaiser Wilhelm II. vergiftete das bilaterale Klima auch mit seiner Propaganda von der „Gelben Gefahr", der Gefahr eines vereinten Asien unter Führung des militärisch starken Japan.

Im Russisch-Japanischen Krieg, der im Februar 1904 ausbrach, wurde erstmals eine westliche Großmacht von einer nicht-westlichen Nation besiegt. Meiji-Japan hatte sich durch den Waffengang für alle sichtbar seinen Eintritt in den Kreis der gleichberechtigten Großmächte erkämpft. Die Anerkennung, die Japan nach 1905 allgemein erfuhr, bestätigte das Inselreich allerdings auch in der Annahme, daß Anerkennung als „zivilisierte" Macht in erster Linie auf militärischer Stärke beruhte.

Die Beziehungen zwischen Rußland und Japan hatten sich seit dem russischen Erwerb der Liaodung-Halbinsel als Pachtgebiet 1898 und der russischen Besetzung der Mandschurei im Gefolge des Boxer-Aufstandes 1900 dramatisch verschlechtert. Trotz diverser Evakuierungsversprechen zog Rußland seine Truppen aus der Mandschurei nur partiell ab und trug wenig zu einer Entspannung bei. Japan war damals vor allem an der Sicherung Koreas als japanisches Einflußgebiet gelegen und wollte Rußland möglichst weit von seinen Grenzen fernhalten. Angesichts

本陸軍は破竹の進撃を続け、これを西洋の各メディアは感嘆をもって報道した。さらに1905年1月の旅順要塞の陥落、奉天会戦（1905年3月）、日本海海戦（1905年5月27日）と日本軍の勝利は続き、ロシアの抗戦意欲は打ち砕かれた。ロシア国内では、革命の騒乱が拡大しつつあったため、極東での戦争継続は困難な状況になっていった。しかし、日本もまた国庫が底をつき、これ以上の戦争の続行ができなくなる寸前の状況に追い込まれた。

アメリカ大統領セオドア・ルーズベルトの仲介によって1905年8月29日に調印されたポーツマス和平条約の結果、日本は領土を拡張することはできた。だが、賠償金の獲得はならなかった。ロシアに対する戦勝はたしかに周囲の尊敬を集め、日本を政治的軍事的強国の地位に押し上げた。しかし同時に西洋において日本に対する敵意をも増大させることにもなった。その急先鋒として、ドイツ皇帝が以前よりも激しい調子で黄禍論を主張しはじめるのは、それから間もなくのことであった。

ロルフ・ハラルド・ヴィッピヒ



der sich verschärfenden Beziehungen mit Rußland suchte Japan Rückendeckung bei England, das 1902 der Unterzeichnung eines Bündnisvertrages mit Japan zustimmte.

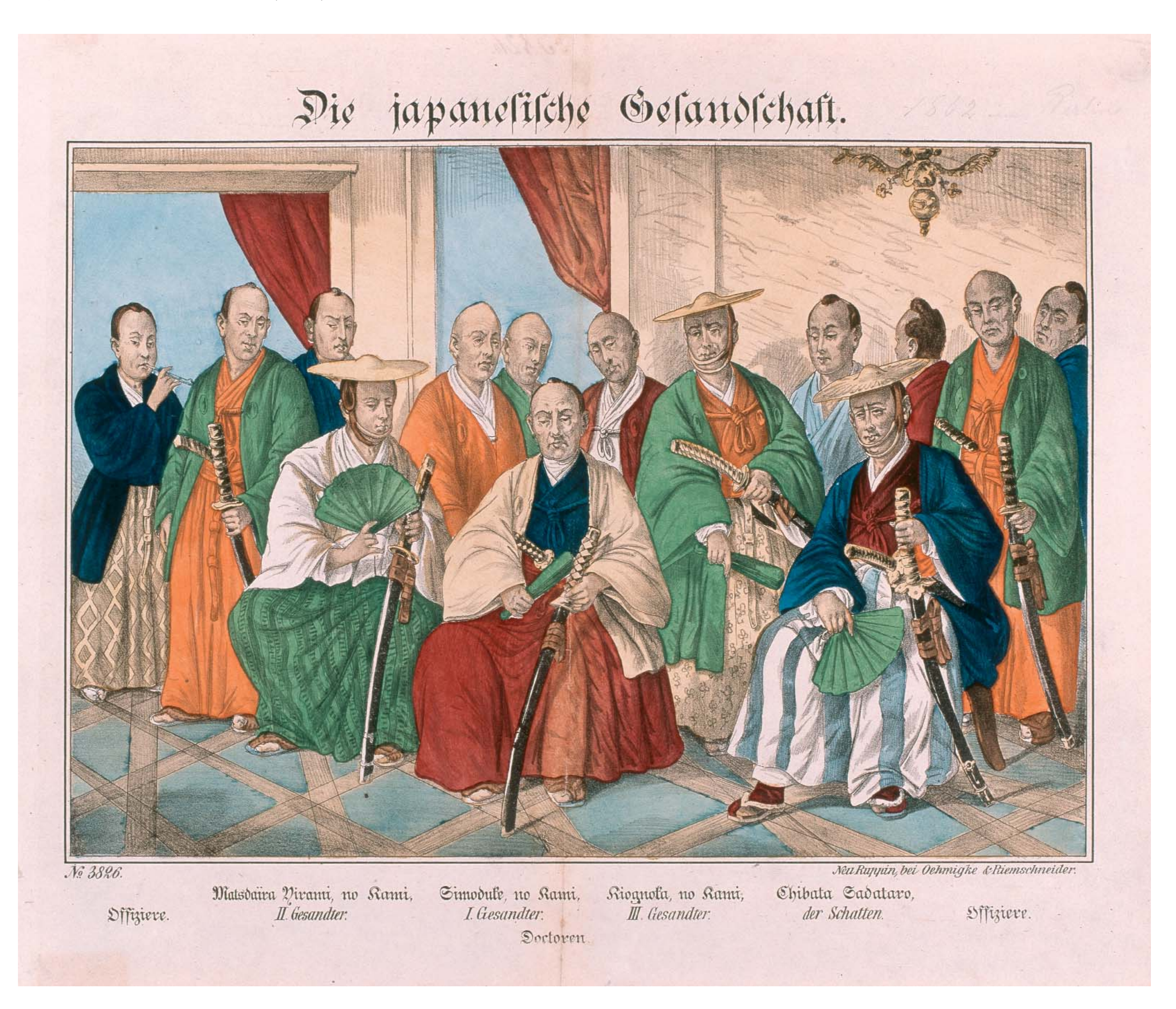
Als Verhandlungen zwischen Tokyo und St. Petersburg über eine Abgrenzung der gegenseitigen Interessensphären letztlich scheiterten, eröffnete Japan mit einem Überraschungsangriff auf die russische Flotte in Port Arthur am 8. Februar 1904 den Krieg gegen Rußland. In den folgenden 18 Monaten sollte die japanische Armee von Sieg zu Sieg stürmen und für viel Aufsehen in den Medien des Westens sorgen. Nach den japanischen Siegen von Port Arthur, das im Januar 1905 kapitulierte, und Mukden (März 1905) sowie in der Seeschlacht von Tsushima (27. Mai 1905) war der russische Durchhaltewillen gebrochen. Obendrein wurde Rußland noch von revolutionären Unruhen im Inneren erschüttert, die das Kriegsengagement in Fernost gefährdeten. Aber auch Japan war finanziell erschöpft und stand am Rande der Kriegsunfähigkeit.

Der Frieden von Portsmouth kam unter Vermittlung des amerikanischen Präsidenten Theodore Roosevelt zustande und wurde am 29. August 1905 unterzeichnet. Japan erhielt territorialen Zugewinn, mußte jedoch auf eine Kriegsentschädigung verzichten. Durch den Sieg über Rußland wurde Japan zu einem allseits respektierten politischen und militärischen Machtfaktor. Gleichzeitig trug der japanische Sieg aber auch zu einer Verstärkung antijapanischer Ressentiments im Westen bei, und schon bald sollte die Propaganda von der „Gelben Gefahr“, wiederum vor allem geschürt vom deutschen Kaiser, lauter als je zuvor wiederaufleben.

Rolf-Harald Wippich

NO. 3826

Die japanesische Gesandtschaft (1862)



◁ NO. 3826

日本使節団（開市開港延期交渉使節団 1861–62 年）
前列左より、（神奈川奉行）副使：松平石見守健直、（外国奉行）正使：竹内下野守保徳、
目付：京極能登守高朗、（外国奉行支配）組頭：柴田貞太郎（柴田日向守剛中）。その他後列は随員たち。

NO. 4483

Empfang der japanesischen Gesandtschaft durch Wilhelm I. (1862) • Bild siehe Seite 27

Empfang der japanesischen Gesandtschaft durch Se. Majestät König Wilhelm I. von Preußen im Weißen Saale des Schlosses zu Berlin

Der Wunsch, den Behstand des Volkes durch immer neue und erweiterte Handelsbeziehungen zu heben und zu fördern, hatte die preußische Regierung veranlaßt im Jahre 1860 eine Expedition zur See nach dem fernen Hinterasien zu senden, um wo möglich mit dem Kaiserthum Japan Handelsverträge abzuschließen und Beziehungen der Freundschaft und des wechselseitigen Verkehrs anzuknüpfen. Das Unternehmen war nicht leicht, denn das japanesische Volk schließt sich gegen Fremde beinahe eben so sehr ab wie die Chinesen, und der preußische Name war bis dahin den Japanesen fast gänzlich unbekannt, die preußische Flagge eine nie gesehene. Gleichwohl gelang es den Bemühungen der preußischen Gesandtschaft, welche sich auf der abgesandten Flotte befand, Zutritt zu finden am Hofe des Kaisers von Japan und zu JEDDO, der Hauptstadt des Landes, einen Freundschafts- und Handelsvertrag zwischen Preußen und Japan abzuschließen, wie es in neuerer Zeit auch andere europäische Nationen, die Engländer, Franzosen, Holländer und Russen gethan haben.

Da beschloß der Kaiser von Japan im Jahre 1862 auch seinerseits eine Gesandtschaft nach Europa zu schicken, um den mit ihm verbündeten Monarchen die Versicherung seiner Freundschaft zu überbringen. Sie erhielt den Auftrag, die Höfe von London, Paris, Haag, Berlin und Petersburg zu besuchen und die europäischen Verhältnisse durch eigene Anschauung kennen zu lernen. So erschien die japanesische Gesandtschaft, an ihrer Spitze drei eingeborene Fürsten, im Juli 1862 auch in Berlin. Es war die erste, welche jemals einen europäischen Hof besucht hat, und überall erregte die Erscheinung der fremdartigen Gestalten in der Nationaltracht ihres Volkes Aufsehen und Bewunderung. Ihr Gesicht ist erdfarben, ihr Haar auf dem Scheitel in einen Zopf verbunden, der Ausdruck ihre Züge ernst und verständig. Ihre Tracht besteht in Beinkleidern, die bis auf die Füße reichen, und über denselben einen langen Kaftan von buntfarbiger Seide; an der Seite tragen sie ein langes, spitzes Schwert. In Berlin erhielten sie Audienz bei Sr. Majestät dem König Wilhelm im Weißen Saale des Königlichen Schlosses. In japanesischer Sprache hielt das Haupt der Gesandtschaft eine Anrede an den König, welche zuerst von einem Dolmetscher in's Holländische, dann von einem zweiten in's Deutsche übersetzt wurde, und auf demselben Wege antwortete Se. Majestät der König, nachdem er ein eigenhändiges Schreiben des Kaisers von Japan aus den Händen des Gesandten in Empfang genommen hatte.

No. 4483

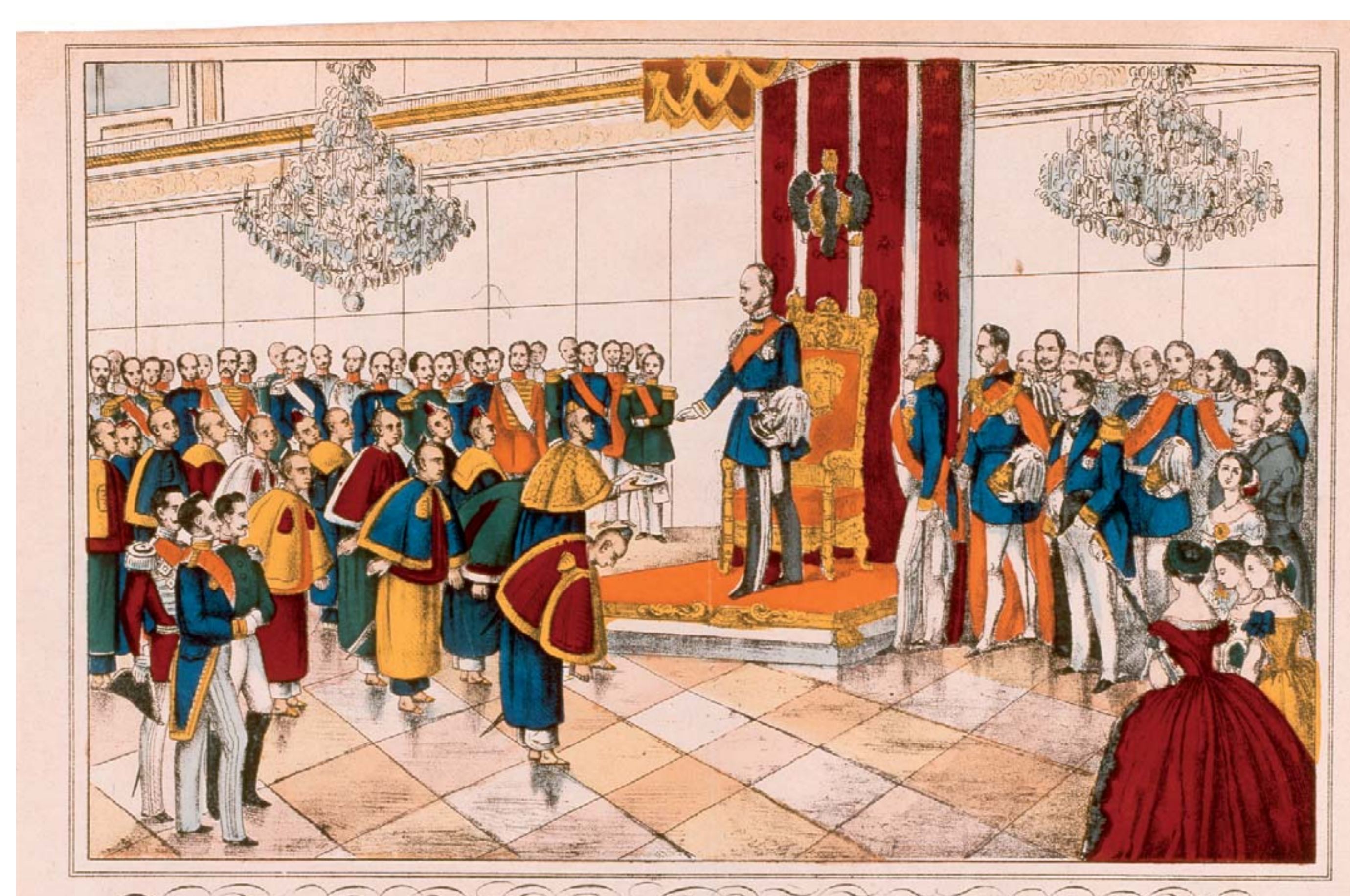
日本使節団、プロイセン国王ヴィルヘルムＩ世と謁見　（ベルリン王宮・白の間にて）

アジア諸国と貿易することによって国民の福利を増進しようとの考えから、プロイセン政府は、1860年、遠征隊をインド洋経由で極東アジアの奥地へと派遣した。その狙いは、日本帝国とのあいだに通商条約を締結し、友好関係と相互交流を促進することにあった。この遠征隊の任務は容易なものではなかった。日本人は、中国人と同様、外国人に対して敵対的であった。また、プロイセンの名前は彼の地でほとんど知られておらず、プロイセンの旗がひるがえったことも皆無だった。派遣された艦隊に乗船していた使節団は、苦労の末に日本皇帝の港に入り、首都江戸において、プロイセンと日本の通商修好条約を調印することができた。この条約は、すでにイギリス、フランス、オランダ、ロシアなど他のヨーロッパ諸国が結んだものと同じものである。

日本皇帝（第14代将軍徳川家茂（いえもち））は、1862年、同盟を結んだ諸君主に友好の誼を伝えるべく、使節団をヨーロッパに派遣することを決めた。使節団は、ロンドン、パリ、ハーグ、ベルリン、ペテルブルクの諸宮廷を歴訪するとともに、ヨーロッパの事情を実地に見聞せよとの命を承けた。かくして、3人の侯爵（奉行）に率いられた日本使節団が1862年6月、ベルリンに到着したのであった。これは彼らがヨーロッパの宮廷を訪れた最初であり、その民族衣装をまとった珍奇ないでたちは、いたるところで驚きをもって迎えられた。彼らの顔貌は土色をしており、髪は分け目のところで結わえられ、その立ち居振る舞いは真摯で理性的なものであった。彼らは、足首まで届く袴のうえに色鮮やかな絹でできた長い半上衣をまとい、腰には長く鋭い刀を帯びていた。プロイセン国王ヴィルヘルムＩ世はベルリン王宮の「白の間」において彼らと謁見した。使節団長は国王に対し日本語で挨拶の辞をのべたが、これは一人目の通訳がまずオランダ語に翻訳し、ついで二人目の通訳がさらにドイツ語になおして伝えたのである。使節団から日本皇帝の親書を奉呈されたのち、国王ヴィルヘルム１世は同じ方法で彼らに答辞を返された。

注：版画新聞の説明はドイツ語の説明の翻訳文である。

NO. 4483



Empfang der japanesischen Gesandtschaft durch Se. Majestät König Wilhelm I. von Preußen
im Weißen Saale des Schlosses zu Berlin.

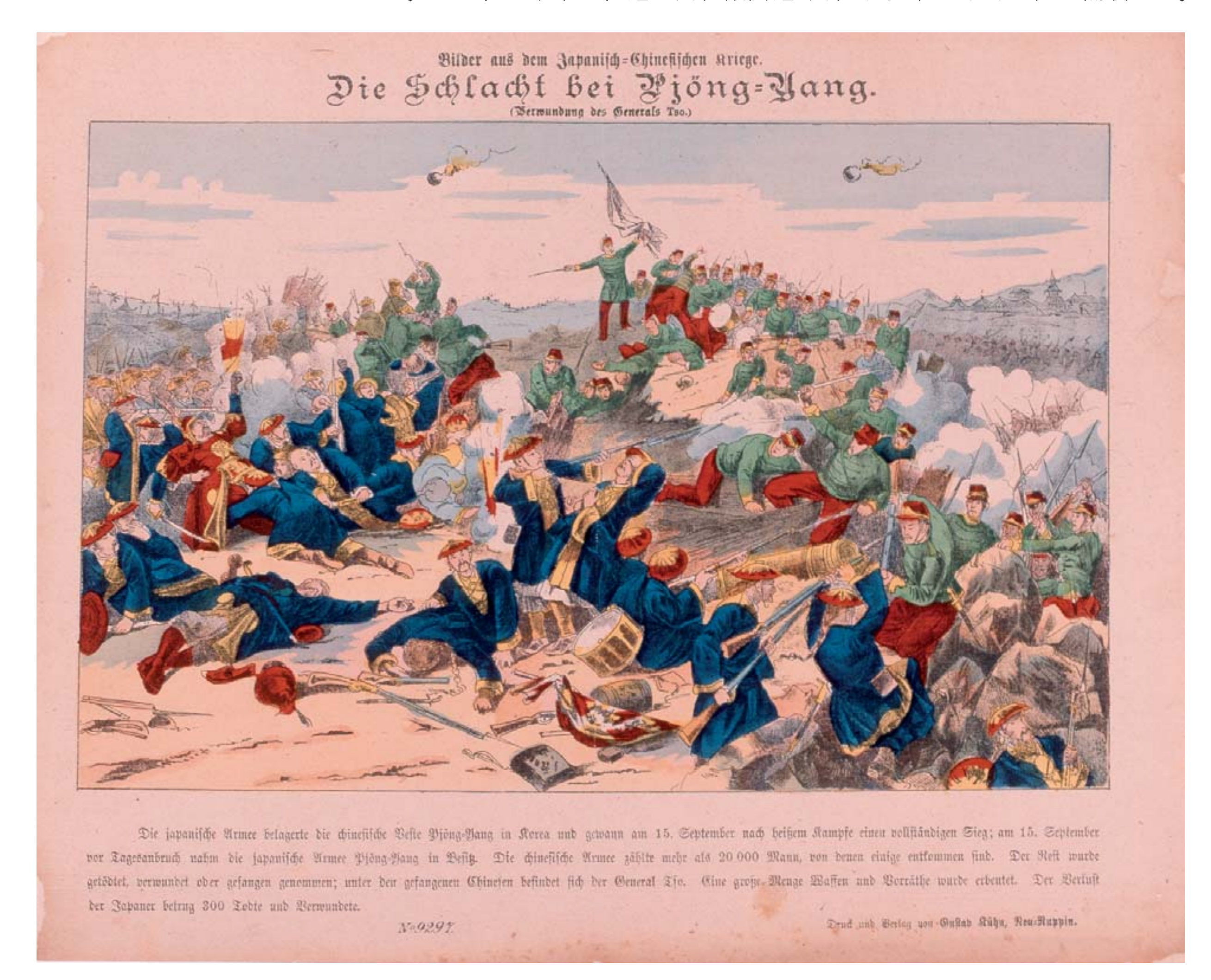
Der Wunsch, den Wohlstand des Volkes durch immer neue und erweiterte Handelsbeziehungen zu heben und zu fördern, hatte die preußische Regierung veranlaßt im Jahre 1860 eine Expedition zur See nach dem fernen Hinterasien zu senden, um wo möglich mit dem Kaiserthum Japan Handelsverträge abzuschließen und Beziehungen der Freundschaft und des wechselseitigen Verkehrs anzuknüpfen. Das Unternehmen war nicht leicht, denn das japanesische Volk schließt sich gegen Fremde beinahe eben so sehr ab wie die Chinesen, und der preußische Name war bis dahin den Japanesen fast gänzlich unbekannt, die preußische Flagge eine nie gesehene. Gleichwohl gelang es den Bemühungen der preußischen Gesandtschaft, welche sich auf der abgesandten Flotte befand, Zutritt zu finden am Hofe des Kaisers von Japan und zu Jeddo, der Hauptstadt des Landes, einen Freundschafts- und Handelsvertrag zwischen Preußen und Japan abzuschließen, wie es in neuerer Zeit auch andere europäische Nationen, die Engländer, Franzosen, Holländer und Russen, gethan haben.

Da beschloß der Kaiser von Japan im Jahre 1862 auch seinerseits eine Gesandtschaft nach Europa zu schicken, um den mit ihm verbündeten Monarchen die Versicherungen seiner Freundschaft zu überbringen. Sie erhielt den Auftrag, die Höfe von London, Paris, Haag, Berlin und Petersburg zu besuchen und die europäischen Verhältnisse durch eigene Anschauung kennen zu lernen. So erschien die japanesische Gesandtschaft, an ihrer Spitze drei eingeborene Fürsten, im Juli 1862 auch in Berlin. Es war die erste, welche jemals einen europäischen Hof besucht hat, und überall erregte die Erscheinung der fremdartigen Gestalten in der Nationaltracht ihres Volkes Aufsehen und Bewunderung. Ihr Gesicht ist erdfarben, ihr Haar auf dem Scheitel in einen Zopf verbunden, der Ausdruck ihrer Züge ernst und verständig. Ihre Tracht besteht in Beinkleidern, die bis auf die Füße reichen, und über denselben einen langen Kaftan von buntfarbiger Seide; an der Seite tragen sie ein langes, spitzes Schwert. In Berlin erhielten sie Audienz bei Sr. Majestät dem König Wilhelm im Weißen Saale des Königlichen Schlosses. In japanesischer Sprache hielt das Haupt der Gesandtschaft eine Anrede an den König, welche zuerst von einem Dolmetscher in's Holländische, dann von einem zweiten in's Deutsche übersetzt wurde, und auf demselben Wege antwortete Se. Majestät der König, nachdem er ein eigenhändiges Schreiben des Kaisers von Japan aus den Händen des Gesandten in Empfang genommen hatte.

Original u. Eigenthum №4483. *Neu Kupf... zu haben bei Gustav Kühn*

NO. 9297
Die Schlacht bei Pjöng-Yang
(Chinesisch-Japanischer Krieg 1894/95)

平壌の戦い(日清戦争、1894年 9月15-16日)
日本陸軍は朝鮮にある清の要塞平壌を包囲し、9月15日払暁、激戦のち勝利を収め、平壌を占領した。2万人を数えた清軍のうち逃れでたものはわずかしかいなかった。残りは殺されるか負傷し、あるいは捕らえられた。捕虜の中には清軍の司令官葉志超も含まれる。大量の武器や軍需物資が捕獲された。日本軍は戦死300名および負傷者若干の損害を受けた。
注：日本軍の損害は死傷者686名、清軍の損害は戦死約2,000名、捕虜約600名であった。また、日本軍は、砲29門、機関砲6門、小銃1,160丁その他を捕獲した。



NO. 306

China-Japan. Slaget ved Pjöng-Yang

(für den holländischen Markt angefertigte Version)

平壌の戦い（日清戦争）（オランダ語版）





Die Einnahme von Wei-hai-wei.

Am Morgen des 6. Februar umzingelte die japanische Flotte die Insel Liu-Kung-Tao und feuerte auf die Forts und die chinesischen Schiffe. Die Chinesen kämpften verzweifelt. Eines ihrer Geschoße traf den japanischen Kreuzer „Tsukushi" und platzte. Während des Feuers näherten sich die japanischen Torpedoboote den chinesischen Kriegsschiffen und sprengten drei in die Luft. Sofort landete eine japanische Abteilung auf der Insel und vor Eintritt des Abends waren sämtliche Forts in den Händen der Japaner. Die Haltung der Chinesen während der jüngsten Gefechte war gut; sie fochten mit verzweifelter Hartnäckigkeit. Die Verluste sind auf beiden Seiten bedeutend.

NO. 1562

Die Einnahme von Wei-hai-wei (Chinesisch-Japanischer Krieg 1894/95)

威海衛の占領（日清戦争、1895年1月30日-2月12日）

２月６日の朝、劉公島を包囲した日本軍は要塞と清の軍艦に砲撃を開始した。清兵は絶望的な戦いを挑み、日本の巡洋艦筑紫にも砲弾が何発か命中した。日本の水雷艇は清の軍艦に接近、魚雷を放ってそのうちの３隻を粉砕した。日本軍部隊はただちに島に上陸を開始し、日没前にすべての砲台が日本軍の手に落ちた。この最後の戦いの間、清兵の士気態度は良好で、彼らは絶望的なねばり強さを発揮して戦った。両軍ともに損害は少なからぬものがあった。

Am Morgen des 6. Februar umzingelte die japanische Flotte die Insel Liu-King-Tao und feuerte auf die Forts und die chinesischen Schiffe. Die Chinesen kämpften verzweifelt. Eines ihrer Geschoße traf den japanischen Kreuzer „Tsukushi“ und platzte. Während des Feuers näherten sich die japanischen Torpedoboote den chinesischen Kriegsschiffen und sprengten drei in die Luft. Sofort landete eine japanische Abteilung auf der Insel und vor Eintritt des Abends waren sämtliche Forts in den Händen der Japaner. Die Haltung der Chinesen während der jüngsten Gefechte war gut; sie fochten mit verzweifelter Hartnäckigkeit. Die Verluste sind auf beiden Seiten bedeutend.

日露戦争はヨーロッパ中で大きな関心を呼んだ。各国の政府や陸海軍、メディアはこぞって日本側あるいはロシアの側から戦争を観察するべく視察団や記者・特派員を極東に派遣した。特派員の最も有名な代表はすでに当時知名度高い作者のジャック・ロンドンだったが、かれがハースト新聞社から日本に派遣され、スパイ疑惑で拘束されたこともあった。東アジア情勢がこれほど国際的な注目を集めたことは、それまでにはおそらくなかった。あらゆるメディアが極東における時代の推移を詳細に報道した。人々は、一枚絵や絵葉書といった大衆メディアを通じて、はるか東アジアの出来事にはじめて親しく接することになったのである。東アジアが一般市民の世界観の一部として認識されるようになったのは、このときからであった。

一枚絵の出版社も日本とロシアの対立をめぐる関心の高まりに対応し、一連の作品を制作している。これらの一枚絵シリーズは部分的にしか残っていない。高い関心を集めたにもかかわらず、日露戦争に関する描写のすべてが直接の見聞に基づいていたわけではなかった。自前の特派員を送るという贅沢が可能であったメディアは少なかったのである。とりわけ、一枚絵出版社には小規模なものが多く、アジアまで記者を派遣するほどの余裕はどこにもなかった。そのため、その画題の多くは間接的な情報に依拠したものであった。また、こうした日露戦争に関して制作された作品のなかには、当時すでにヨーロッパの子どもたちの人気を集めた紙製の兵隊人形も含まれていた。

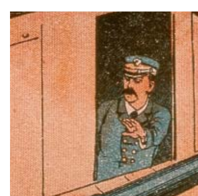
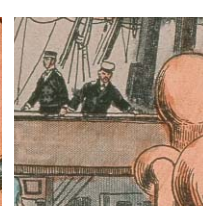
展示されている一枚絵・版画新聞はすべてノイルッピン一枚絵資料センター（Bilderbogen-Dokumentationszentrum Neuruppin）に所蔵されている。

スヴェン・サーラ







6. DER RUSSISCH-JAPANISCHE KRIEG 1904/05 IM SPIEGEL DEUTSCHER BILDERBOGEN

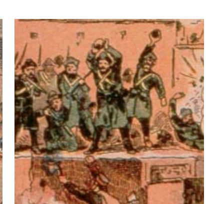
Der Russisch-Japanische Krieg traf allgemein auf großes Interesse in Europa. Regierungen, Armeen und Medien entsandten Beobachter und Korrespondenten nach Fernost, an beide Seiten der Fronten. Einer der berühmtesten unter ihnen war wohl der Schriftsteller Jack London, damals 28-jähriger Journalist des Medienkonzerns Hearst Newspapers. Wahrscheinlich war das Interesse an der Politik Ostasiens niemals zuvor in Europa größer gewesen. Alle Arten von Medien berichteten detailliert über die Ereignisse in Fernost, und durch Massenmedien wie Bilderbogen oder auch Postkarten wurden erstmals die Vorgänge im fernen Ostasien in einem breiten Teil der Bevölkerung wahrgenommen. Ostasien wurde Teil des Weltbildes der allgemeinen Bevölkerung.

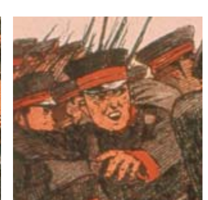
Auch die Verleger von Bilderbogen demonstrierten großes Interesse an den Auseinandersetzungen zwischen Japan und Rußland und veröffentlichten Serien über das Kriegsgeschehen. Viele der Motive beruhen auf Vorlagen aus zweiter Hand, denn die kleineren Verlage konnten sich, Gegensatz zu großen Tageszeitungen, den Luxus eines Asien-Korrespondenten nicht leisten. In den Serien befinden sich auch Vorlagen für Pappsoldaten, schon damals nicht unumstrittenes Spielzeug für die Jugend in ganz Europa.

Alle Bilderbogen sind eine Leihgabe des Bilderbogen-Dokumentationszentrums Neuruppin.

Sven Saaler

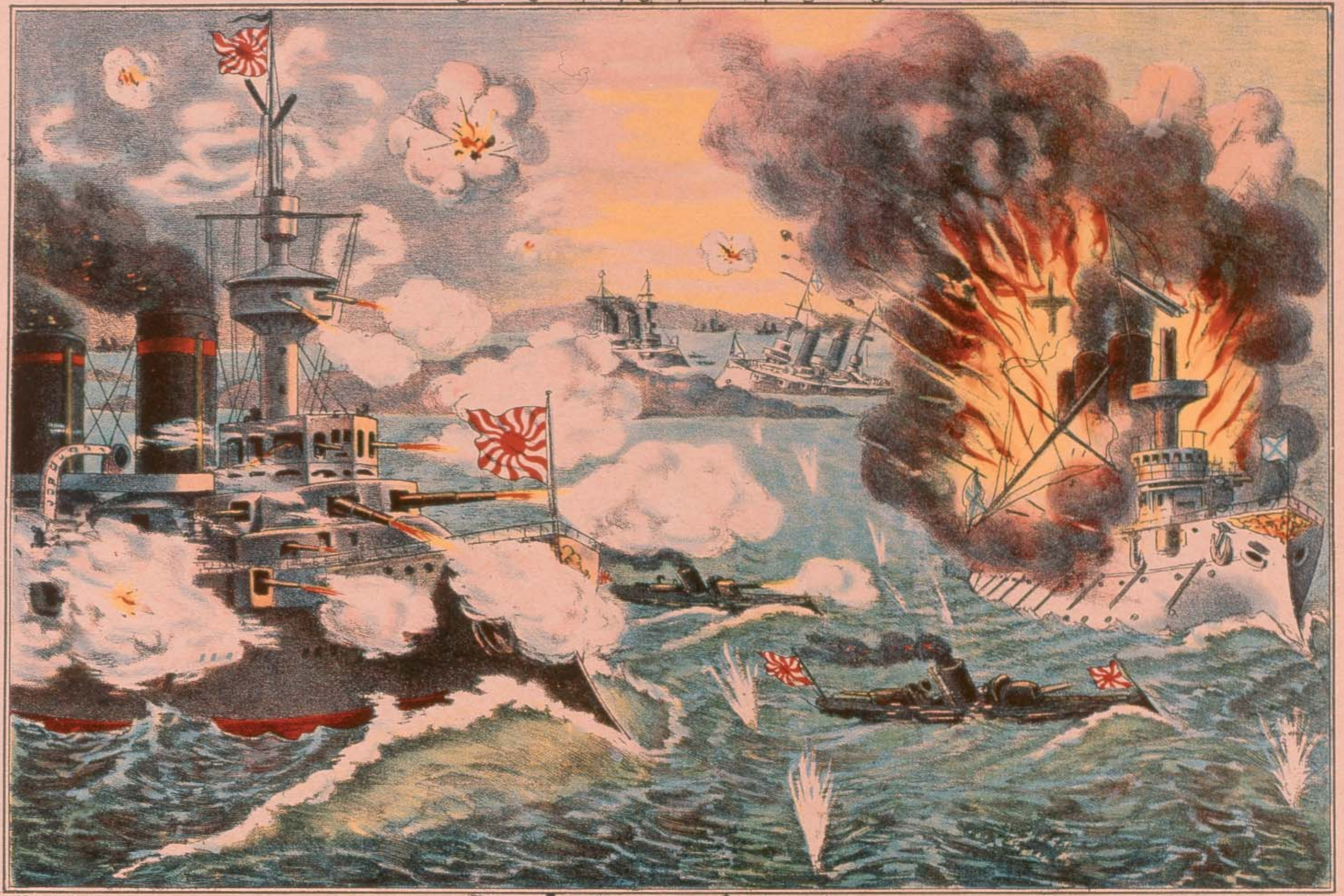







Der Russisch-Japanische Krieg.



No. 10001.

Das Treffen von Tschemulpo.

Neu-Ruppin, bei Oehmigke & Riemschneider.

Ein japanisches Geschwader traf am 8. Februar auf dem Wege nach dem koreanischen Hafen Tschemulpo das russische Kanonenboot, „Korejetz". Letzteres nahm offensive Haltung an und feuerte auf die japanischen Torpedoboote, deren Gegenschüsse fehl gingen. Am Morgen des 9. Februar verließen auf Aufforderung des Kommandanten des japanischen Geschwaders zwei russische Kriegsschiffe den Hafen und es entspann sich bei den vorliegenden Inseln ein, über eine Stunde dauernder Geschützkampf, worauf ein russisches Kriegsschiff sich zurückzog und ein russischer Kreuzer sank, nachdem auf demselben eine Explosion stattgefunden hatte. Auch der „Korejetz" soll gleichfalls gesunken sein. Die Offiziere und Mannschaften der gesunkenen Schiffe wurden vom französischen Kreuzer „Pascal" aufgenommen.

Verlag Oehmigke & Riemschneider, Neuruppin　エーミケ＝リームシュナイダー社（ノイルッピン）

NO. 10001

Das Treffen von Tschemulpo

チェムルポ
済物浦の海戦



チェムルポ　インチョン
済物浦（仁川）沖の海戦（1904年2月8–9日）

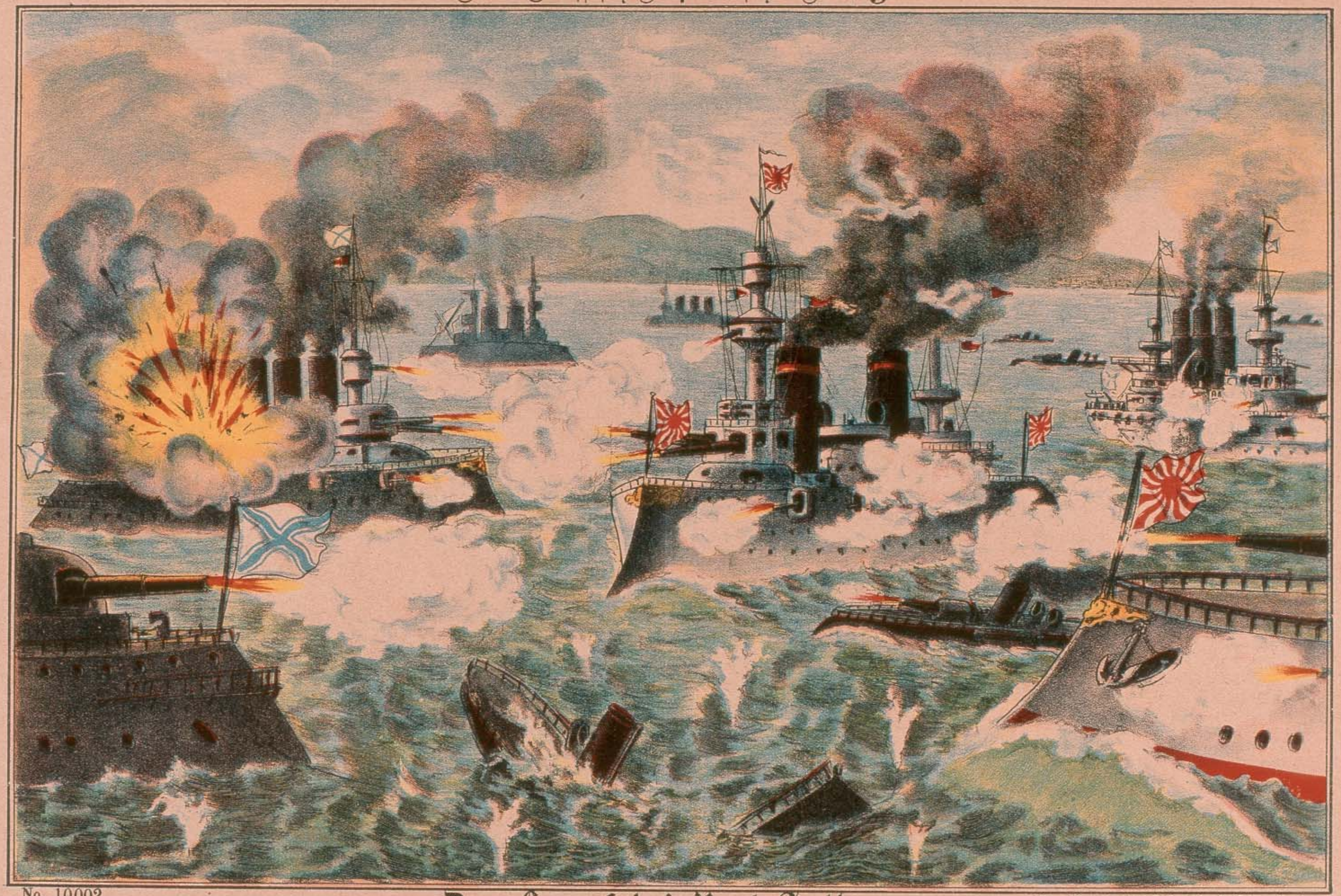
2月8日、朝鮮の仁川に向けて航行中の日本海軍の一戦隊（第二艦隊第四戦隊）は、ロシア海軍の砲艦コレーツに遭遇した。ロシア艦は攻撃態勢を取り、日本の水雷艇に向けて砲火を開いた。日本側も応射したがこれは命中しなかった。2月9日朝、日本戦隊司令官（瓜生外吉海軍少将）の要求により2隻のロシア艦は仁川港を出港し、両軍は港前面の島の周辺で一時間以上にわたって砲撃戦を展開した。その結果ロシア艦の一隻は退却し、もう一隻は爆発を起こした後に沈没した。コレーツも同時に沈没したとされる。撃沈された艦の士官と乗組員はフランス巡洋艦パスカルに収容された。

注：ロシア巡洋艦ヴァリャーグと砲艦コレーツは、日本の攻撃を受け仁川港内に引き返し、ロシア輸送船スンガリー号もあわせて、自爆した。

Ein japanisches Geschwader traf am 8. Februar auf dem Wege nach dem koreanischen Hafen Tschemulpo das russische Kanonenboot, „Korejetz“. Letzteres nahm offensive Haltung an und feuerte auf die japanischen Torpedoboote, deren Gegenschüsse fehl gingen. Am Morgen des 9. Februar verließen auf Aufforderung des Kommendanten des japanischen Geschwaders zwei russische Kriegsschiffe den Hafen und es entspann sich bei den vorliegenden Inseln ein über eine Stunde dauernder Geschützkampf, worauf ein russisches Kriegsschiff sich zurückzog und ein russischer Kreuzer sank, nachdem auf demselben eine Explosion stattgefunden hatte. Auch der „Korejetz“ soll gleichfalls gesunken sein. Die Offiziere und Mannschaften der gesunkenen Schiffe wurden vom französischen Kreuzer „Pascal“ aufgenommen.

Anmerkung:
Die russischen Kreuzer Korejetz und Warjag flüchteten nach einem Angriff der japanischen Flotte in den Hafen von Incheon und wurden hier von der eigenen Besatzung gesprengt.

Der Russisch-Japanische Krieg.



No. 10002.

Neu-Ruppin, bei Oehmigke & Riemschneider.

Der Kampf bei Port Arthur.

Am Morgen des 9. Februar begann die japanische Flotte die Stadt Port Arthur, den inneren Hafen und die Forts zu beschießen. Die russische Flotte lag im Schutze der Forts, die mit den Japanern einen Artillerie-Kampf eröffneten, der über eine Stunde dauerte, und an welchem die russischen Schiffe „Cesarewitsch" und „Retwisan" mit ihren Geschützen sich betheiligten. Das erstgenannte Schiff wurde von einem Torpedo am Heck getroffen, auch die Steuervorrichtungen wurden beschädigt und konnten nicht mehr benutzt werden. Indessen konnte das Schiff noch in den Hafen einlaufen. „Retwisan" mußte sich ebenfalls sehr beschädigt in den Hafen begeben. Ein Kessel des Kreuzers „Pallada" flog, von einem Torpedo getroffen, in die Luft, doch auch dieses Schiff konnte in den Hafen zurückkehren. In diesem See-Kampf sollen die Japaner dagegen noch schwerere Verluste erlitten haben. Vier große Torpedozerstörer sollen völlig leck geschossen, drei Torpedoboote gesunken sein.

Verlag Oehmigke & Riemschneider, Neuruppin　エーミケ＝リームシュナイダー社（ノイルッピン）

NO. 10002

Der Kampf bei Port Arthur

旅順港の戦い（1904 年 2 月 9 日）



2 月 9 日朝、日本艦隊は旅順の市街、内港、要塞を砲撃した。ロシア艦隊を防御する旅順要塞は、日本艦隊と一時間以上に渡って砲撃戦を展開し、ロシア艦ツェサレーヴィチとレトヴィザンもその艦砲をもって参加した。ツェサレーヴィチは艦尾に魚雷一本を受け操舵装置が使用不能に陥り、かろうじて港内に遁入することができた。レトヴィザンも大きな被害を被って帰投を余儀なくされた。さらに巡洋艦パルラーダにも魚雷が命中して汽缶の一つが爆発したが、この艦もなんとか港内に退却することができた。この海戦において、日本艦隊も大きな損害を受けた模様である。4 隻の大型駆逐艦が大破し、水雷艇 3 隻も沈没したという。

注：旅順港の港外に停泊していたロシア太平洋艦隊に対して、9 日深夜、日本の駆逐艦隊が魚雷攻撃を敢行した。ツェザレーヴィチとレトヴィザンが損傷し、パルラーダは座礁した。同日午前、日本艦隊主力が旅順港とロシア艦隊に向けて砲門を開き、敵との砲撃戦となった。主力同士の海戦では、双方とも若干の被害しか被らなかった。

Am Morgen des 9. Februar begann die japanische Flotte die Stadt Port Arthur, den inneren Hafen und die Forts zu beschießen. Die russische Flotte lag im Schutze der Forts, die mit den Japanern einen Artillerie-Kampf eröffneten, der über eine Stunde dauerte, und an welchem die russischen Schiffe „Cesarewitsch“ und „Retwisan“ mit ihren Geschützen sich betheiligten. Das erstgenannte Schiff wurde von einem Torpedo am Heck getroffen, auch die Steuervorrichtungen wurden beschädigt und konnten nicht mehr benutzt werden. Indessen konnte das Schiff noch in den Hafen einlaufen. „Retwisan“ mußte sich ebenfalls sehr beschädigt in den Hafen begeben. Ein Kessel des Kreuzers „Pallada“ flog, von einem Torpedo getroffen, in die Luft, doch auch dieses Schiff konnte in den Hafen zurückkehren. In diesem See-Kampf sollen die Japaner dagegen noch schwerere Verluste erlitten haben. Vier große Torpedozerstörer sollen völlig leck geschossen, drei Torpedoboote gesunken sein.

Anmerkung:
In der Nacht zum 9. Februar griff die japanische Flotte mit Torpedobooten die im Hafen von Port Arthur liegende Pazifikflotte Rußlands an. Die Cesarewitsch und die Retwisan wurden dabei beschädigt und die Pallada lief auf Grund. Am vormittag des gleichen Tages begann die japanische Flotte mit dem Bombardement der russischen Flotte, aber beide Seiten erlitten bei all diesen Gefechten nur leichte Verluste.

Der Russisch-Japanische Krieg.



No. 10004. Neu-Ruppin, bei Oehmigke & Riemschneider.

Erneuter Angriff auf Port Arthur.

Nachdem in der Nacht zum 24. Februar um 1 Uhr ein Angriff der japanischen Schiffe auf den Hafen von Port Arthur von dem russischen Panzerschiff „Retwisan“ und dem Feuer der Forts zurückgewiesen war, erneuerten um 3 Uhr die Japaner ihren Angriff, indem sie versuchten, vor dem Hafen mehrere mit brennenden Stoffen und Steinen gefüllte Dampfer zu versenken, um den russischen Schiffen die Ausfahrt unmöglich zu machen. Wieder eröffneten der „Retwisan“ und die Forts ihr Feuer. Zwei der japanischen Dampfer, welche direkt gegen den „Retwisan“ anfuhren, wucden fast gänzlich vernichtet, und bei Tagesanbruch bemerkte man auf der Rhede vier zerstörte, zum Theil noch brennende japanische Schiffe, während acht japanische Torpedoboote zu den Kriegsschiffen flohen, welche sie auf hoher See erwarteten.

Verlag Oehmigke & Riemschneider, Neuruppin エーミケ＝リームシュナイダー社（ノイルッピン）

NO. 10004

Erneuter Angriff bei Port Arthur

旅順に対する再度の攻撃（第１回旅順港口閉塞作戦）

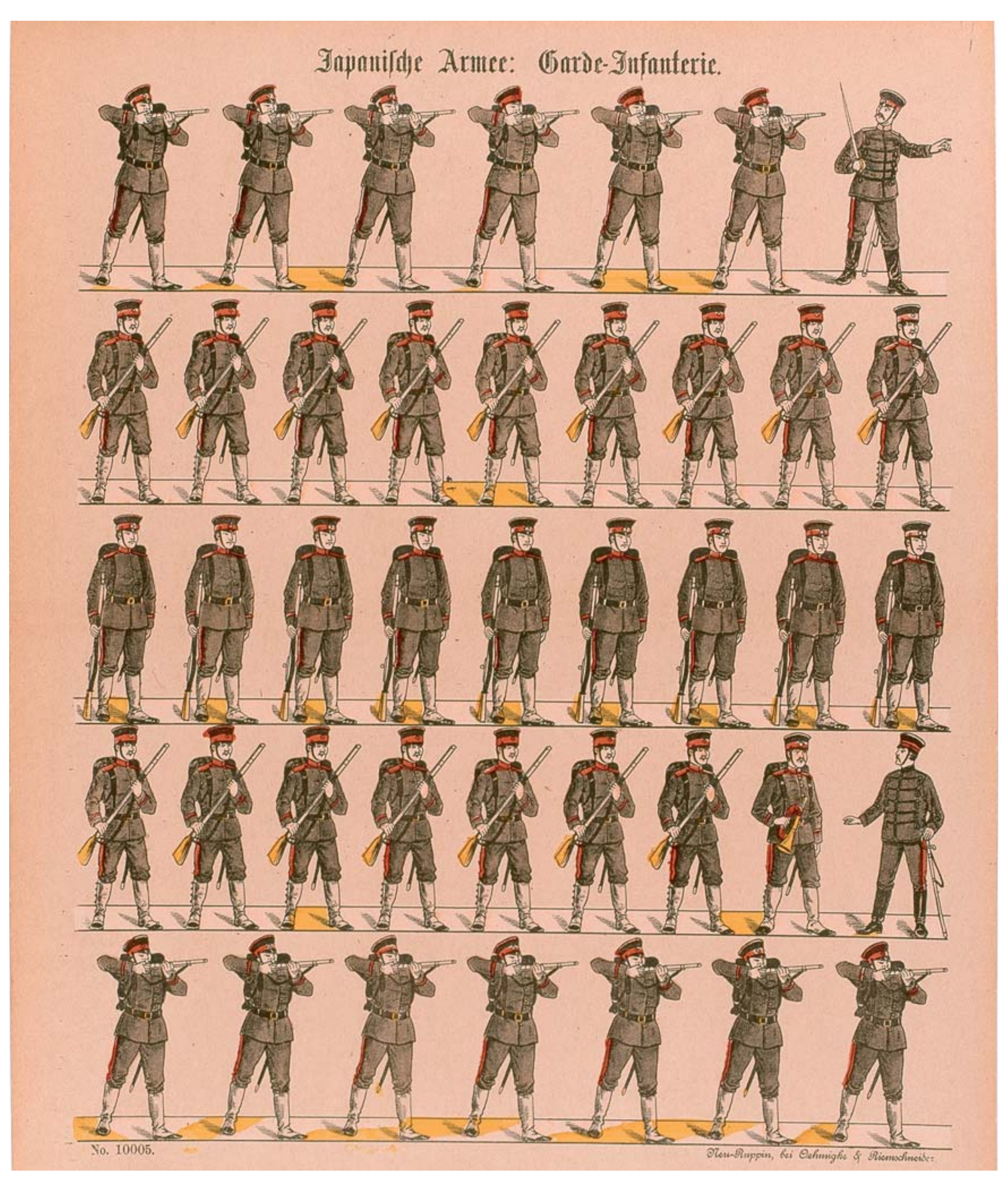


2月24日深夜１時、日本艦隊による旅順港への攻撃は、ロシア戦艦レトヴィザンと要塞からの砲火をあびせたことによって撃退された。だが、同日午前３時に日本軍は再度攻撃を開始した。旅順港前面において爆発物と石を満載した貨物船を自沈させることによって、ロシア艦隊を港内に閉塞しようとしたのだ。再度レトヴィザンと要塞は砲撃を開始した。レトヴィザンに向けて直進してきた２隻の日本貨物船はほとんど完全に破壊された。払暁時には、４隻の日本船が残骸となって一部はなお炎上中であり、さらに８隻の日本水雷艇が外洋で戦艦戦隊と合同するべく退却しつつあるのが目撃された。

注：第１回閉塞作戦では、２隻の老朽船が港口で沈没し、４隻が座礁した。日本側に人的被害はでなかったが、閉塞は失敗に終わった。

Nachdem in der Nacht zum 24. Februar um 1 Uhr ein Angriff der japanischen Schiffe auf den Hafen von Port Arthur von dem russischen Panzerschiff „Retwisan“ und dem Feuer der Forts zurückgewiesen war, erneuerten um 3 Uhr die Japaner ihren Angriff, indem sie versuchten, vor dem Hafen mehrere mit brennenden Stoffen und Steinen gefüllte Dampfer zu versenken, um den russischen Schiffen die Ausfahrt unmöglich zu machen. Wieder eröffneten der „Retwisan“ und die Forts ihr Feuer. Zwei der japanischen Dampfer, welche direkt gegen den „Retwisan“ anfuhren, wurden fast gänzlich vernichtet, und bei Tagesanbruch bemerkte man auf der Rhede vier zerstörte, zum Theil noch brennende japanische Schiffe, während acht japanische Torpedoboote zu den Kriegsschiffen flohen, welche sie auf hoher See erwarteten.

Anmerkung:
Beim ersten Versuch der Blockade des Hafens von Port Arthur wurden zwei ausgediente Schiffe an der Ausfahrt des Hafens versenkt, vier weitere liefen auf Grund. Auf japanischer Seite gab es kaum Verluste, aber der Versuch, den Hafen von Port Arthur zu blockieren, scheiterte.



NO. 10005
Japanische Armee: Garde-Infanterie (Auschneide-Vorlagen für Pappsoldaten)

日本陸軍近衛歩兵
（立像・紙製兵隊人形）

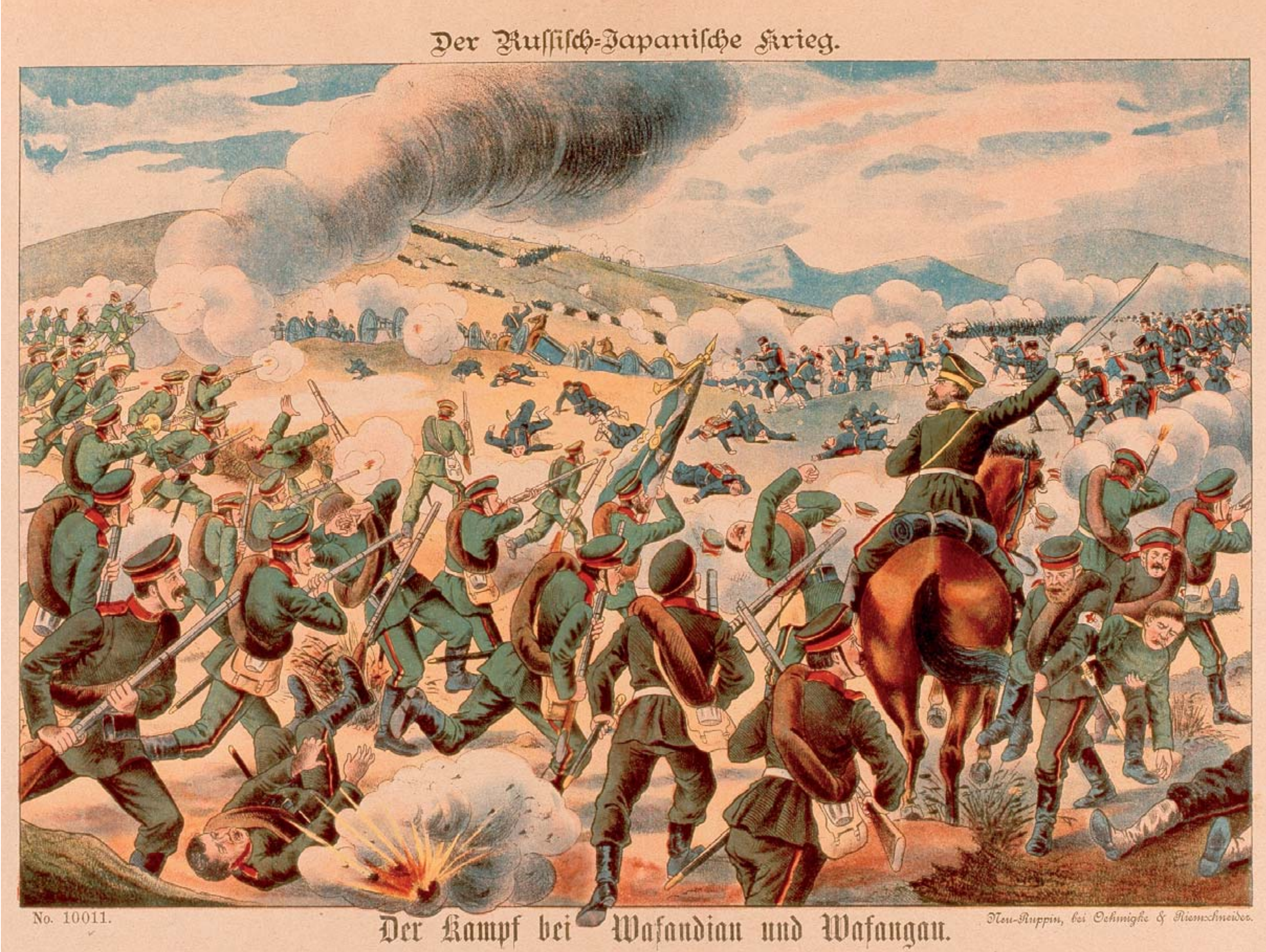
Verlag Oehmigke & Riemschneider, Neuruppin エーミケ＝リームシュナイダー社（ノイルッピン）

NO. 10010
Russen und Japaner im Kampf (Auschneide-Vorlagen für Pappsoldaten)

日露両軍の戦闘
(立像・紙製兵隊人形)



Verlag Oehmigke & Riemschneider, Neuruppin エーミケ＝リームシュナイダー社（ノイルッピン）



Verlag Oehmigke & Riemschneider, Neuruppin　エーミケ＝リームシュナイダー社（ノイルッピン）

NO. 10011

Der Kampf bei Wafandian und Wafangan

瓦房店と瓦房溝の戦い（得利寺の戦い：6 月 14 日）



6 月 14 日の朝、日本軍は三列縦隊の隊形でロシア軍陣地に迫った。日本軍の兵力が優勢であることを知ったロシア軍の一部は、瓦房溝の南 6 露里にある陣地を捨て後退した。午後に入り日本軍はロシア軍の中央部と左翼に対し砲撃を開始し、さらに歩兵による攻撃を繰り返したが、その都度大きな損害を被って撃退された。この激しい戦いは夜に入ってようやく終わりを迎えた。

注：日本の第二軍は、遼東半島に上陸後、北進し、6 月 15 日にロシア軍と大規模な野戦を繰り広げた。日本軍はロシア軍を撃退して、同地を占領した。日本側の死傷者は約 1,100 名、ロシア側は 3,500 名であった。

Am Morgen des 14. Juni rückten drei japanische Kolonnen gegen die Russen vor. Als Letztere die Ueberlegenheit der großen Masse der japanischen Streitkräfte bemerkt hatten, verlegte eine russische Abtheilung ihre Stellung sechs Werft südlich von Wafangan. Nachmittags eröffneten die Japaner ein Artilleriefeuer gegen das Centrum und den linken Flügel der Russen, sowie hartnäckige Infanterie-Angriffe, welche sämmtlich unter großen Verlusten für die Japaner zurückgewiesen wurden. Der überaus erbitterte Kampf fand erst bei einbrechender Dunkelheit sein Ende.

Anmerkung:
Die zweite japanische Armee stieß nach der Landung auf der Liaotung-Halbinsel nach Norden vor, und am 15. Juni begannen größere Kampfhandlungen mit der russischen Armee. Die japanische Armee drängte die russische Armee zurück und besetzte den größten Teil der Halbinsel. Auf japanischer Seite wurden 1.100 Gefallene und Verwundete gezählt, auf russischer Seite 3.500.

Der Russisch-Japanische Krieg.

No. 10012.

Der Kampf von Kaiping.

Neu-Ruppin, bei Oehmigke & Riemschneider.

Am 10. Juli morgens begann der linke Flügel der vor Kaiping stehenden russischen Truppen sich aus seiner Stellung zurückzuziehen, mit der Absicht, die Japaner in die Ebene zu locken. Letztere ließen ihre Artillerie zunächst nicht in Thätigkeit treten, Abends jedoch entspann sich ein heftiges gegenseitiges Geschützfeuer. Die Japaner erlitten im weiteren Vorschreiten ungeheuere Verluste und besetzten Abends Kaiping, nachdem die Russen von diesem strategisch wenig wichtigen Punkt sich zurückgezogen hatten.

Verlag Oehmigke & Riemschneider, Neuruppin　エーミケ＝リームシュナイダー社（ノイルッピン）

NO. 10012
Der Kampf von Kaiping

蓋平会戦（7 月 8–9 日）



7 月 10 日朝、蓋平前面に展開していたロシア軍の左翼は、日本軍を平野部に誘い出すため後退を開始した。当初日本軍は砲兵を投入しなかったが、夜になると両者のあいだに激しい砲撃の応酬が繰り広げられた。日本軍はさらに前進する間に甚大な損害を受け、ロシア軍が蓋平を撤退した後、ようやくこの戦略的にはあまり価値のない地点を占領することができた。

注：日本側の記録では、7 月 8–9 日に小競り合いが起きた程度で、すぐにロシア軍が撤退した、とされている。

Am 10. Juli morgens begann der linke Flügel der vor Kaiping stehenden russischen Truppen sich aus seiner Stellung zurückzuziehen, mit der Absicht, die Japaner in die Ebene zu locken. Letztere ließen ihre Artillerie zunächst nicht in Thätigkeit treten, Abends jedoch entspann sich ein heftiges gegenseitiges Geschützfeuer. Die Japaner erlitten im weiteren Vorschreiten ungeheuere Verluste und besetzten Abends Kaiping, nachdem die Russen von diesem strategisch wenig wichtigen Punkt sich zurückgezogen hatten.

Anmerkung:
Gemäß den japanischen Aufzeichnungen gab es am 8. und 9. Juli nur kleine Gefechte ohne größere Verluste für Japan, während die russische Armee sich schnell zurückzog.

Der Russisch-Japanische Krieg.

No. 10030.

Die Schlacht bei Liaujang.

Neu-Ruppin, bei Oehmigke & Riemschneider.

Nach mehrtägigem blutigen Kampf ging am 3. September das Zentrum und der linke Flügel der japanischen Armee von Neuem zum Angriff auf die russischen Stellungen bei Liaujang vor und bemächtigte sich des größesten Theils der von den Russen mit großer Tapferkeit vertheidigten, vor Liaujang gelegenen Verschanzungen bei Sitwankau. Nach weiteren sehr schweren Kämpfen an diesem fünften Tage der Schlacht gewannen die Japaner unter großen Verlusten die Oberhand und die durch die langen Kämpfe geschwächte russische Armee mußte sich nach dem nördlich von Liaujang gelegenen Jantai zurückziehen.

Verlag Oehmigke & Riemschneider, Neuruppin　エーミケ＝リームシュナイダー社（ノイルッピン）

NO. 10030
Die Schlacht bei Liaujang

遼陽会戦（8 月 26 日 –9 月 4 日）



何日にも及ぶ血なまぐさい戦いののち、日本軍は 9 月 3 日、遼陽周辺のロシア軍陣地に対して中央と左翼から新たな攻勢を開始した。ロシア軍は遼陽郊外の首山堡塁を勇敢に防衛したものの、その大部分が日本軍の手に落ちた。会戦の第五日目になると、大きな損害を出しつつも日本軍の優勢はついに明白になり、長期にわたる戦闘で弱体化したロシア軍は、遼陽の北の烟台まで後退を余儀なくされた。

注：日本軍 13 万 5 千人、ロシア軍 22 万 5 千人が激突した戦闘。双方とも、2 万人以上の死傷者を出した。

Nach mehrtägigem blutigen Kampf ging am 3. September das Zentrum und der linke Flügel der japanischen Armee von Neuem zum Angriff auf die russischen Stellungen bei Liaujang vor und bemächtigte sich des größesten Theils der von den Russen mit großer Tapferkeit vertheidigten, vor Liaujang gelegenen Verschanzungen bei Sitwankau. Nach weiteren sehr schweren Kämpfen an diesem fünften Tage der Schlacht gewannen die Japaner unter großen Verlusten die Oberhand und die durch die langen Kämpfe geschwächte russische Armee mußte sich nach dem nördlich von Liaujang gelegenen Jantai zurückziehen.

Anmerkung:
Bei der Schlacht von Liaujang trafen 225 000 russiche Soldaten auf 135 000 japanische. Auf beiden Seiten gab es über 20 000 Gefallene und Verwundete.



Verlag Oehmigke & Riemschneider, Neuruppin　エーミケ＝リームシュナイダー社（ノイルッピン）

NO. 10034

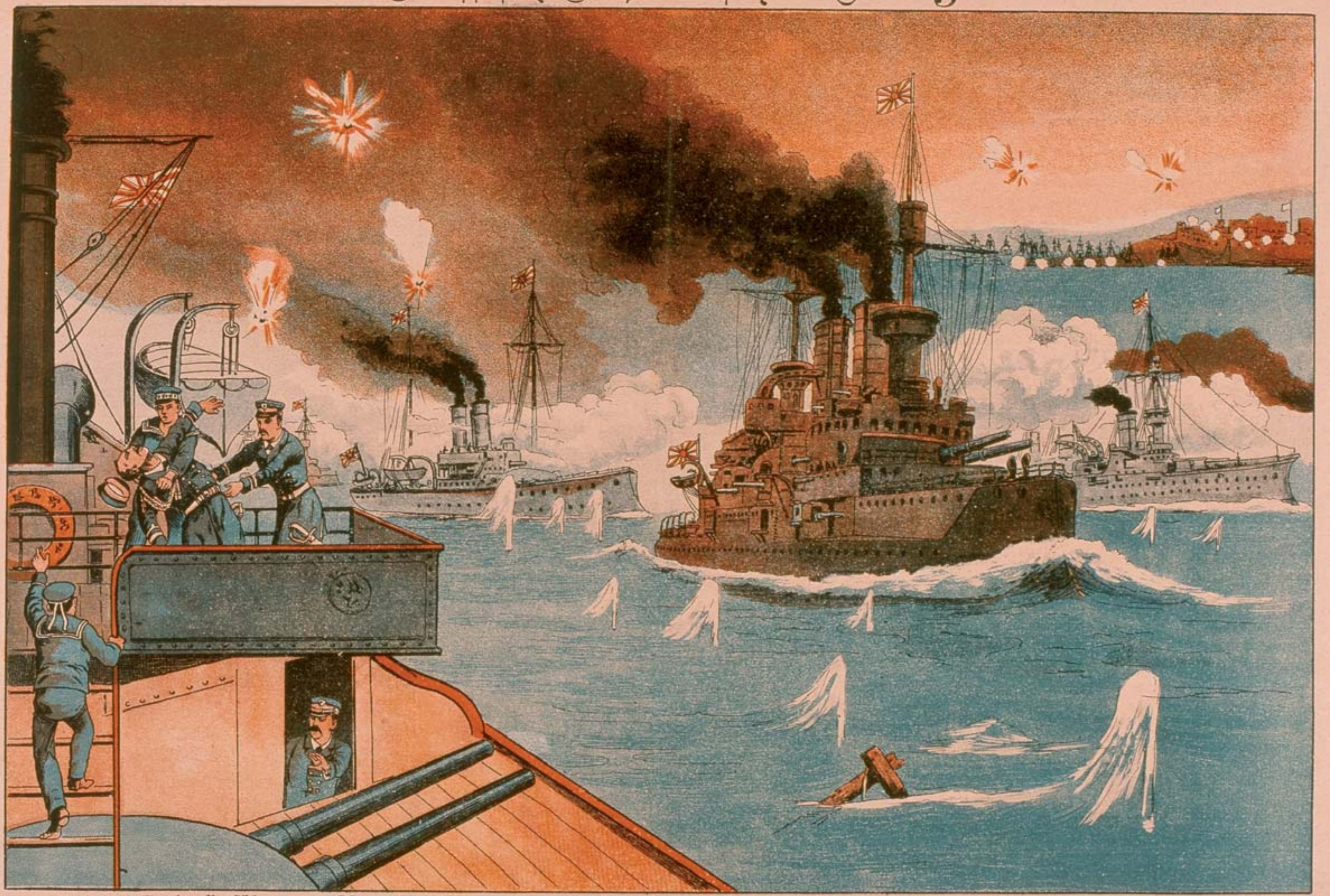
Die Kapitulation von Port Arthur

旅順の陥落（1905 年 1 月 2 日）



ステッセリ将軍の率いるロシア軍は、長期間にわたってあらゆる手段を尽くし、勇猛果敢に防衛戦を戦ってきた。だが、1905 年 1 月 2 日、ついに旅順要塞を日本包囲軍に明けわたさざるを得なくなった。数日前に日本軍は松樹山堡塁の胸壁を爆破して同堡塁を占領することに成功していた。弱体なロシア軍守備隊は一掃されてしまい、日本軍は寺溝東北高地からＨ砲台に至る線の全域に渡って進出、さらにそこからは容易に望台要塞に突進することが可能となった。勇将ステッセリ将軍も、もはやこれ以上の抵抗は無意味であることを悟り、要塞全軍に降伏を命じた。彼と彼の部隊は日本軍により名誉ある待遇を受けた。この長い勇敢な防衛戦の間に、祖国に命を捧げた者は数千人を数え、また傷病兵もさらに数千人に達した。

Nach gänzlicher Erschöpfung seiner Vertheidigungsmittel und nach sehr langer und außerordentlich tapferer Gegenwehr hat der russische General Stoessel sich genöthigt gesehen die starken Festungen von Port Arthur am 2. Januar 1905 den belagernden Japanern übergeben zu müssen. Letztere hatten die Brustwehr das Fort Sungschuschan einige Tage zuvor in die Luft gesprengt und dann dieses Fort besetzt. Nach weiterer Vertreibung der sehr geschwächten Russen verfiel auch die ganze Linie des Panlungschan- und des H-Forts der Besatzung durch die Japaner, denen hiernach auch die Erstürmung das Fort Wangtai mit leichter Mühe gelang. Der tapfere General Stoessel, jeden weiteren Widerstand für nutzlos haltend, ließ hierauf die Gesammtfestung kapitulieren, worauf ihm und dem Rest der Besatzung alle militärischen Ehren von den Japanern erwiesen wurden. Viele Tausende haben bei der langen und tapferen Vertheidigung ihr Leben ihrem Vaterlande geopfert. Viele Tausende liegen verwundet und krank darnieder.



Russisch-Japanischer Krieg.

Original und Eigenthum Nr. 9758.

Bombardement und Seegefecht von Port Arthur.

Neuruppin, zu haben bei Gustav Kühn.

In der Nacht vom 8. auf den 9. Februar, bevor noch die offizielle Kriegserklärung erfolgt war, machten die Japaner um Mitternacht einen Torpedoboot-Angriff auf die russische Flotte, die im Dunkel der Nacht ahnungslos auf der Rhede von Port Arthur lag. Die Russen wurden völlig überrascht und noch ehe ihre Scheinwerfer in Aktion getreten waren, hatten die Japaner bereits drei der besten russischen Schiffe „Zesarewitsch", „Retvisan" und „Pallada" kampfunfähig gemacht. Am nächsten Morgen griffen darauf 15 japanische Panzerschiffe und Kreuzer die russische Flotte an und eröffneten ein verheerendes Feuer auf diese sowie auf Port Arthur.

Die Russen erwiderten das Bombardement aus den mit modernen Geschützen förmlich gespickten Küstenbatterien, der Festung und vom Geschwader aus. Die japanische Flotte, die es auf eine Überrumplung Port Arthurs abgesehen, mußte sich später zurückziehen, ohne diesen Zweck erreicht zu haben, hatte aber auch in diesem Treffen ihre Überlegenheit über die russische Flotte gezeigt, denn russischerseits sind die Panzerschiffe „Poltawa" und die Kreuzer „Novik", „Diana" und „Askold" im Kampfe derartig mitgenommen, daß sie außer Gefecht gesetzt werden mußten. Es sind somit am ersten Tage des Krieges bereits 7 der besten Schiffe Rußlands kampfunfähig.

Verlag Gustav Kühn, Neuruppin　グスタフ・キューン社（ノイルッピン）

NO. 9758

Bombardement und Seegefecht von Port Arthur

旅順港への砲撃と海戦（旅順港奇襲）

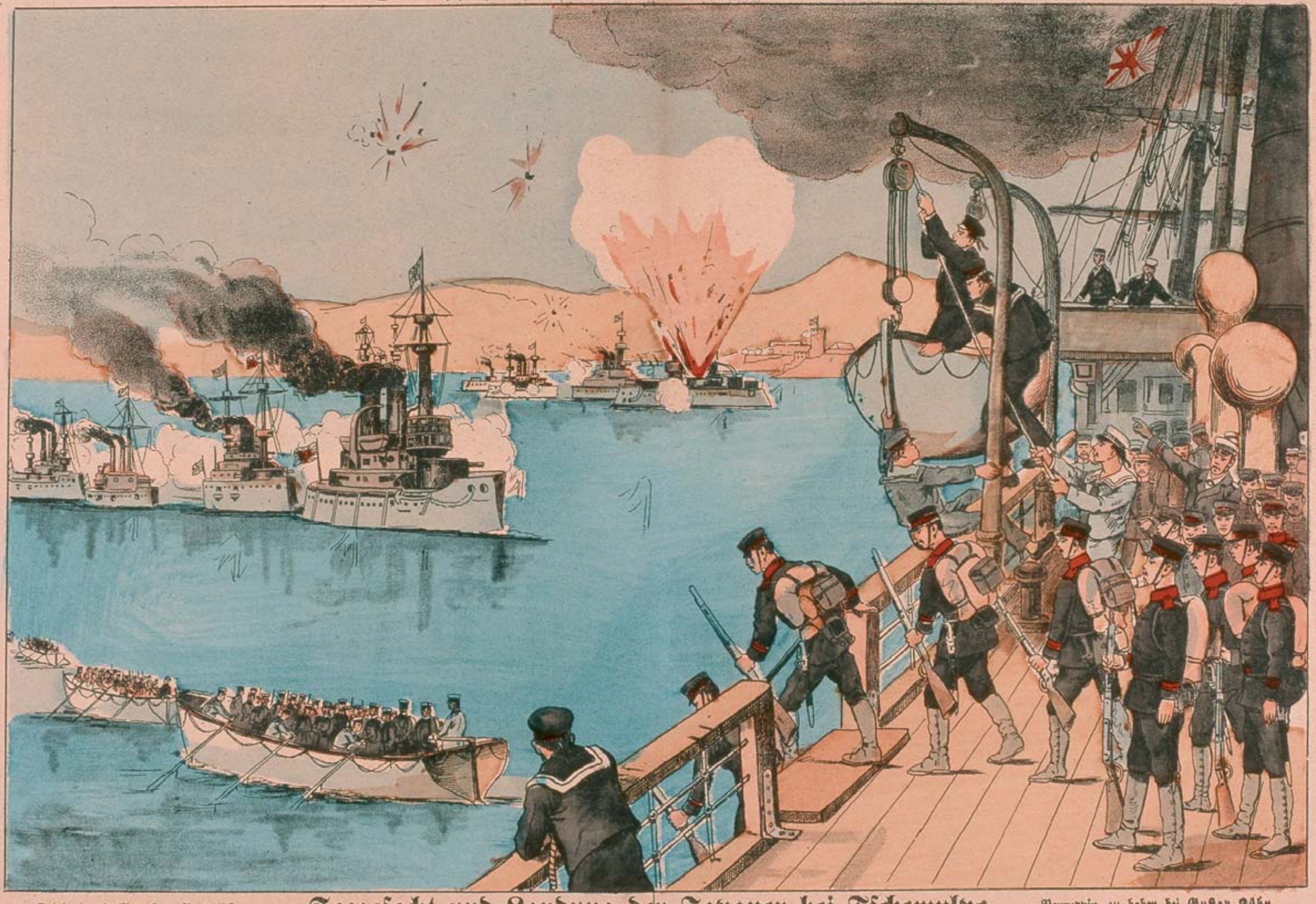


（1904 年）２月８日から９日にかけての夜間、公式の宣戦布告に先立って日本艦隊は水雷艇をもってロシア艦隊を攻撃してきた。闇夜のなか安心しきって旅順湾外の停泊地に係留されていたロシア艦隊は完全に不意をつかれ、探照灯を照射するいとまもなく、ツェサレーヴィチ、レトヴィザン、パルラーダという艦隊最強の三隻が航行不能に陥った。さらに翌朝、日本海軍は戦艦・巡洋艦計１５隻を繰り出し、ロシア艦隊および旅順港湾施設に猛烈な砲火を浴びせかけてきた。

ロシア軍は、最新式の大砲をハリネズミのように装備した沿岸砲台や要塞から、日本艦隊にめがけて反撃の火蓋を切り、艦船もこれに加わった。旅順港への奇襲を目論んでいた日本艦隊は、これをみて目的を果たすことなく退却した。しかしロシア側では、この戦いに参加した艦艇のうち戦艦ポルタヴァ、巡洋艦ノーヴィク、同ディアナ、同アスコリドがさらに戦列から脱落することになり、日本艦隊の優越は不動のものとなった。戦争初日においてすでにロシア艦隊では合計７隻の有力艦が戦力を失ったことになる。

In der Nacht vom 8. auf den 9. Februar, bevor noch die offizielle Kriegserklärung erfolgt war, machten die Japaner um Mitternacht einen Torpedoboot-Angriff auf die russische Flotte, die im Dunkel der Nacht ahnungslos auf der Rhede von Port Arthur lag. Die Russen wurden völlig überrascht und noch ehe ihre Scheinwerfer in Aktion getreten waren, hatten die Japaner bereits drei der besten russischen Schiffe „Zesarewitsch“, „Retvisan“ und „Pallada“ kampfunfähig gemacht. Am nächsten Morgen griffen darauf 15 japanische Panzerschiffe und Kreuzer die russische Flotte an und eröffneten ein verheerendes Feuer auf diese sowie auf Port Arthur.

Die Russen erwiderten das Bombardement aus den mit modernen Geschützen förmlich gespickten Küstenbatterien, der Festung und vom Geschwader aus. Die japanische Flotte, die es auf eine Überrumplung Port Arthurs abgesehen, mußte sich später zurückziehen, ohne diesen Zweck erreicht zu haben, hatte aber auch in diesem Treffen ihre Überlegenheit über die russische Flotte gezeigt, denn russischerseits sind die Panzerschiffe „Poltawa“ und die Kreuzer „Novik“, „Diana“ und „Askold“ im Kampfe derartig mitgenommen, daß sie außer Gefecht gesetzt werden mußten. Es sind somit am ersten Tage des Krieges bereits 7 der besten Schiffe Rußlands kampfunfähig.



Russisch-Japanischer Krieg.

Original und Eigenthum Nr. 9759.

Seegefecht und Landung der Japaner bei Tschemulpo.

Neuruppin, zu haben bei Gustav Kühn.

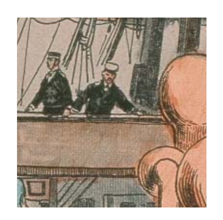
Ein japanisches Geschwader, das Transportschiffe begleitete, traf am 8. Februar auf dem Wege nach Tschemulpo das Hochseekanonenboot „Korejetz", das aus dem Hafen ausfuhr. Der „Korejetz" nahm gegen die japanischen Schiffe eine offensive Haltung ein und feuerte dann auf die japanischen Torpedoboote. Letztere schossen zwei Torpedos ab, die jedoch fehlgingen. Der „Korejetz" kehrte darauf zu seiner Ankerstelle zurück. Früh am Morgen des 9. Februar forderte Admiral Urin, der Kommandant des japanischen Geschwaders, formell die russischen Kriegsschiffe „Korejetz" und „Warjag" auf, den Hafen Tschemulpo vor Mittag zu verlassen. Der Admiral fügte hinzu, wenn seiner Forderung nicht nachgekommen würde, so sei er gezwungen, anzugreifen. Die beiden russischen Kriegsschiffe stellten sich darauf zum Kampfe, der mit großer Heftigkeit geführt wurde, doch war die japanische Flotte den beiden russischen Schiffen gegenüber zu stark. Die Besatzung derselben floh deshalb an Bord des französischen Dampfers „Pascal". Der Kapitän des Kreuzers „Warjag" blieb an Bord und sprengte sein Schiff in die Luft. Der „Korejetz" sank später. Die Japaner landeten darauf bei Tschemulpo.

Verlag Gustav Kühn, Neuruppin　グスタフ・キューン社（ノイルッピン）

NO. 9759

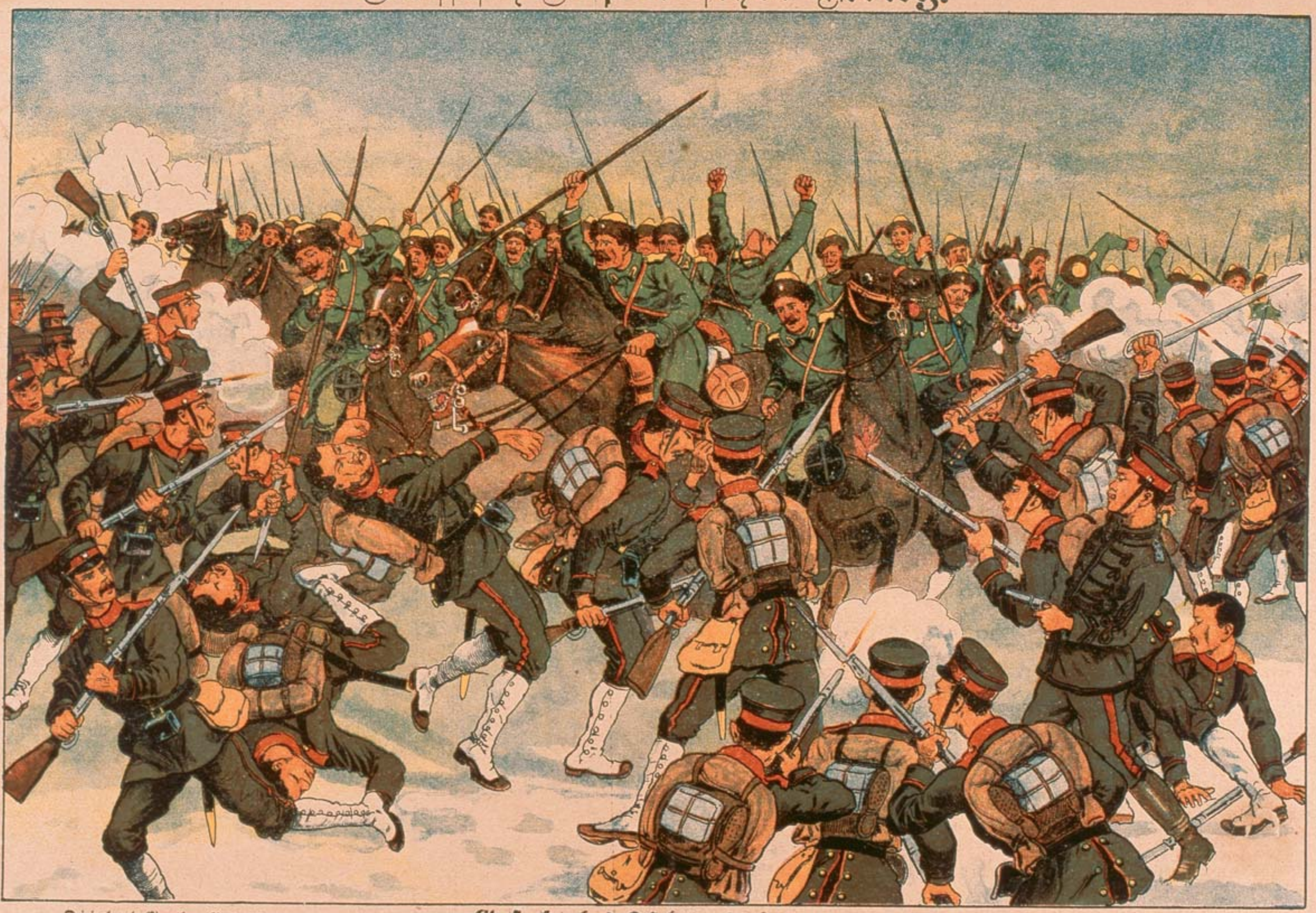
Seegefecht und Landung der Japaner bei Tschemulpo

仁川沖の海戦と日本軍の上陸



（1904 年）2 月 8 日、輸送船団を護衛しつつ仁川に向けて航海中の日本艦隊は、同港を発した航洋型砲艦コレーツと遭遇した。コレーツは日本艦隊に対して敵対行動を取り、日本水雷戦隊にむけて発砲してきた。日本水雷艇は魚雷二本を発射したがこれは命中せず、コレーツはその泊地に帰投していった。2 月 9 日早朝、日本艦隊の指揮をとる瓜生外吉海軍少将は、港内に在泊するロシア艦コレーツおよびヴァリャーグに正午を期して出航を要求し、もし要求が受け入れられない場合は攻撃のやむなきにいたる旨、通告を行った。ロシアの二艦は敢然と立ち向かい、激しい戦闘が行われたが、しかし日本艦隊ははるかに優勢であった。両艦の生存者はフランス汽船パスカル号に救助された。巡洋艦ヴァリャーグの艦長は艦上にとどまり、我が身もろとも自爆して果てた。コレーツも撃沈された。こののち、日本軍は仁川に上陸を開始した。

Ein japanisches Geschwader, das Transportschiffe begleitete, traf am 8. Februar auf dem Wege nach Tschemulpo das Hochseekanonenboot „Korejetz“, das aus dem Hafen ausfuhr. Der „Korejetz“ nahm gegen die japanischen Schiffe eine offensive Haltung ein und feuerte dann auf die japanischen Torpedoboote. Letztere schossen zwei Torpedos ab, die jedoch fehlgingen. Der „Korejetz“ kehrte darauf zu seiner Ankerstelle zurück. Früh am Morgen des 9. Februar forderte Admiral Urin, der Kommandant des japanischen Geschwaders, formell die russischen Kriegsschiffe „Korejetz“ und „Warjag“ auf, den Hafen Tschemulpo vor Mittag zu verlassen. Der Admiral fügte hinzu, wenn seiner Forderung nicht nachgekommen würde, so sei er gezwungen, anzugreifen. Die beiden russischen Kriegsschiffe stellten sich darauf zum Kampfe, der mit großer Heftigkeit geführt wurde, doch war die japanische Flotte den beiden russischen Schiffen gegenüber zu stark. Die Besatzung derselben floh deshalb an Bord des französischen Dampfers „Pascal“. Der Kapitän des Kreuzers „Warjag“ blieb an Bord und sprengte sein Schiff in die Luft. Der „Korejetz“ sank später. Die Japaner landeten darauf bei Tschemulpo.



Original und Eigenthum Nr. 9762.

Gefecht bei Tschöngdschu.

Neuruppin, zu haben bei Gustav Kühn.

Nachdem die Russen erfahren hatten, daß sich japanische Infanterie und Kavallerie fünf Werst jenseits Tschöngdschu befänden, marschierten sie unter General Mischtschenko auf Kasan zu. Auf dem Wege dahin trafen sie am 28. um ½11 Uhr früh in der Nähe von Tschöngdschu ein. Hier hatten die Japaner Gelegenheit zur Verteidigung gefunden und eröffneten denn auch das Feuer, sobald der russische Vortrab in Sicht kam. Die Kosaken erwiesen aber ihre Überlegenheit über die Japaner, und drängten die japanische Infanterie im ersten Ansturm zurück, welche sich auf Tschöngdschu warf. Hier setzten sich nun allerdings die Infanterie und inzwischen von Kasan herangezogene 4 Schwadronen Kavallerie fest, sodaß die Russen sich später zurückzogen.

Verlag Gustav Kühn, Neuruppin　グスタフ・キューン社（ノイルッピン）

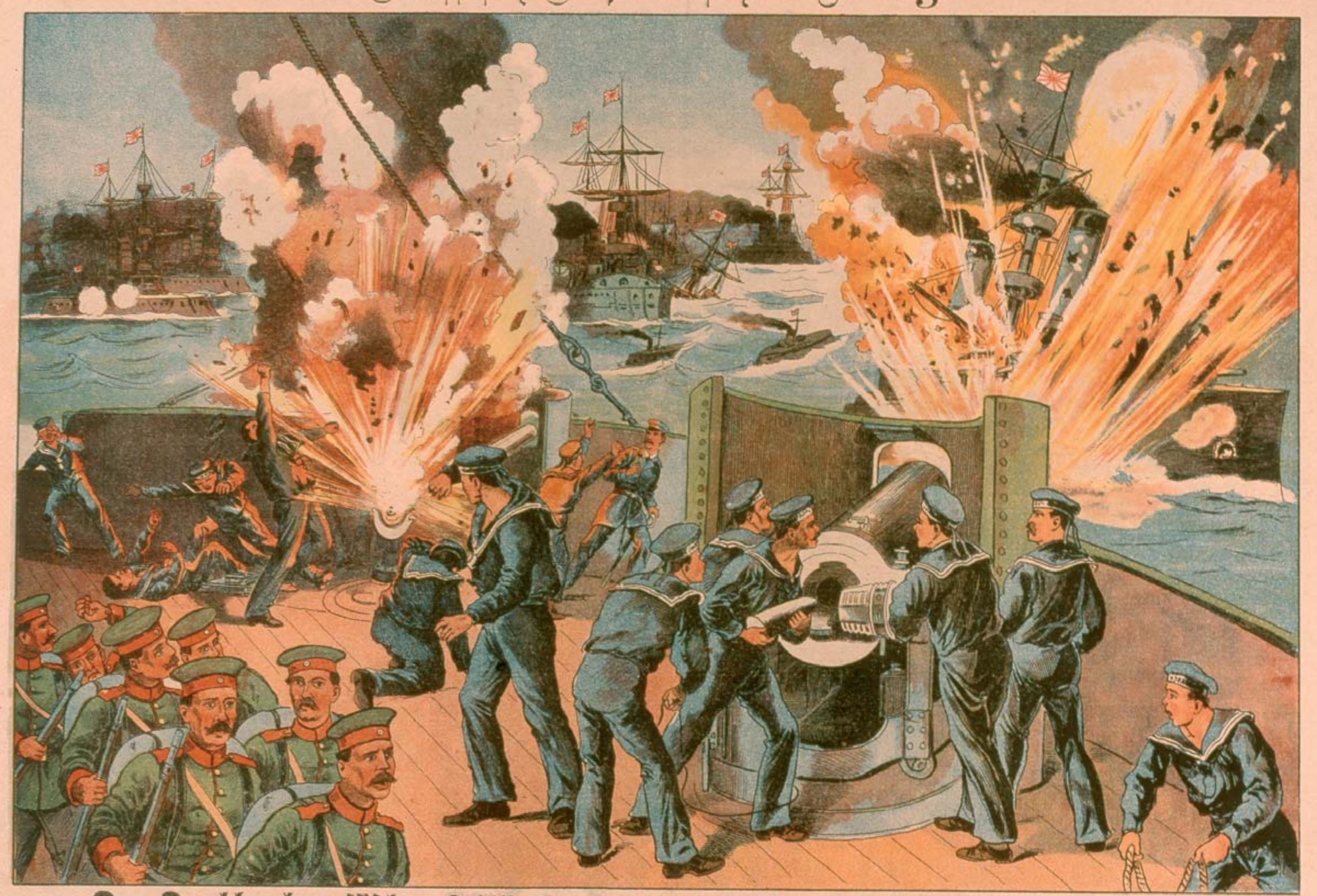
NO. 9762
Gefecht bei Tschöngdschu

定州の戦い



　歩兵と騎兵からなる日本軍部隊が定州を去る５露里の地点に出現したことを察知したロシア軍は、ミシチェンコ将軍の指揮のもと嘉山に向けて進撃した。その途上、28 日の午前 10 時半、両軍は定州近郊において衝突した。日本軍はこの地点に防衛線を築き、ロシア軍の先鋒が姿を現すやいなや射撃を開始したのである。しかし露軍のコサック部隊は日本軍よりも優勢であった。最初の突撃で早くも日本歩兵を後退させ、定州へと敗走させた。しかしここは歩兵に加えて嘉山から駆けつけた日本軍騎兵４個中隊が守りを固めており、それを見てロシア軍は退いた。

Nachdem die Russen erfahren hatten, daß sich japanische Infanterie und Kavallerie fünf Werft jenseits Tschöngdschu befänden, marschierten sie unter General Mischtschenko auf Kasan zu. Auf dem Wege dahin trafen sie am 28. um 1/2 11 Uhr früh in der Nähe von Tschöngdschu ein. Hier hatten die Japaner Gelegenheit zur Verteidigung gefunden und eröffneten denn auch das Feuer, sobald der russische Vortrab in Sicht kam. Die Kosaken erwiesen aber ihre Überlegenheit über die Japaner, und drängten die japanische Infanterie im ersten Ansturm zurück, welche sich auf Tschöngdschu warf. Hier setzten sich nun allerdings die Infanterie und inzwischen von Kasan herangezogenen 4 Schwadronen Kavallerie fest, sodaß die Russen sich später zurückzogen.



Verlag Gustav Kühn, Neuruppin　グスタフ・キューン社（ノイルッピン）

NO. 9770

Der Durchbruch russischer Schiffe durch das japanische Geschwader vor Port Arthur

ロシア艦隊、旅順港外で日本海軍の封鎖を突破（黄海海戦：8月10日）



弱小なロシア艦隊があたかもネズミ取りにかかったかのように旅順港に逼塞をよぎなくされて数ヶ月がたった。東郷提督率いるはるかに優勢な日本艦隊は、これを日夜監視下においていた。あらゆる脱出の試みがなされた。だが、ロシア軍将兵の英雄的な奮戦にもかかわらず、これまでのところ全て失敗に終わっていた。しかし、ついにロシア艦脱出の時がやってきた。

港内にあるロシア艦隊は最近激戦の末に占領された狼の丘から放たれる日本軍の砲火に苦しめられていたが、あらゆる犠牲を払ってウラジオストクからの戦隊と合流せよ、とのロシア海軍元帥からの命令をうけ、日本艦隊の封鎖を突破するという大胆不敵な試みを実行に移したのである。最高の勇気と決死の覚悟とをもって劣勢なロシア海軍の艦隊は強力な日本艦隊に襲いかかった。丸一昼夜にわたって死闘が展開された。ロシアの戦艦2隻、巡洋艦4隻、そして水雷艇の半数は外海への脱出に成功した。しかし残部は旅順へと引き返すことを余儀なくされた。日本軍の手に落ちたのはわずかに駆逐艦1隻のみ、それも国際法を無視して芝罘港で拿捕されたものである。もう1隻は中国の沿岸に擱坐し、乗組員の手で爆破された。脱出した艦隊の残りは中立港に逃げ込み、そこで当面のあいだ武装解除されることになった。

Seit Monaten saß die kleine russische Flotte im Hafen von Port Arthur wie in einer Mausefalle, bewacht von dem überlegenen japanischen Geschwader unter Admiral Togo. Alle Versuche zu entkommen waren trotz allen Heldenmutes der Russen bisher vergeblich, Endlich sollte aber einer Anzahl Schiffe die Befreiungsstunde schlagen. Durch japanische Geschosse, die von dem vor kurzem nach erbittertem Kampfe eroberten Wolfshügel geschleudert wurden, wurden die russischen Schiffe im Hafen arg belästigt. Als aber dann noch ein Befehl des obersten russischen Admirals einlief, auf jeden Fall zu versuchen, sich mit seinem von Wladiwostok kommenden Geschwader zu vereinen, unternahm man den tollkühnen Versuch, durch die japanische Flotte zu brechen. Mit unerhörter Tapferkeit und Todesverachtung griffen die russischen Seeleute mit ihren wenigen Schiffen die starke japanische Flotte an. Einen ganzen Tag und eine ganze Nacht hindurch tobte ein furchtbarer Seekampf. 2 russische Linienschiffe, 4 Kreuzer und die Hälfte der Torpedoboote haben das hohe Meer erreicht, während die andern gezwungen waren, nach Port Arthur zurückzukehren. Von den durchgekommenen Schiffen fiel nur ein Torpedobootzerstörer den Japanern in die Hände, den sie gegen alles Völkerrecht aus dem Hafen von Tschifu fortschleppten, einer strandete an der chinesischen Küste und wurde in die Luft gesprengt, während die andern neutrale Häfen erreichten, wo sie vorläufig entwaffnet wurden. Ein Teil der russischen Schiffe liegt in Kiautschou.

Russisch-Japanischer Krieg.



Original und Eigenthum Nr. 9771.

Schlacht bei Liaujang.

Neuruppin, zu haben bei Gustav Kühn.

In den letzten Tagen des August wütete die Entscheidungsschlacht zwischen Russen und Japanern. Von allen Seiten rückten die Japaner gegen die formidablen Stellungen der russischen Artillerie und Infanterie auf den Höhen um Liaujang heran. Mehr als eine halbe Million Soldaten waren bei dem Ringen der beiden Hauptarmeen engagiert. In den ersten Tagen schien es, als ob sich die Russen gegen ihre Feinde, die mit todesmutiger Zähigkeit immer von neuem frische Regimenter vorschickten, halten würden, aber schon am dritten Tage war das Zentrum der russischen Stellung stark bedroht; als die Japaner dann aber noch einen gelungenen Umgehungsversuch des rechten Flügels machten, gab General Kuropatkin, der russische Oberbefehlshaber, den Befehl zum Rückzug. Die aufgelösten Truppenmassen stürzten sich in wilder Flucht am Ufer des Taitseho nach Nordwest, verfolgt von japanischer Kavallerie. Nur kleine Abteilungen von Infanterie hielten noch ein verzweifeltes Feuergefecht aufrecht. Ungeheuer sind die Verluste auf beiden Seiten. Die Japaner verloren 25 000 Mann. Die Verluste der Russen sind noch garnicht zu übersehen.

Verlag Gustav Kühn, Neuruppin グスタフ・キューン社（ノイルッピン）

NO. 9771

Schlacht bei Liaujang

遼陽会戦（8 月 26 日 –9 月 4 日）



8 月最後の数日間にわたって日露両軍の決戦がおこなわれた。遼陽周辺の高地帯に堅固な陣地を構えたロシア軍の歩兵と砲兵に対し、日本軍は全戦線にわたって進撃を開始した。日露主力の激突に参加した兵力は双方あわせて 50 万人を超えた。日本軍は不屈のねばり強さを持って次々に新手の聯隊を投入してきた。戦闘開始後数日間はロシア軍の防衛陣地は持ちこたえているように思われたが、3 日目になってロシア軍戦線の中央部が重大な脅威にさらされた。さらに日本軍は右翼から迂回攻撃をかけることに成功し、これをみてロシア軍総司令官クロパトキン将軍は総退却を命令した。ロシア軍部隊は総崩れとなり、日本騎兵に追いまくられながら太子河の岸を北西方向に向かって敗走した。わずかに歩兵の小部隊だけが踏みとどまって絶望的な抵抗を続けたにすぎない。損害は両軍ともに甚大であった。日本軍は 25000 人を失った。ロシア軍の損害もまた座視し得ざるものがあった。

In den letzten Tagen des August wütete die Entscheidungsschlacht zwischen Russen und Japanern. Von allen Seiten rückten die Japaner gegen die formidablen Stellungen der russischen Artillerie und Infanterie auf den Höhen um Liaujang heran. Mehr als eine halbe Million Soldaten waren bei dem Ringen der beiden Hauptarmeen engagiert. In den ersten Tagen schien es, als ob sich die Russen gegen ihre Feinde, die mit todesmutiger Zähigkeit immer von neuem frische Regimenter vorschickten, halten würden, aber schon am dritten Tage war das Zentrum der russischen Stellung stark bedroht; als die Japaner dann aber noch einen gelungenen Umgehungsversuch des rechten Flügels machten, gab General Kuropatkin, der russische Oberbefehlshaber, den Befehl zum Rückzug. Die aufgelösten Truppenmassen stürzten sich in wilder Flucht am Ufer des Taitseho nach Nordwest, verfolgt von japanischer Kavallerie. Nur kleine Abteilungen von Infanterie hielten noch ein verzweifeltes Feuergefecht aufrecht. Ungeheuer sind die Verluste auf beiden Seiten. Die Japaner verloren 25 000 Mann. Die Verluste der Russen sind noch garnicht zu übersehen.

Russisch-Japanischer Krieg.



Original und Eigenthum, Nr. 9784.

Letzte Kämpfe vor Port Arthur und Kapitulation.

Neuruppin, zu haben bei Gustav Kühn.

Am 31. Dezember vormittags 10 Uhr sprengten die Japaner das Fort Sungschuschan in die Luft und besetzten um 11 Uhr unter furchtbaren Kämpfen, wobei Mann gegen Mann focht, das Fort. Ein Teil der Russen floh nach den südlich vom Fort gelegenen Höhen, während der Rest unter den durch die Explosion aufgeworfenen Erdmassen sein Grab fand. Den ganzen Tag über tobte der Kampf entsetzlich. Am nächsten Tage ließ General Stössel dem japanischen Oberstkommandierenden, General Nogi, einen Brief überreichen, in dem er erklärte, daß jeder weitere Widerstand vergeblich sei und in dem er sich zur Übergabe bereit zeigte.

Der Mikado sprach in einem Telegramm an Nogi seine hohe Anerkennung für Stössel aus und wies Nogi an, der Besatzung Port Arthurs alle Ehre zu erweisen, Verteidiger und Belagerer haben sich beide mit unsterblichem Ruhme bedeckt.

Verlag Gustav Kühn, Neuruppin　グスタフ・キューン社（ノイルッピン）

NO. 9784

Letzte Kämpfe vor Port Arthur und Kapitulation

旅順港をめぐる最後の戦いと降伏



12月31日午前10時、日本軍は松樹山堡塁を爆破し、白兵をもってする激戦の末11時頃同要塞を占領した。ロシア軍守備隊の一部は要塞の南にある高地に逃れたが、残りは爆発によって吹き飛ばされた大量の土砂の生き埋めとなってしまった。この日は終日激戦が荒れくるった。翌日、ステッセリ将軍は日本軍司令官乃木将軍に書状を送り、これ以上の抵抗は無意味であり、旅順を引き渡す用意のあることを告げた。

天皇は乃木に宛てた電報の中でステッセリを賞賛し、旅順の占領にあたって、ロシア軍人の名誉を最大限尊重するようを指示した。かくして旅順攻防戦の当事者は、双方ともに不滅の名誉を与えられたのである。

Am 31. Dezember vormittags 10 Uhr sprengten die Japaner das Fort Sungschuschan in die Luft und besetzten um 11 Uhr unter furchtbaren Kämpfen, wobei Mann gegen Mann focht, das Fort. Ein Teil der Russen floh nach den südlichen vom Fort gelegenen Höhen, während der Rest unter den durch die Explosion aufgeworfenen Erdmassen sein Grab fand. Den ganzen Tag über tobte der Kampf entsetzlich. Am nächsten Tage ließ General Stössel dem japanischen Oberstkommandierenden, General Nogi, einen Brief überreichen, in dem er erklärte, daß jeder weitere Widerstand vergeblich sei und in dem er sich zur Übergabe bereit zeigte. Der Mikado sprach in einem Telegramm an Nogi seine Anerkennung für Stössel aus und wies Nogi an, der Besatzung Port Arthurs alle Ehre zu erweisen, Verteidiger und Belagerer haben sich beide mit unsterblichem Ruhme bedeckt.



Verlag Gustav Kühn, Neuruppin　グスタフ・キューン社（ノイルッピン）

NO. 9785

Schlacht bei Mukden

奉天会戦（1905 年 3 月 1–10 日）



　奉天郊外での決戦は、2 月の末から 3 月の半ばまで約 2 週間にわたって中断なく続けられた。互角のまま一進一退の戦いが何日も続いたが、日本軍はついに英雄的な抵抗をおこなうロシア軍を撃破することに成功した。勇敢な歴戦のロシア軍各連隊は、まるで演習時のように沈着冷静に突進してくる日本軍に立ち向かった。日本軍の攻撃は、ことごとくロシア軍の奮戦の前に頓挫させられた。戦闘は熾烈を極め、ロシア軍陣地の前には折り重なる死体が山をなしたほどであった。ロシア兵は日本兵の戦死体に戦闘の合間に土をかけ、それを土嚢代わりにして優勢な敵の攻撃を支えることができたのであった。兵員の半分が戦死し、残る半分も大半が負傷する事態になってはじめて、ロシア軍は戦場から撤退し、血まみれの堡塁を日本軍の手にゆだねたのであった。

Fast zwei Wochen hindurch, von Ende Februar bis Mitte März, wütete bei Mukden der Entscheidungskampf. Unentschieden wogte tagelang die Schlacht hin und her, bis es den Japanern endlich gelang, den heldenhaften Widerstand der Russen zu brechen. Wie auf dem Exerzierplatze rückten die altbewährten tapferen russischen Regimenter den andringenden Japanern entgegen, und alle japanischen Angriffe zerschellten an ihrem Heldenmut. So furchtbar tobte der Kampf, daß sich Wälle von Leichen vor den Russen auftürmten. Indem die Russen in den Gefechtspausen die gefallenen Japaner mit Erde überdeckten, stellten sie sich Verschanzungen her, die es ihnen ermöglichten, lange der Übermacht stand zuhalten. Erst als über die Hälfte von ihnen gefallen und die übrigen fast alle verwundet waren, räumten sie das Feld, den Japanern die blutige Walstatt überlassend.



Die Erstürmung des 203 Meter-Hügels bei Port Arthur durch die Japaner.

Monatelang hielten die Japaner schon die stolze Seefestung Port Arthur fest eingeschlossen. Die Außenbefestigungen waren von ihnen bald genommen, da es den Russen an der genügenden Zahl von Verteidigern fehlte. Die innere Festungslinie setzte aber dem kühnen Vordringen der Japaner ein Ziel. Immer und immer wieder stürmten sie todesmutig vor, aber jedesmal zerschellte ihr Angriff an der eisernen Tapferkeit der russischen Besatzung. Besonders der 203 Meter-Hügel, der die ganze Verteidigungslinie und damit die Stadt beherrschte, war der Mittelpunkt bis dahin unerhörter Kämpfe. Tausende und abermals tausende der Angreifer sanken dahin, aber immer neue Streiter traten an die Stelle der Gefallenen, während die Zahl der wackeren Verteidiger, die keine neuen Truppen hatten, rasch dahinschmolz. Erst als nur noch einige hundert übrig geblieben waren, gelang es den Japanern nach heftigen, tagelangen Kämpfen den Hügel zu erobern. Alle Verteidiger waren gefallen und die Japaner pflanzten ihre Fahne auf ein Toten- und Trümmerfeld auf.

Original und Eigenthum Nr. 9786.

Neuruppin, zu haben bei Gustav Kühn.

Verlag Gustav Kühn, Neuruppin　グスタフ・キューン社（ノイルッピン）

NO. 9786

Die Erstürmung des 203-Meter-Hügels bei Port Arthur durch die Japaner

旅順二〇三高地への日本軍の突進（11 月 27 日 –12 月 5 日）



誇り高い旅順要塞と旅順港は、すでに数ヶ月にわたって日本軍により完全に包囲されていた。ロシア軍に十分な守備兵力がなかったため、日本軍は要塞の外郭を迅速に奪取することができた。今や要塞の内側防衛線に日本軍の猛攻が加えられるようになった。日本軍は死を顧みない突撃を何度も繰り返したものの、すべて勇敢なロシア軍守備隊の鉄壁の防御の前に挫折させられた。とくに、要塞の全防衛陣地とさらに市街地までもが制圧できる二〇三高地は、これまでで最大の激戦となった。攻撃側は数千人を失い、さらに数千人が倒れたが、なおも新手を繰り出して攻撃を続けた。他方、勇敢なロシア守備隊には増援部隊はまるでなく、その数は急速に減っていった。日本軍が終日激闘を続けた結果、ロシア残存兵力は、数百人を数えるのみとなり、ようやく高地の制圧に成功したのである。守備隊は全員戦死した。一面に横たわる戦死者と瓦礫の上に日本軍の軍旗がひるがえった。

Monatelang hielten die Japaner schon die stolze Seefestung Port Arthur fest eingeschlossen. Die Außenbefestigungen waren von ihnen bald genommen, da es den Russen an der genügenden Zahl von Verteidigern fehlte. Die innere Festungslinie setzte aber dem kühnen Vordringen der Japaner ein Ziel. Immer und immer wieder stürmten sie todesmutig vor, aber jedesmal zerschellte ihr Angriff an der eisernen Tapferkeit der russischen Besatzung. Besonders der 203 Meter-Hügel, der die ganze Verteidigungslinie und damit die Stadt beherrschte, war der Mittelpunkt bis dahin unerhörter Kämpfe, Tausende und abermals tausende der Angreifer sanken dahin, aber immer neue Streiter traten an die Stelle der Gefallenen, während die Zahl der wackeren Verteidiger, die keine neuen Truppen hatte, rasch dahinschmolz. Erst als nur noch einige hundert übrig geblieben waren, gelang es den Japanern nach heftigen, tagelangen Kämpfen den Hügel zu erobern. Alle Verteidiger waren gefallen und die Japaner pflanzten ihre Fahne auf ein Toten- und Trümmerfeld auf.


Russisch-Japanischer Krieg.

Original und Eigenthum Nr. 9787.

Die Verteidigung des Kautulinpasses.

Neuruppin, zu haben bei Gustav Kühn.

Während der Riesenschlacht bei Mukden wurden die heftigsten Kämpfe auf dem linken russischen Flügel um den Kautulinpaß ausgefochten. Dort war gewissermaßen der Schlüssel der russischen Stellung. Tagelang wogte der Kampf hin und her, bis es den Japanern gelang, den Paß zu erobern. Aber dem kühnen Ansturm der Russen glückte es, diese wichtige Stellung dem Feinde wieder abzunehmen. Die Japaner hatten inzwischen den Paß stark verschanzt, so daß eine Fortnahme unmöglich schien; trotzdem brachte russische Tapferkeit dieses fertig. Auf beiden Seiten wurden Proben heldenhaften Mutes abgelegt, aber die russische Standhaftigkeit blieb diesmal Sieger. Eine Reihe von Geschützen und andere Siegesbeute fiel dabei den Russen in die Hände.

Verlag Gustav Kühn, Neuruppin　グスタフ・キューン社（ノイルッピン）

NO. 9787

Die Verteidigung des Kautulinpasses

高土嶺の防衛戦（1905 年 3 月）



奉天近郊で一大会戦がおこなわれている間、ロシア軍の左翼にあたる高土嶺でも激戦が展開された。ここはロシア軍陣地全体のいわば急所であった。戦闘は一進一退のまま数日に及んだのち、まず日本軍が峠を攻略した。しかしロシア軍はその後果敢な逆襲に転じ、見事にこの重要な陣地を奪還したのである。日本軍はそれまでの間に峠を堅固に要塞化していたため奪取はほぼ不可能であると見られていた。しかしロシア兵の勇気がこの困難を克服したのである。英雄的な勇気とはどのようなものであるかが試されたのは両軍とも同じであったが、今回はロシア軍の側に軍配が上がった。日本軍の大砲数門およびその他の物資が鹵獲されてロシア軍の手に落ちた。

Während der Riesenschlacht bei Mukden wurden die heftigsten Kämpfe auf dem linken russischen Flügel um den Kautulinpaß ausgefochten. Dort war gewissermaßen der Schlüssel der russischen Stellung. Tagelang wogte der Kampf hin und her, bis es den Japanern gelang, den Paß zu erobern. Aber dem kühnen Ansturm der Russen glückte es, diese wichtige Stellung dem Feinde wieder abzunehmen. Die Japaner hatten inzwischen den Paß stark verschanzt, so daß eine Fortnahme unmöglich schien; trotzdem brachte russische Tapferkeit dieses fertig. Auf beiden Seiten wurden Proben heldenhaften Mutes abgelegt, aber die russische Standhaftigkeit blieb diesmal Sieger. Eine Reihe von Geschützen und andere Siegesbeute fiel dabei den Russen in die Hände.

Aus dem russisch-japanischen Kriege.

No 1829.



Deponirt   Druck u. Verlag v. C. Burckardt's Nachf. Weissenburg (Els.)

Am Liaujang. Ende August 1904 fanden in der Gegend von Liaujang, einer Stadt an der Bahn von Charbin über Mukden nach Port-Arthur schwere Kämpfe statt, bei welchen das Kriegsglück bald den Russen, bald den Japanern hold war. Am 27. August nahmen alle japanischen Kolonnen den Kampf auf und am Abend desselben Tages hatten sie bereits alle russischen Stellungen in Händen; die Japaner hatten etwa 2000 Mann verloren. Die Russen flohen auf Liaujang zu und erlitten bei der Flucht schwere Verluste. Erbittert wurde nun in den folgenden Tagen gekämpft, bis in der Nacht zum 3 September die Japaner zum Angriff auf Liaujang übergingen und der russische General Kuropatkin den Befehl zur Räumung erteilen mußte. Um 9 Uhr vorm. des 4. Sept. fiel Liaujang vollständig in die Hände der Japaner. Die Verluste waren beiderseits sehr große, wurden aber ziffermäßig nicht festgestellt. Aus von den Russen verlassenen Kanonen wurde durch die Japaner der abziehende Feind beschossen.

Verlag C. Burckhardt's Nachf., Weissenburg (Elsaß) C. ブルクハルト社（ヴァイセンブルク）

NO. 1829

Aus dem russisch-japanischen Kriege: Am Liaujang

遼陽にて



1904年8月末、遼陽の一帯で激しい戦闘が行われた。ここはハルピンから奉天を経て旅順へと至る鉄道の沿線にある。しばらく、戦運は、日露両軍の間を揺れ動いた。8月27日、日本軍は全軍をもって戦闘に入り、この日の夕暮れまでにロシア軍陣地を制圧した。だが、その際約2000名の兵力を失った。ロシア軍は遼陽方面にむけて退却し、この撤退中に重大な損害をこうむった。続く数日間にわたって激戦が続いた。9月3日の夜、日本軍はついに遼陽市内への攻撃を開始し、ロシア軍のクロパトキン将軍は市を敵手にゆだねることを命じざるをえなくなった。9月4日の午前、遼陽は完全に日本軍のものとなった。双方が非常に大きな損害をだしたが、その正確な数はまだ明らかになっていない。日本軍はロシア側が遺棄した大砲をただちに利用し、退却中の敵を砲撃した。

注：双方とも、2万人以上の死傷者を出した。

Ende August 1904 fanden in der Gegend von Liaujang, einer Stadt an der Bahn von Charbin über Mukden nach Port Arthur schwere Kämpfe statt, bei welchen das Kriegsglück bald den Russen, bald den Japanern hold war. Am 27. August nahmen alle japanischen Kolonnen den Kampf auf und am Abend desselben Tages hatten sie bereits alle russischen Stellungen in Händen; die Japaner hatten etwa 2000 Mann verloren. Die Russen flohen auf Liaujang zu und erlitten bei der Flucht schwere Verluste. Erbittert wurde nun in den folgenden Tagen gekämpft, bis in der Nacht zum 3 September die Japaner zum Angriff auf Liaujang übergingen und der russische General Kuropatkin den Befehl zur Räumung erteilen mußte. Um 9 Uhr vorm. des 4. Sept. fiel Liaujang vollständig in die Hände der Japaner. Die Verluste waren beiderseits sehr große, wurden aber ziffermäßig nicht festgestellt. Aus von den Russen verlassenen Kanonen wurde durch die Japaner der abziehende Feind beschossen.

Anmerkung:
Auf beiden Seiten gab es über 20.000 Gefallene und Verwundete.

Aus dem russisch-japanischen Kriege.

№ 1831.



Deponirt Druck u. Verlag v. C. Burckardt's Nachf. Weissenburg (Els.)

Seeschlacht in der Koreastraße. In den letzten Tagen des Monats Mai 1905 fand in den Gewässern zwischen Japan und Korea die längst erwartete Seeschlacht zwischen der japanischen Flotte unter Admiral Togo und der russischen unter Admiral Roschdestwensky statt und fiel zu Ungunsten der Russen aus, welche vollständig geschlagen wurden und folgende Schiffe, die teils sanken, teils von den Japanern genommen wurden, verloren. Gesunken sind: „Borodino", 830 Mann, 58 Geschütze; „Imperator Alexander III.", 782 Mann, 58 Geschütze; „Admiral Uschakow", 404 Mann, 26 Geschütze; „Admiral Nachimow", 572 Mann, 36 Geschütze; „Dimitrij Donskoj", 495 Mann, 34 Geschütze; „Wladimir Monomach", 495 Mann, 31 Geschütze; „Swjetlana", 600 Mann, 22 Geschütze; „Schemtschoy", 334 Mann, 16 Geschütze. Genommen: „Orel", 782 Mann, 58 Geschütze; „Nikolaus", 623 Mann, 32 Geschütze; „Admiral Senjawin", 404 Mann, 26 Geschütze; „Admiral Apraxin", 404 Mann, 29 Geschütze. Der Gesamtverlust an Material und Menschenleben ist fast unberechenbar. Die Admirale Roschdestwensky, Fölkersahm und Nebogatow wurden gefangen genommen nebst 6542 ihrer Seeleute. Nur klägliche Reste der so gewaltigen russischen Flotte erreichten flüchtend den Hafen von Wladiwostock und von Manilla.

Verlag C. Burckhardt's Nachf., Weissenburg (Elsaß) C. ブルクハルト社（ヴァイセンブルク）

NO. 1831

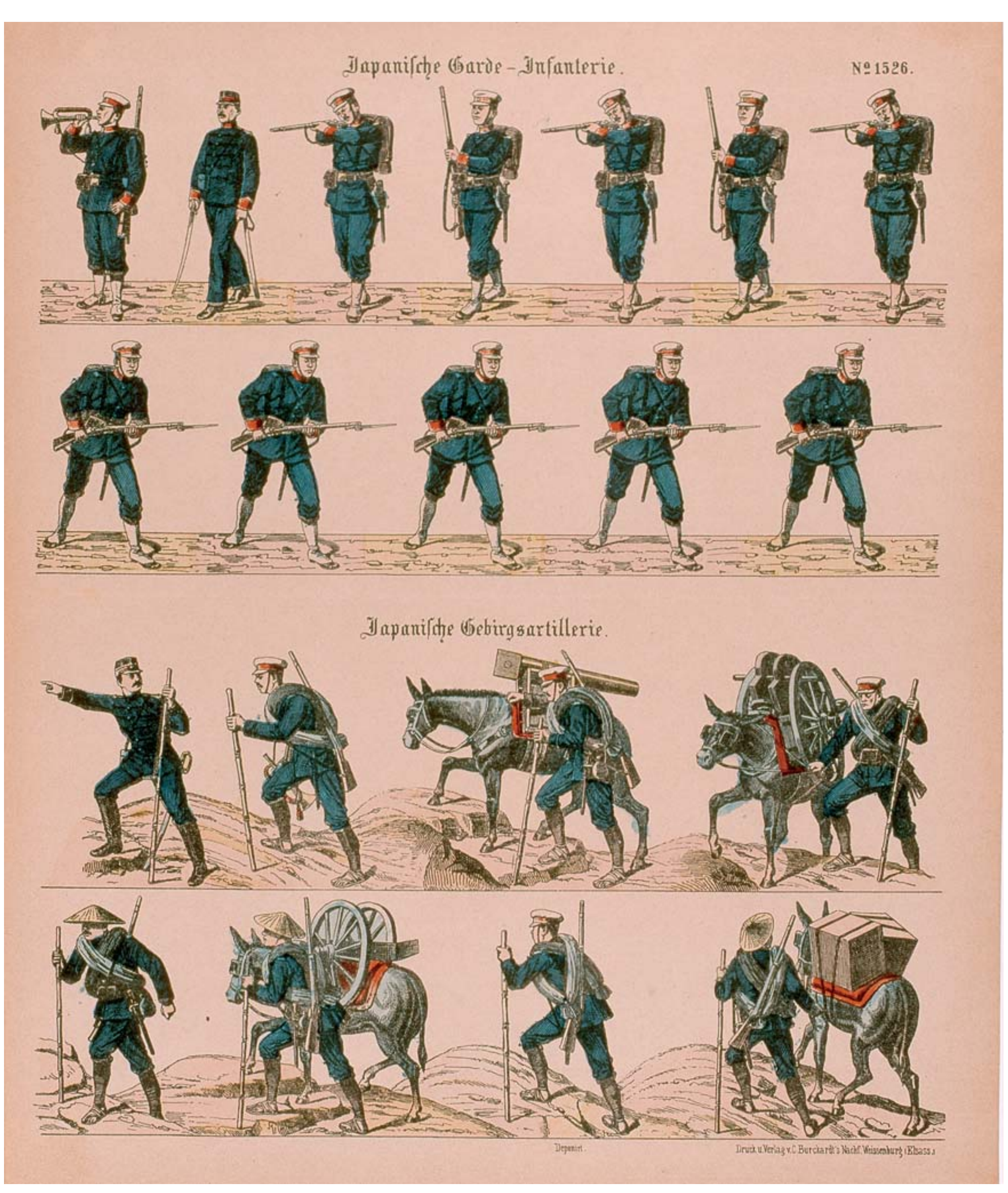
Aus dem russisch-japanischen Kriege: Seeschlacht in der Koreastraße

朝鮮海峡の海戦（日本海海戦：1905 年 5 月 27–28 日）



1905 年 5 月末、日本と朝鮮の周辺海域において、東郷平八郎提督率いる日本艦隊とロジェストヴェンスキー提督麾下のロシア艦隊との間に数日間にわたる大海戦がおこなわれた。この長らく待ち望まれていた戦いでロシア艦隊は全滅し、海戦は日本側の完勝をもって終わった。日本軍に撃沈され、あるいは捕獲された艦船は以下の通りである。沈没したもの、ボロディノ（乗組員 830 名、砲 58 門搭載）、皇帝アレクサンドル 3 世（乗組員 782 名、砲 58 門）、アドミラル・ウシャーコフ（乗組員 404 名、砲 26 門）、アドミラル・ナヒモフ（乗組員 572 名、砲 36 門）、ドミトリー・ドンスコイ（乗組員 495 名、砲 34 門）、ヴラディミル・モノマフ（495 名、砲 31 門）、スヴェトラーナ（600 名、砲 22 門）、ジェムチュグ（334 名、砲 16 門）。拿捕されたもの、オリョール（乗組員 782 名、砲 58 門搭載）、ニコライ１世（623 名、砲 32 門）、アドミラル・セニャーヴィン（乗組員 404 名、砲 26 門）、アドミラル・アプラクシン（乗組員 404 名、砲 29 門）。ロシア側は、数えられないほどの人命と物資を失った。ロジェストヴェンスキー、フェリケルザム、ネボガトフの 3 提督は、将兵 6542 名とともに捕虜となった。かつては強大であったロシア艦隊のうちのわずかな残存艦艇は、かろうじてヴラジオストクおよびマニラに到着することができた。

In den letzten Tagen des Monats Mai 1905 fand in den Gewässern zwischen Japan und Korea die längst erwartete Seeschlacht zwischen der japanischen Flotte unter Admiral Togo und der russischen unter Admiral Roschdestwensky statt und fiel zu Ungunsten der Russen aus, welche vollständig geschlagen wurden und folgende Schiffe, die teils sanken, teils von den Japanern genommen wurden, verloren. Gesunken sind: „Borodino“, 830 Mann, 58 Geschütze; „Imperator Alexander III.“, 782 Mann, 58 Geschütze; „Admiral Uschakow“, 404 Mann, 26 Geschütze; „Admiral Nachimow“, 572 Mann, 36 Geschütze; „Dimitrij Donskoj“, 495 Mann, 34 Geschütze; „Wladimir Monomach“, 495 Mann, 31 Geschütze; „Swjetlana“, 600 Mann, 22 Geschütze; „Schemtschoy“, 334 Mann, 16 Geschütze. Genommen: „Orek“, 782 Mann, 58 Geschütze; „Nikolaus“, 623 Mann, 32 Geschütze; „Admiral Senjawin“, 404 Mann, 26 Geschütze; „Admiral Aprayin“, 404 Mann, 29 Geschütze. Der Gesamtverlust an Material und Menschenleben ist fast unberechenbar. Die Admirale Roschdestwensky, Fölkersahm und Nebogotow wurden gefangen genommen nebst 6542 ihrer Seeleute. Nur klägliche Reste der so gewaltigen russischen Flotte erreichten flüchtend den Hafen von Wladiwostock und von Manila.



Verlag C. Burckhardt's Nachf., Weissenburg (Elsaß) C. ブルクハルト社（ヴァイセンブルク）

NO. 1526

Japanische Garde-Infanterie (Auschneide-Vorlagen für Pappsoldaten)

日本近衛歩兵、日本山砲兵（紙製兵隊人形）

NO. 136

Gefecht zwischen Russen und Japanern (Auschneide-Vorlagen für Pappsoldaten)

日本軍対ロシア軍の戦い（立像・紙製兵隊人形）



Verlag Schreiber, Esslingen bei Stuttgart J. F. シュライバー社（エスリンゲン）

NO. 137

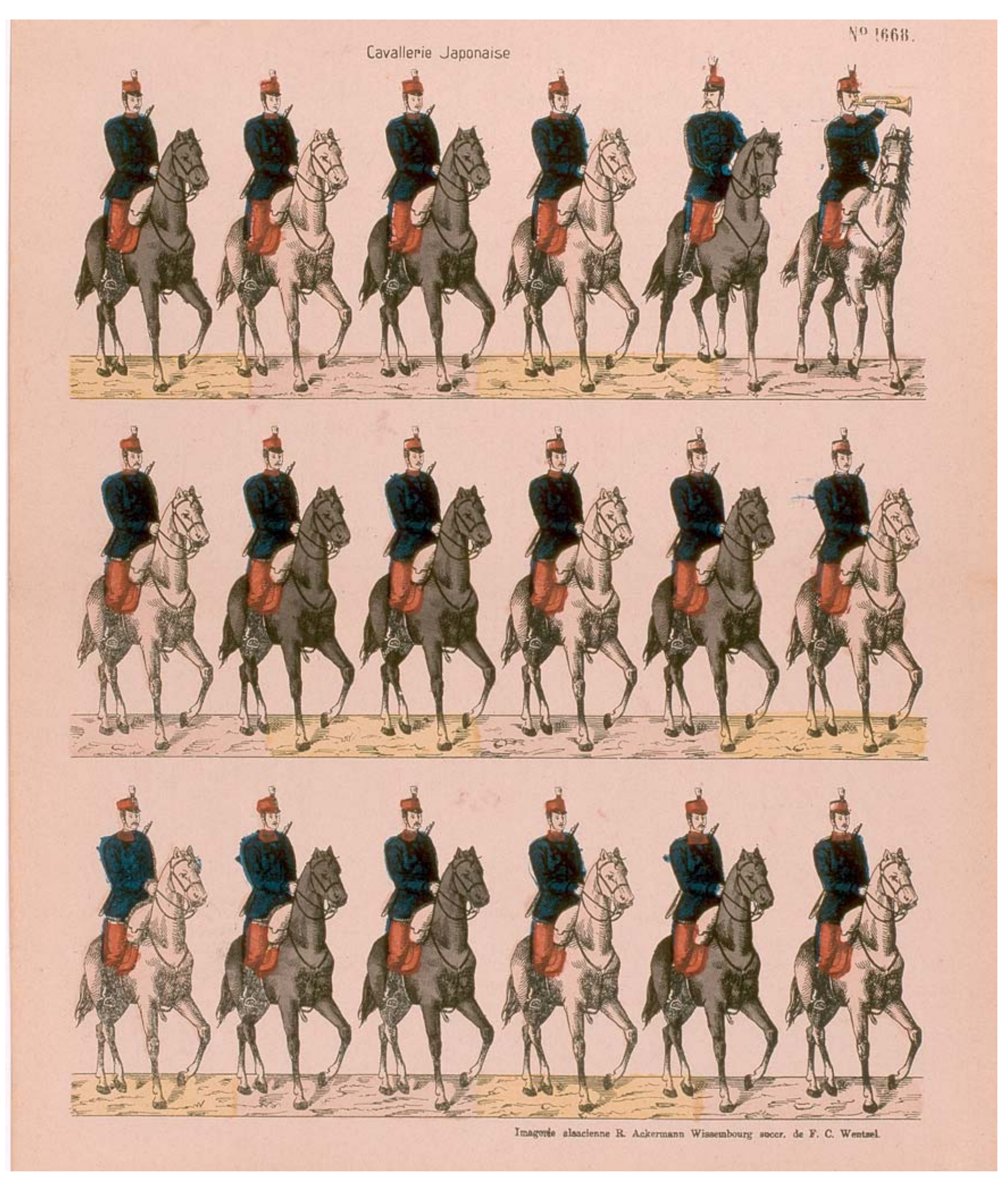
Gefecht zwischen Russen und Japanern (Auschneide-Vorlagen für Pappsoldaten) 日本軍対ロシア軍の戦い（立像・紙製兵隊人形）



Verlag Schreiber, Esslingen bei Stuttgart J. F. シュライバー社（エスリンゲン）

NO. 1668
Cavallerie Japonaise
(Auschneide-Vorlagen für Pappsoldaten)

日本騎兵
(紙製兵隊人形)



Verlag R. Ackermann, Weissenburg (Elsaß) R. アッカーマン社（ヴィサンブール）

絵葉書と日露戦争

絵葉書は、時代の証人としては、きわめてはかない存在である。今日でも旅行先や職場から、あるいは家にいるときにも、ちょっとした挨拶や近況報告のために絵葉書を書くことがある。届いた絵葉書のうち、きれいなものをしばらくのあいだ壁に貼ったり、鏡の裏側にさしこんだりして飾っておくこともある。だが、大半の絵葉書はまったくはかない運命をたどるのが常である。しかし、百年ほど前の時代においては、必ずしもそうではなかった。当時の人々はさまざまな絵葉書を通して外の世界のできごとを、小さな自分の家の中にいながらにして魔法のように知ることができた。また、ニュースを伝えるメディアという点でも、絵葉書の影響力は無視しえないものであった。絵葉書は、いわば我々の祖父母や曾祖父母たちにとっての携帯電話だったのである。

当時の絵葉書は、今日の想像をはるかに超えた重要性をもっていた。電話は 19 世紀にすでに発明されていたが、その黎明期から 1950 年代・60 年代の経済成長期に至るまで、電話を自宅に設置して、しかも頻繁に使っているひとは非常に少なかった。その代わりをつとめていたのが、今では古典的なサービス業になっている郵便であった。最盛期には大都市では 1 日に 4 回も配達がおこなわれていた。午前中に投函された葉書の返信を、早ければ午後一番の郵便で受け取って、その日の夜に夕食をともにできるかどうか、約束を取り交わすことさえできた。絵葉書は、マンガ、ラジオ、テレビの代わりにもなっていた。ちょっとした街には、どこにも絵葉書専門店があった。絵葉書専用のアルバムがどこの家庭にも置いてあり、きれいなイラストの葉書をそこに集めておいて、ときどき見返してみるということが好まれた。

このように頻繁に使われていたため、絵葉書には一定程度こだわりのある造作や図柄が求められるようになった。こうした書き手の要求に絵葉書製造業者の側が応えた結果、絵葉書の製造に要する期間は短縮され、高度な技術を用いたさまざまなイラストによって現実におきた最新の事件を扱うメディアへと進化していった。1904 年から 1905 年の日露戦争も衆目を集め、絵葉書の題材となった事件の一つである。ここでは西欧列強の一国とアジアの小国との戦いという力関係そのものが珍しかったし、またちょうど同時期の「黄禍論」の主張が人々を引きつけたのであった。その頃でもまだロシアを西欧キリスト教文化の守り手と考える人は多かった。

日露戦争をあつかった絵葉書は彗星のごとく市場に登場した。その伝える最新の情報に人々は夢中になり、絵葉書を書いたり送ったりするだけでなく、収集のためだけに買い求める場合もあった。日露戦争はたんにエキゾチックである以上の事件となった。西欧では人々の反応はさまざまであった。好奇心をのぞかせながらも傍観する姿勢を取る者、盛んに煽りたてる者もいた。時間が経つにつれ、ロシアの戦況を聞いては意気消沈し、日本側に肩入れしては熱狂する者もいた。これはヨーロッパの国はどこも同じで、アメリカですら例外ではなかった。違いといえば主題だけである。ロシアの絵葉書では日本軍は憎むべき敵であり、いつも負けてばかりいるように描かれている。1902 年に日本とのあいだに同盟を結んだイギリスでは、日本兵は非の打ち所のない態度に描かれ、ヨーロッパ風の華麗な軍服に身を固めた美男ぞろいである。中

7. DER RUSSISCH-JAPANISCHE KRIEG 1904/05 IM SPIEGEL DEUTSCHER UND ÖSTERREICHISCHER POSTKARTEN UND SAMMELKARTEN

Bildpostkarten sind zweifellos sehr vergängliche Zeugnisse ihrer Zeit. Sie werden geschrieben, um Grüße oder eine kurze Nachricht zu übermitteln, von einer Reise, einem Ausflug, vom Büro oder von zu Hause; die hübscheren Karten bleiben vielleicht eine Weile an einer Pinnwand oder hinter einem Spiegelrahmen stecken, die meisten anderen wandern schon sehr bald den Weg aller Vergänglichkeit. Vor hundert Jahren war das noch nicht ganz so, weil die Vielfalt der Abbildungen nicht nur die große Welt in die kleine Stube zauberte, sondern ihr Effekt zur Nachrichtenübermittlung ein unverzichtbarer gewesen ist. Sie waren das Handy in den Tagen unserer Groß- und Urgroßeltern.

Die Ansichtskarte hatte eine Bedeutung, die sich die heutige Generation gar nicht mehr vorstellen kann. Das Telefon war zwar im 19. Jahrhundert bereits erfunden worden, aber wer besaß schon in den nachfolgenden Jahrzehnten bis herauf zum Wirtschaftswachstum in den 1850er und 1860er Jahren tatsächlich ein Telefon für rasche Mitteilungen? Die klassische Post war noch ein Dienstleistungsbetrieb, der in seinen Glanztagen täglich viermal in den Metropolen oder noch öfter zustellte. Mit einer am Morgen aufgegebenen Karte konnte man daher schon am frühen Nachmittag die Antwort erhalten, ob noch am gleichen Abend ein gemeinsamer Restaurantbesuch möglich war oder nicht. Die Ansichtskarte ersetzte Bilderbuch, Radio, Fernsehen. Es gab keinen größeren Ort ohne seine speziellen Kartengeschäfte. Ansichtskarten-Alben waren in allen Familien gang und gäbe, hatten hübsche Einbände und wurden gerne und oft durchgeblättert.

Der häufige Gebrauch von Karten forderte von den Herstellern einiges Maß an Phantasie nach Inhalt wie Gestaltung. Entgegen kam den Verlegern, daß sich Karten rasch herstellen ließen und sie sich mit ihren vielfältigen, oft technisch hochwertigen Illustrationen zu einem Medium entwickelten, das unmittelbar auf aktuelle Ereignisse Bezug nehmen konnte. Der Krieg in Fernost zwischen Japan und Rußland in den Jahren 1904/05 war ein solches Ereignis, das sofort alle Gemüter bewegte. Erstens waren Kriege zwischen einer asiatischen und einer westlichen Macht alles andere als an der Tagesordnung und zweitens ging den Zeitgenossen auch das Schlagwort von der „Gelben Gefahr“ unter die Haut. Immerhin galt Rußland in weiten Kreisen doch als Wahrer des christlichen Abendlandes.

Blitzartig waren die ersten Karten auf dem Markt, um durch ihre Aktualität Käufer anzuziehen, sei es, daß man die Karten beschrieb und schickte, oder auch „nur“ sammelte. Der Krieg war ein Ereignis geworden, das nicht mehr bloß exotisch war. Es bewirkte in jedem Falle im Westen lebhafteste Anteilnahme, die von neugieriger Distanz über Dacapo-Rufe bis zu von Monat zu Monat wachsender Beklemmung auf der einen oder Begeisterung auf der anderen Seite reichte. Keines der europäischen Länder bildete dabei eine Ausnahme. Unterschiedlich jedoch waren die Sujets. Auf den russischen Karten kamen die Japaner wahrlich nicht gut weg, schließlich waren sie der böse Feind. Anders in Großbritannien, das seit 1902 mit Japan ein Bündnisabkommen geschlossen hatte. Der Japaner erhielt hier ein fast heldenhaftes Gesicht, er war ein echter Kerl in schmucker Uniform, der zu den europäischen Nationen aufgeschlossen hatte. Die „neutralen“ Mächte schwankten im Urteil auf ihren Bildpostkarten. Im allgemeinen sah man in Japan den David, dessen Underdog-Rolle vorwiegend in antizaristischen Kreisen von Sieg zu Sieg steigenden

立国の絵葉書における描写は、それほど極端ではないものの、時と場合によって両者の間を揺れていた。概して日本は巨人ゴリアテに戦いを挑むダビデ王の役どころを割り当てられている。ロシアに反感を持つ者たちのあいだでは当初はただの判官贔屓だったものが、日本軍の連戦連勝の報せがとどくうちに次第に熱狂的な雰囲気へと盛り上がっていった。またとくにドイツやオーストリアの絵葉書のなかには、より安直な手段として風刺画を用いたり、両交戦国のカリカチュアを鋭い筆致で、より正確に言えば、鋭い筆さばきで描くものもあった。大戦争もまたユーモアをもって扱おうというわけだが、ときにはそれがブラック・ユーモアになることもあった。

このほか戦争に関連しては、陸戦や海戦の状況をよりよく理解するためにさまざまな地図も作製された。「戦場でさえも、ここほど戦争を直接観察できることはない」と当時ウィーンのある大新聞は書いている。この言葉は、当時の絵葉書が持つ、現代のわれわれにとっての意味を言い当てていると言えよう。絵葉書はかつて日常の目的に供するためのはかない品物でしかなかったが、しかし大量に製作され広く普及していたがゆえに、人々の政治的な世界観と深く関係していた。したがって今日では、同時代史料として貴重で含蓄のある材料を歴史家に提供しているのである。

ペーター・パンツァー



日本兵とロシア兵
「日本人は勝利に酔い、ロシア兵は倒れた。」
「しかし、この絵が気に入らなければ、90度回転させると、立場が逆転する。」

Enthusiasmus hervorrief. Am leichtesten taten sich die Verleger, die zur Satire griffen – insbesondere in Deutschland und in Österreich – und in Form von Karikaturen die beiden kriegführenden Mächte auf die spitze Feder, recte den spitzen Pinsel spießten. Mit Humor, zumal dem schwarzen, ist eben auch Kriegen beizukommen...

Auch Landkartenserien begleiteten den Krieg, um sich die Örtlichkeiten der Land- und Seeschlachten besser vorstellen zu können. „Man kann im Krieg selbst nicht so viel vom Krieg sehen wie bei uns“, schrieb eine große Wiener Tageszeitung und beweist damit das, was uns diese Bildpostkarten heute sind: seinerzeit für den Tagesbedarf geschaffene Flüchtigkeiten, die aber durch ihre hohen Auflagen und weite Verbreitung, genauso wie durch die Position, die sie durch ihr politisches Weltbild beziehen, als Dokumente ihrer Zeit für den Historiker heute ein aussagekräftiges, wertvolles Hilfsmittel sind.

Peter Pantzer

POSTKARTEN

Die Postkarten und Sammelkarten sind eine Leihgabe von Peter Pantzer

絵葉書はすべてペーター・パンツァー氏所蔵



NO. 1

Japaner jauchzt, berauscht von Siegen,
Der Russe muss am Boden liegen! ....
Doch wem dies Bildchen nicht gefällt,
Sieht hier ums Eck verkehrte Welt.

NO. 2:
Russisch-Japanischer Krieg
(Englisch-Japanisches Bündnis)

イギリス兵と日本女性
「日露戦争」日英同盟とそれを羨ま
しがるロシアとフランス





NO. 3
Russisch-Japanischer Krieg

「日露戦争」
日本兵とロシア兵の間で操り広げら
れる戦いとそれを眺めるイギリス兵



NO. 4:
Russisch-Japanischer Krieg:
Der Japaner verzehrt Russen

「日露戦争。日本人は『ロシア人』
を食う」この葉書はウィーン
で製造されたが、オーストリアの
ドイツ語で「ロシア人」(Russen)
には、鱈の酢漬けという意味もある。



NO. 5:
Russisch-Japanischer Krieg:
Der Russe verzehrt „Ja-Baner"
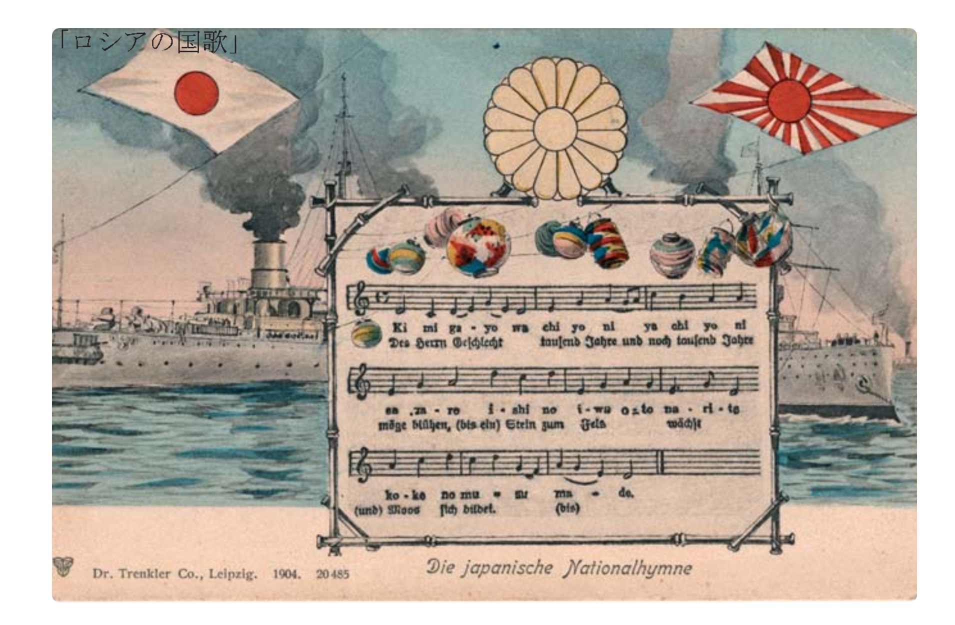
「日露戦争。ロシア人は
『ニ・ホン・人』を食う」
(言葉遊び)

NO. 6:
Die russische Nationalhymne

「ロシアの国歌」



「ロシアの国歌」



NO. 7:
Die japanische Nationalhymne

「日本国歌」

NO. 8 – 11
日露戦争関係図
NO. 11は東アジア本物の地図。
それ以外の三つの地図はすべて空想
の産物であり、東アジアの戦場を
皮肉ぽく説明している。



NO. 8
Russisch-Japanischer Krieg:
Gezeichnet von Max und Moritz
(Landkarte von Russland und Sibirien
aus der Vogelperspektive)

NO. 9
Russisch-Japanischer Krieg:
Original Japanische Generalstabs-Karte



NO. 11

Russisch-Japanischer Kriegsschauplatz



NO. 10

Russisch-Japanischer Krieg: Gezeichnet von Max und Moritz (Hand-Karte des Ostasiatischen Kriegsschauplatzes)

Russisch-japanischer Krieg.

Gezeichnet von Max und Moritz.

NO. 12 – 15
日露戦争関係人物肖像

NO. 12:
General Graf Katsura,
Ministerpräsident

陸軍大将・伯爵
桂太郎　首相



NO. 13:
General Teraoutchi,
Kriegsminister

陸軍大将寺内正毅
陸軍大臣

NO. 14:
Mutsuhito,
Kaiser von Japan

睦仁　日本皇帝
(明治天皇)





NO. 15:
General Baron Oku,
Commander of the
Second Army

陸軍大将・男爵
奥保鞏
第二軍司令官

NO. 16 – 22 のカードは、フランスのシャール社（チョコレート、ココア、茶）の商品のおまけだったが、ドイツ市場向けである。なぜならば、説明はドイツ語で書いてある。

SAMMELKARTEN

(Sammelkarten lagen Konsumprodukten wie z.B. Schokolade, Seife, Waschpulver etc. bei)

以下のカードは、
当時コレクター・カードとして、チョコレート、洗剤、石鹸、お酢など、さまざまな商品におまけとしてついていたものである。



NO. 16:
Der Hafen von Port Arthur

旅順港





NO. 17:
Russische Heliographisten in Port Arthur

旅順のロシア兵

NO. 18:
Zesarewitsch

PALLADA
ZESAREWITSCH
CHOCOLAT - CACAO - THÉS
COMPAGNIE FRANÇAISE
L. SCHAAL & Cie

ロシア戦艦ツェザレーヴィチ



NO. 19:
Angriff japanischer Infanterie in Korea

朝鮮での日本歩兵の攻撃

NO. 20:
Bombardement auf Wladiwostok am 5. März 1904

Bombardement auf Wladiwostok am 5. Maerz 1904
CHOCOLAT - CACAO - THÉS
COMPAGNIE FRANÇAISE
L. SCHAAL & Cie

（日本海軍による）ウラジオストク砲撃（1904年3月5日



NO. 21:
Chemulpo Haupthafen von Korea



済物浦（仁川）— 朝鮮半島の主要港

Mode de cuisson du chocolat.

Le chocolat mis en morceaux est fondu, avec quelque peu d'eau, sur feu vif. Avoir soin de remuer pour éviter l'adhérence au fond du vase. Etendre de lait ou d'eau, au gré du consommateur, et laisser monter en bouillon 2 fois, pas plus, car une cuisson trop prolongée nuit à la qualité du chocolat.

Une côte de bon chocolat, soit le 6me de nos tablettes de 250 grs, suffit pour une portion de 1/4 litre.

Zubereitung der Chocolade.

Es genügt, die Chocolade zerstückelt mit etwas Wasser, unter beständigem Rühren, zu zerschmelzen, gibt dann nach Belieben Wasser oder Milch zu und lässt nur zwei Mal aufquellen, denn längeres Kochen verflüchtigt das Aroma der Chocolade.

Circa 40 Gr. Chocolade (der sechste Theil unserer 250 Gr. Tabletten) genügen zu einer Portion von circa 1/4 Liter.

Compagnie Française des Chocolats et des Thés
L. SCHAAL & Cie, Strassburg i. Els.

NO. 22:
Rückseite einer Sammelkarte der Fa. Schaal

シャール社のコレクター・カードの裏面（チョコレートの作り方の説明）

NO. 23:
Russ. Dragoner erobern eine japan. Flagge

ロシア騎兵は
日本海軍旗を奪う

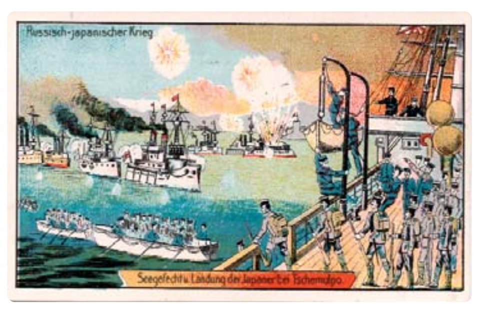


NO. 24:
Zerstörung eines russ. Aviso durch die Japaner

日本海軍に
よるロシア戦
艦への奇襲

NO. 25:
Russisch-Japanischer Krieg: Seegefecht und Landung der Japaner bei Tschemulpo

日露戦争：
仁川海戦と日本
軍の済物浦(チェムルポ)上陸



NO. 26:
Russisch-Japanischer Krieg: Bombardement und Seegefecht von Port Arthur

日露戦争 – 旅
順砲撃

NO. 27:
Rückseite einer Sammelkarte

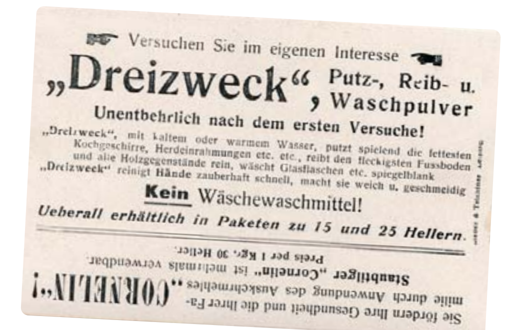
ヘンチェル社の
コレクター・
カードの裏面


Versuchen Sie
einmal die bekannten
Gurkenmilchpräparate von
Georg Häntzschel
Hoflieferant Dresden
und Sie werden selbe immer gebrauchen.
Häntzschels Echte
Gurkenmilch
Weltberühmt zur Pflege der Haut und Schönheit.
Flasche Mk. 1.— und 2.— oder 1 Krone 60 Heller und 3 Kronen.
Häntzschels
Gurkenmilch-Seife
Reinste und mildeste Seife der Welt für zarten Teint
à St. 50 Pfg. oder 80 Heller.
Häntzschels
Gurkenmilch-Puder
der köstlichste aller Puder.
Anhaftend! Unsichtbar! Unschädlich!
in weiss, gelb, rosa.
Schachtel Mk. 1.50 oder 2 Kronen.
Häntzschels
KOMBELLA
Gurken-Crême
in Tuben à 60 Pfg. oder 80 Heller.
Epochemachend für die Schönheit des Gesichts und Zartheit der Hände.



NO. 28:
Japan, Feldmarschall, Cavallerist

日本 – 元帥、
騎兵など


Versuchen Sie im eigenen Interesse
„Dreizweck", Putz-, Reib- u. Waschpulver
Unentbehrlich nach dem ersten Versuche!
„Dreizweck", mit kaltem oder warmem Wasser, putzt spielend die fettesten Kochgeschirre, Herdeinrahmungen etc. etc., reibt den fleckigsten Fussboden und alle Holzgegenstände rein, wäscht Glasflaschen etc. spiegelblank
„Dreizweck" reinigt Hände zauberhaft schnell, macht sie weich u. geschmeidig
Kein Wäschewaschmittel!
Ueberall erhältlich in Paketen zu 15 und 25 Hellern.
Preis per 1 Kg. 30 Heller.
Staubtilger „Cornelin" ist mehrmals verwendbar.
Sie fördern Ihre Gesundheit und die Ihrer Familie durch Anwendung des Auskehrmehles „CORNELIN"!

NO. 29:
Rückseite einer Sammelkarte

ドライツヴェック社
（洗剤）のコレク
ター・カードの裏面

錦絵は、19世紀には積極的に制作されたが、20世紀に入ると、ほとんど作られなくなった。日露戦争の錦絵は、その最後の時期の作品ということができよう。それに代わって主流となったのが、石版画である。本展覧会にだされている錦絵と石版画は、日本における多色刷り印刷物の転換期となる時代の産物である。

絵の内容を見ると、欧米風でりりしい顔の日本兵と、野蛮で悪辣な顔のロシア兵が戦っている情景が、多く描かれている。とくに石版画のほうは、日本語だけではなく英語でもキャプションが付けられており、欧米人への販売も狙っていたことがうかがえる。ドイツで出版された日露戦争回顧録に、錦絵や石版画が掲載されていることからも、日本の印刷物が欧米に持ち帰られた事実は判明している。（111ページを参照）

絵の内容が史実に即しているかどうか、という点では、大いに疑問がある。たとえば、平壌において、日露間で戦闘は起きていないにもかかわらず、戦闘の情景が描かれている。また、ポーツマス講和会議でいうと、本来は日本とロシアの全権代表が相対していたはずである。ところが、日露講和談判之図では、ポーツマスに一度も来たことのないルーズベルト大統領が、裁判官のように真ん中に鎮座して、両国を調停している。速報性を重んじるあまり、推測だけで、錦絵や石版画が作られたにちがいない。ニュースが、絶えず真実を伝えているわけでないのは、百年前も現在も変わらないことを示している。

稲葉千晴

8. SONSTIGE MEDIEN AUS WEITEREN LÄNDERN: FARBDRUCKE (*SEKIHANGA* UND *NISHIKI-E*, JAPAN); POSTKARTEN (FRANKREICH); ERINNERUNGSLITERATUR (DEUTSCHLAND)

Nishiki-e (Holz-Farbdrucke) wurden im 19. Jahrhundert in großer Zahl produziert, starben aber Anfang des 20. Jahrhunderts fast aus. Holz-Farbdrukke des Russisch-Japanischen Krieges fallen in die letzte Phase der Geschichte dieses Mediums, danach wurden sie von der Lithographie (*sekihanga*) abgelöst. Die in dieser Ausstellung gezeigten *Nishiki-e* und Lithographien sind Produkte der Übergangszeit des Farbdruckes in Japan.

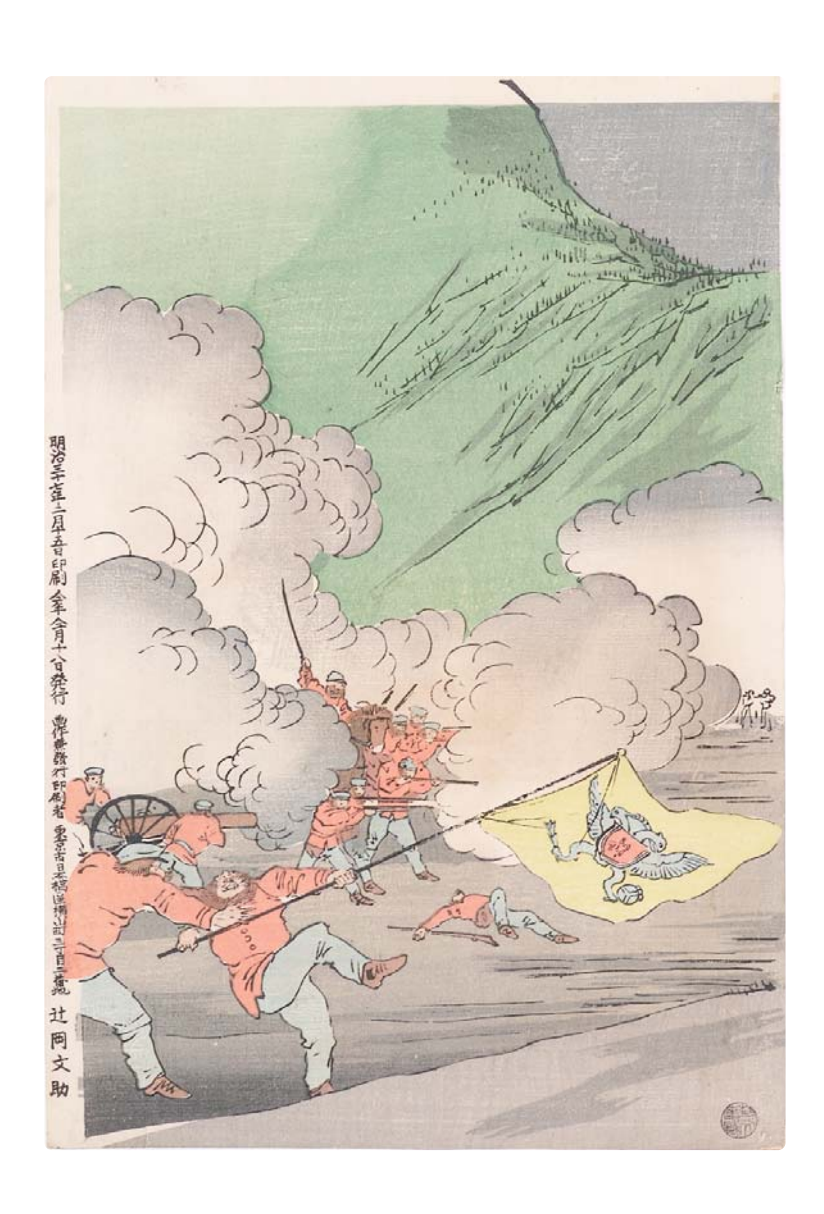
Betrachtet man sich die Bilder, so kann man leicht erkennen, daß die japanischen Soldaten mit galantem Gesichtsausdruck und in westlichem Stil dargestellt sind, während die russischen Soldaten als Barbaren und mit boshaftem Gesichtsausdruck porträtiert werden. Die Litographien sind mit englischen Kommentaren versehen, welche die Taten der japanischen Truppen glorifizieren. Die englischen Kommentare lassen darauf schließen, daß die Lithographien auch zum Verkauf ins Ausland oder an ausländische Sammler in Japan konzipiert wurden. Tatsächlich finden wir in einigen Erinnerungen und Darstellungen des Russisch-Japanischen Krieges in Deutschland japanische Lithographien und Holz-Farbdrucke zur Bebilderung der Publikation (s. S. 111).

Ob die visuellen Darstellungen der historischen Wahrheit entsprechen, ist allerdings zweifelhaft. Trotz des Titels „Darstellung des Zusammenstoßes bei Pyonjang" gab es z.B. keine Kämpfe in Korea während des Russisch-Japanischen Krieges. Weiterhin saßen sich bei der Friedenskonferenz von Portsmouth nur die Abgesandten Rußlands und Japans gegenüber. Auf der Lithographie „Russisch-Japanische Friedensverhandlungen" sehen wir US-Präsident Roosevelt in der Position des Vermittlers, obwohl er nie persönlich bei den Verhandlungen anwesend war. Interessiert an der schnellen Verbreitung von Information wurden Holz-Farbdrucke und Lithographien also häufig basierend auf Hörensagen und mit einem großen Maß an Phantasie entworfen. Wie real und wahrheitsgetreu sind visuelle Darstellungen von Nachrichten in Medien? – eine Frage, die schon vor 100 Jahren so aktuell war wie auch heute noch.

Inaba Chiharu

FARBDRUCKE

(nishiki-e, Leihgabe der Shizuoka Prefectural Central Library)



K915-108-040-042:

Kankoku Incheon Nichiro Sentō no zu (Darstellung der Kämpfe zwischen Japan und Rußland in Incheon, Korea)

錦絵
(静岡県立中央図書館所蔵)





K915-108-040-042:　韓国仁川日露戦闘之図

K915-108-050-012:

Ryōjun-kō heisoku-tai Hirose Chūsa Funsen su (Kampf des Oberstleutnant Hirose der Blockadeflotte vor Port Arthur)
Englischer Untertitel: The Japanese blockaders fighting with great bravery at Port Arthur







K915-108-050-012: 旅順港閉塞隊広瀬中佐奮戦ス

K915-108-050-013:
Nichiro Sensō Dai-Nippon Sekijūji Yasenbyōin Fushōsha Kyūryō no zu
(Darstellung des Feldlazaretts und der Verwundeten-Unterkunft des Japanischen Roten Kreuzes im Japanisch-Russischen Krieg)
Englischer Untertitel: Japanese Red Society Hospital treating the wounded in the Russo-Japanese War







K915-108-050-013: 日露戦争大日本赤十字野戦病院負傷者救療の図







K915-108-050-015:
Ōryokukō Fukin Nihon Daishōri (Der Große Japanische Sieg am Fluß Yalu)
Englischer Untertitel: Japanese army capturing Kulian



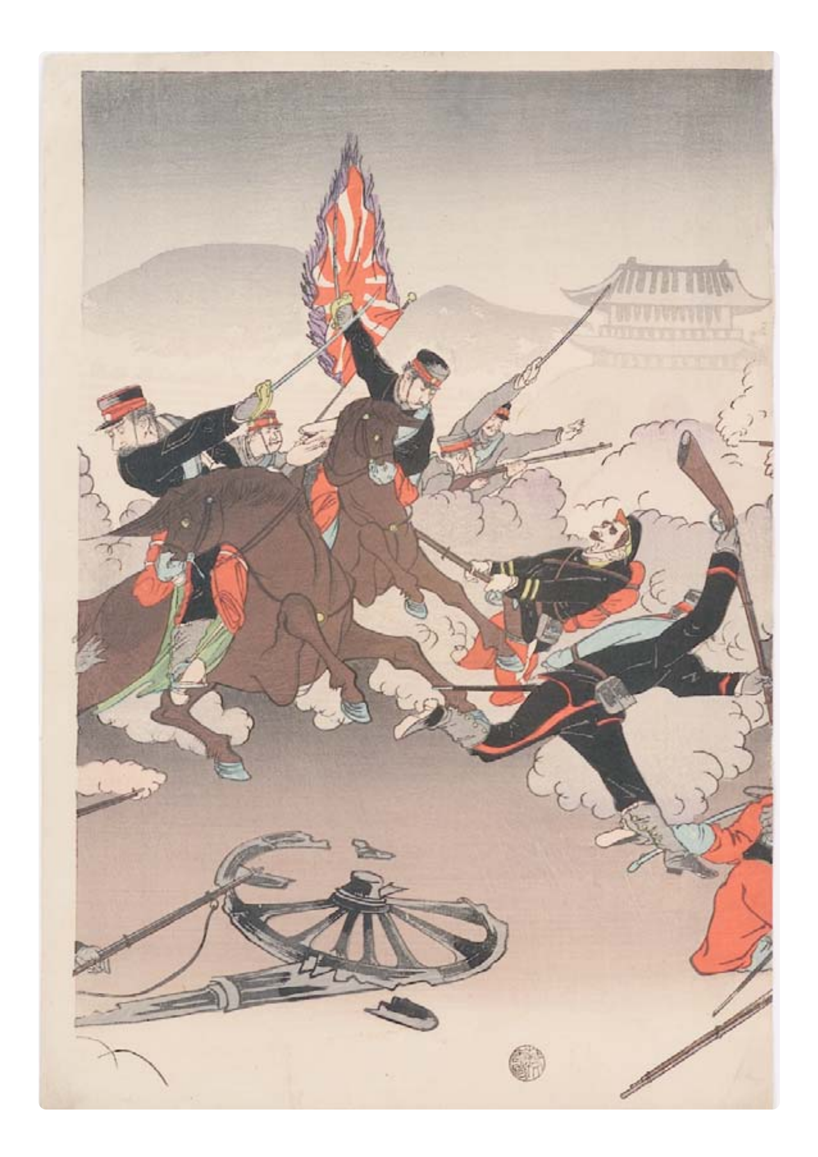




K915-108-050-015:
鴨緑江付近日本大勝利



K915-108-050-016:
Nichiro Sensō Heijō Fukin Shōtotsu no zu (Darstellung des Zusammenstoßes bei Pyonjang im Russisch-Japanischen Krieg)





K915-108-050-016: 日露戦争平城付近衝突図



NO. 1

Waga Dainigun Kinshū-jō Sōkōgeki Kanraku no Kokei
(Ansicht des Angriffs unserer zweiten Armee auf die Festung Kinchow und Fall der Festung)
Englischer Untertitel: Japan seconds army is state to great atteck the castle Kinshu China cuntry in the May 26th 1904 Meiji

我第二軍金州城総攻撃陥落之光景



NO. 2

Waga Dainigun Gaihei Senryō no Kōkei (Ansicht der Besetzung von Kaiping durch unsere Zweite Armee)
Englischer Untertitel: The occupation of Kaiping by Our Second Army (6th July, 1904)

我第二軍蓋平占領之光景



NO. 3
Waga Gun Yūkan Ryōjun-kō Haimen o Kōgeki shi sono Ichibu o Senryō su
(Soldaten unserer mutigen Armee greifen die Rückseite von Port Arthur an und besetzen einen Teil desselben)
Englischer Untertitel: The powerful Army to be attack and fasler of Rio-jun-ko

我軍勇敢旅順口背面ヲ攻擊シ其一部ヲ占領ス



NO. 4

Ryōjun Shigai Gekisen no Zu (Darstellung der heftigen Kämpfe in der Stadt Port Arthur)
Englischer Untertitel: In great battle Japanese Army subjugeted and assault on behind of City of Riojun

旅順市街激戦之図



NO. 5

Tokuriji no Gekisen Waga Gun tsuini Teki no Hōrui o Kanshu su

(Die heftigen Kämpfe bei Wafandian, während derer unsere Armee letztendlich die Artillerie-Stellungen des Feindes einnimmt)

Englischer Untertitel: Our army enters and take possession of the enemy's battery after the severe battle at The-li-ji

「得利寺ノ激戦我カ軍遂ニ敵ノ砲壘ヲ陥取ス」



NO. 6

Nichiro Kōwa Danpan no Zu (Russisch-Japanische Friedensverhandlungen)

Englischer Untertitel: Russo-Japanese consultation of peace

日露講和談判之図

FRANZÖSISCHE POSTKARTEN
(Leihgabe von Peter Pantzer)

フランス絵葉書
（ペーター・パンツァー氏所蔵）



NO. 1 – 11
La Guerre Russo-Japonaise (Französische Postkarten-Serie zum Russisch-Japanischen Krieg)

La Guerre Russo-Japonaise（日露戦争）


LA GUERRE RUSSO-JAPONAISE. — N° 3. — Combat naval de Chemulpo (Corée).
Le 8 Février, l'escadre japonaise escortait un convoi militaire et d'approvisionnement destiné à un débarquement en Corée; elle attaquait le croiseur russe *Varyag* qu'elle endommageait gravement et la canonnière *Korietz* que son équipage faisait sauter. — Le croiseur *Varyag*, incendié, coulait peu après.


LA GUERRE RUSSO-JAPONAISE. – N° 10. – Aspect de la passe de Port-Arthur, le 24 février, à la fin du combat
(*Les torpilleurs japonais fuyant devant les derniers coups de canon.*)
Le 24 février, à 3 heures du matin, les Japonais voulurent essayer de barrer l'entrée du port au moyen de navires marchands, mais le *Revitzan* veillait : son feu détruisit, avec les canons des forts, les bateaux ennemis.

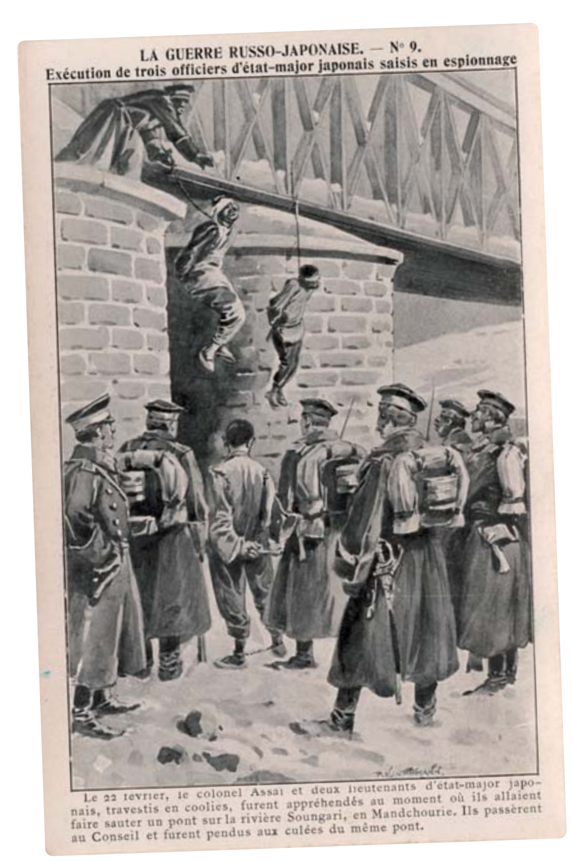

LA GUERRE RUSSO-JAPONAISE. — N° 2. — Le combat naval de Port-Arthur, le 8 Février 1904
La flotte russe, ayant immédiatement riposté aux attaques des torpilleurs japonais, coula deux de ceux-ci endommagea plusieurs navires japonais qui battirent en retraite après une heure de combat.


LA GUERRE RUSSO-JAPONAISE. — N° 6. — Croiseur japonais "Assama" désemparé à Chemulpo, le 9 février
Au combat naval de Chemulpo, le *Varyag* mit hors d'usage les canons de la tourelle avant du croiseur japonais *Assama*, coula un torpilleur, infligea des dégâts aux croiseurs *Issouma* et *Takatchica*; ce dernier coulait dans la soirée. Ce combat coûtait à la Russie la perte de la canonnière *Korietz* et du croiseur *Varyag*.


LA GUERRE RUSSO-JAPONAISE. — N° 4. — Premier débarquement des Japonais à Chemulpo le 8 Février
Pendant qu'achèvent de se consumer les deux épaves du croiseur Varyag et du torpilleur Korietz russes, les Japonais débarquent auprès de Chemulpo, en Corée, y laissent des détachements et continuent leur route sur Séoul. Dans le fond, on aperçoit le croiseur français Pascal qui a recueilli les marins russes.


LA GUERRE RUSSO-JAPONAISE. — N° 8. — Tentative de débarquement des Japonais repoussée le 11 février.
Les Japonais ayant débarqué 600 hommes près de Talien-Ouan (golfe du Petchili), les Cosaques s'élancèrent et leur sabrèrent 410 hommes. Les autres, s'enfuyant, regagnèrent leurs navires en hâte.

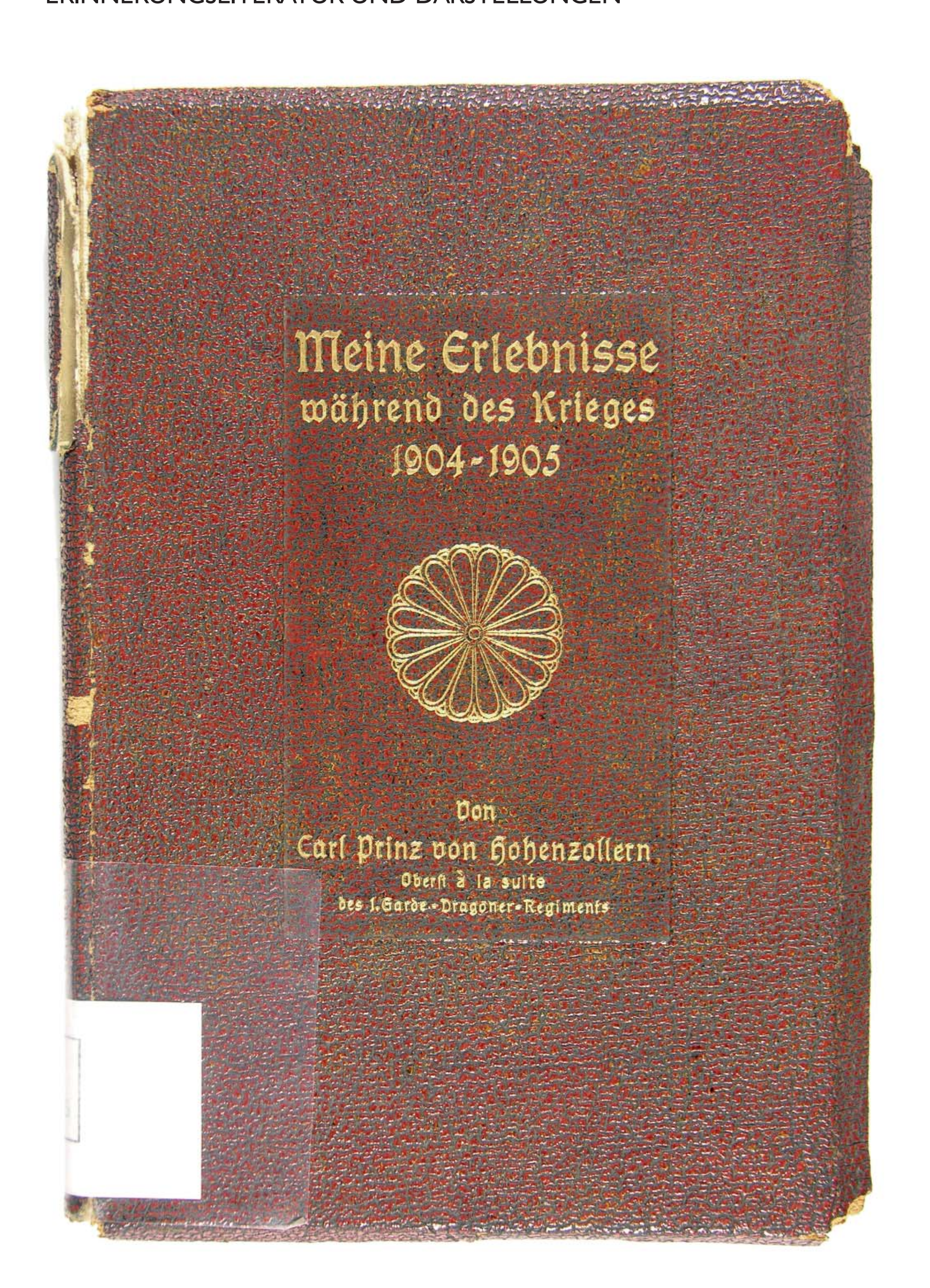

LA GUERRE RUSSO-JAPONAISE. — N° 5. — Occupation de Séoul par un détachement d'avant-garde japonaise le 10 Février.
Aussitôt après le premier débarquement à Chemulpo, les Japonais se dirigèrent sur Séoul, capitale de la Corée, qu'ils occupent d'abord en petit nombre pour maintenir l'ordre. Le détachement russe, qui était chargé de la garde de la légation russe, quittait ensuite Séoul avec le consul pour rejoindre l'armée.







NO. 11
Umschlag der Postkartenserie



NO. 1

Carl Prinz von Hohenzollern
„Meine Erlebnisse während des Krieges 1904–1905“,
Berlin: E.S. Mittler & Sohn, 1908
(Leihgabe der Bibliothek des Deutschen Instituts für Japanstudien)

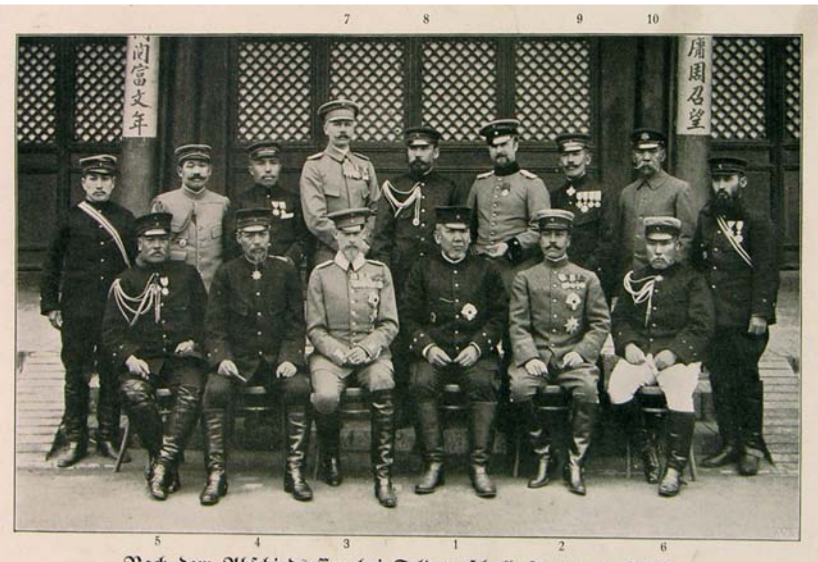
カール・プリンツ・フォン・ホーエンツォレルン
『1904年ー1905年の戦争のときの思い出』
ドイツ-日本研究所所蔵



Feldmarschall Marquis Nozu (in der Mitte) mit Prinz Kan-In und Prinz von Hohenzollern.
(Taku.)



Der Eroberer Port Arthurs General der Infanterie Graf Noghi.
Geschmückt mit dem Orden Pour le mérite.



Nach dem Abschiedsessen bei Feldmarschall Oyama in Mukden.

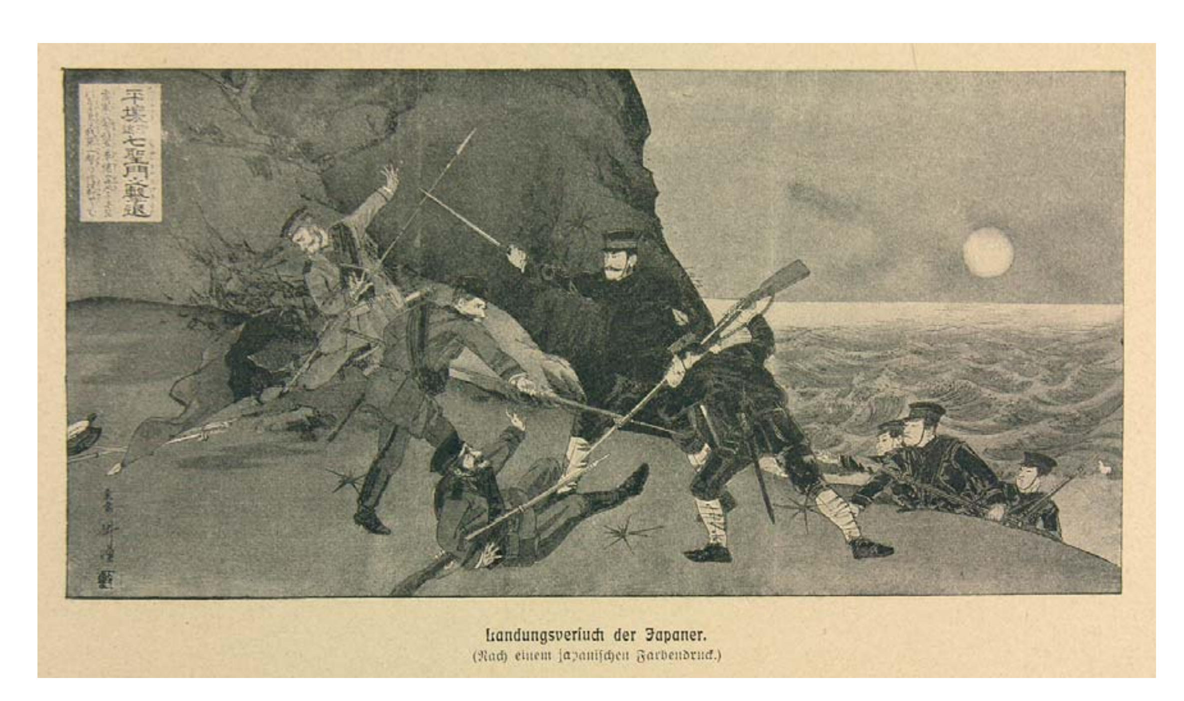
1 Marschall Oyama. 2 Prinz Kan-In. 3 Prinz Carl von Hohenzollern. 4 General Baron Oku. 5 Generalmajor Oseko. 6 Generalmajor Fukushima. 7 Major von Bronsart. 8 General Mazukawa. 9 Mein Ehrendienst Oberstleutnant Nagayama. 10 Zeremonienmeister Matsui.



NO. 2

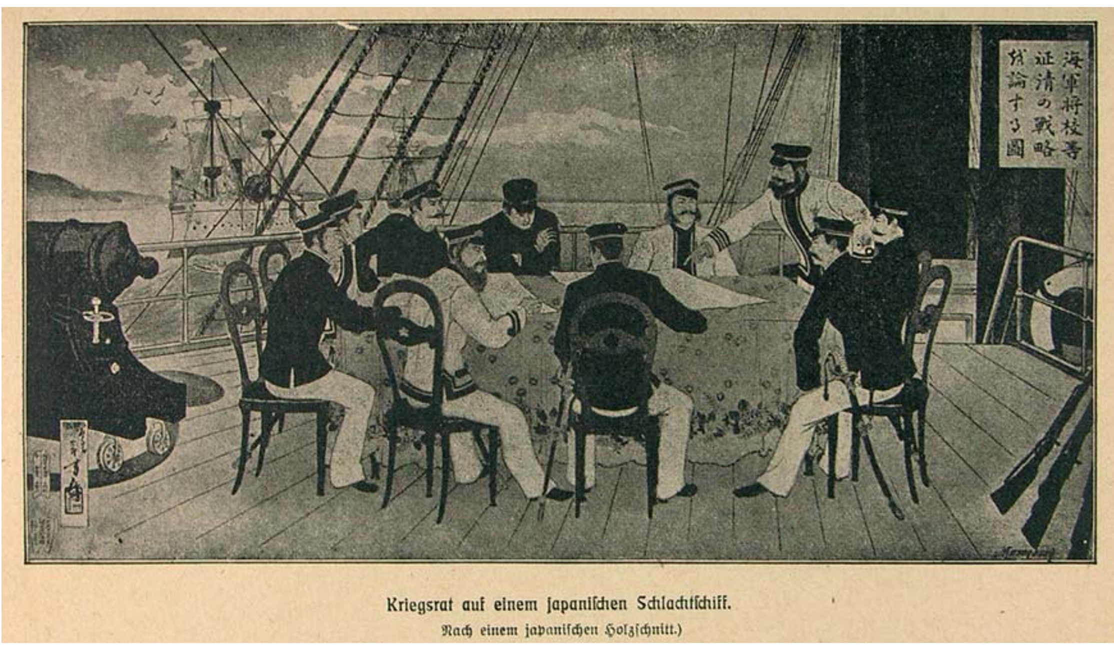
Graf Erich zu Reventlow
„Der Russisch-Japanische Krieg",
Berlin: Weller, 1906
(Leihgabe von Sven Saaler)

レヴェントロフ伯爵
『日露戦争』
サーラ・スヴェン氏所蔵



Landungsversuch der Japaner.

(Nach einem japanischen Farbendruck.)

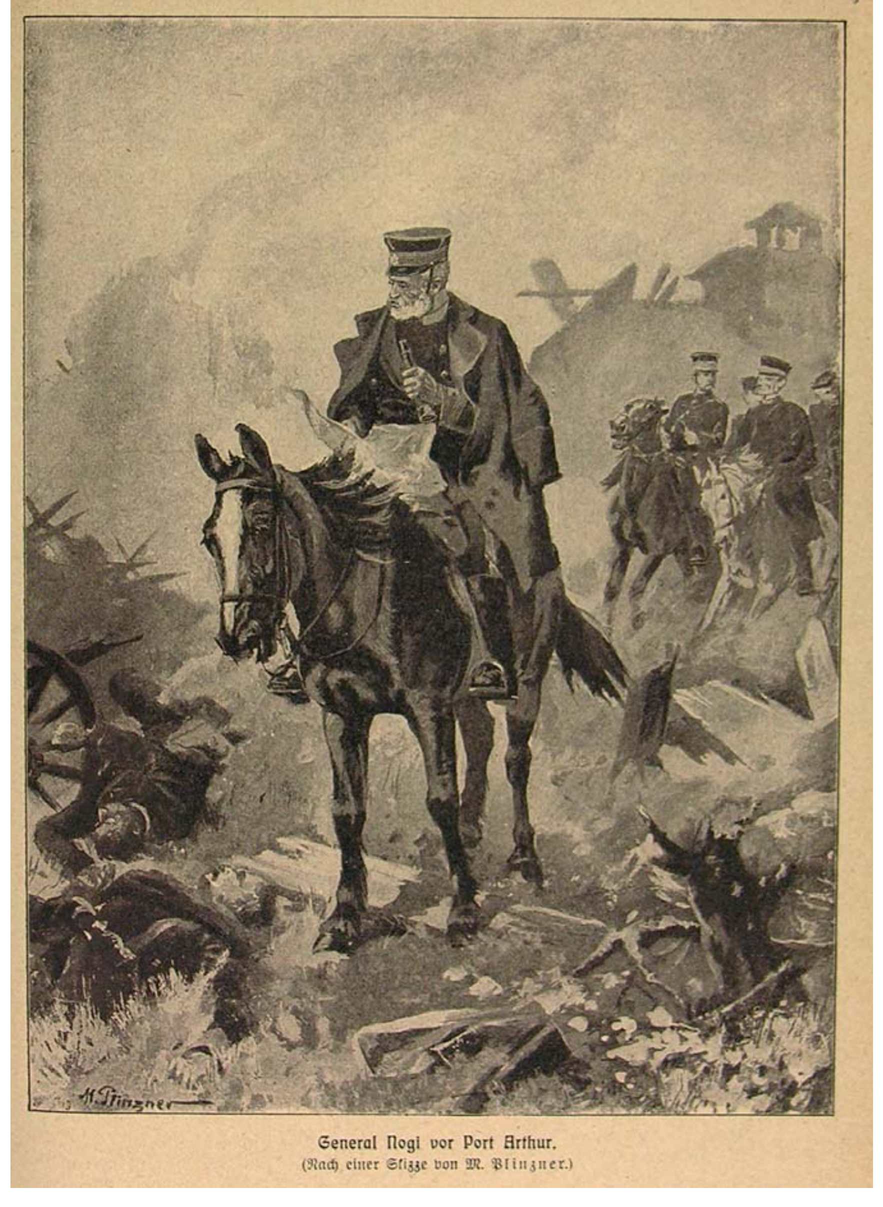


Kriegsrat auf einem japanischen Schlachtschiff.

Nach einem japanischen Holzschnitt.)



Nikolaus II., Kaiser von Rußland.
(Nach einer Photographie.)



General Nogi vor Port Arthur.
(Nach einer Skizze von M. Plinzner.)



Der Kaiser von Japan als „Herr der Welt“.
(Nach einem modernen japanischen Gemälde.)



Ausschmückung der Straßen in Yokohama zur Feier des Falles von Port Arthur.
(Nach einer Photographie.)

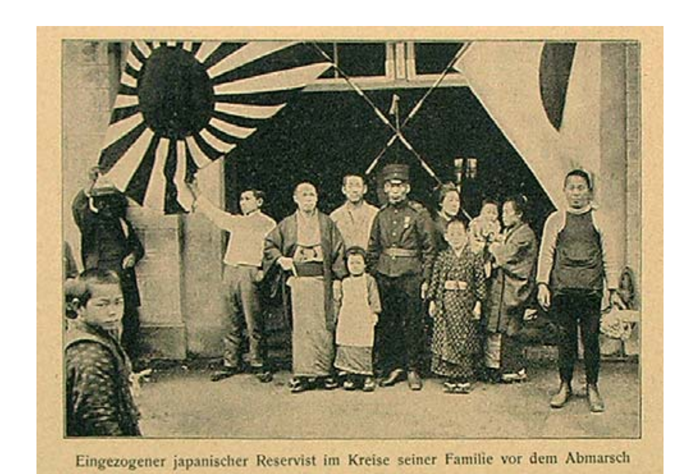
Gefechtsscene an Deck eines japanischen Kreuzers.
(Nach einer Originalzeichnung von C. Schön.)



NO. 3

Gädke, Richard
„Japans Krieg und Sieg: Politisch-militärische Beschreibung des Russisch-Japanischen Krieges 1904-1905", Berlin: Schall, 1906 (Leihgabe der Bibliothek des Deutschen Instituts für Japanstudien)

『日本の戦争と勝利』
ドイツ-日本研究所所蔵



Eingezogener japanischer Reservist im Kreise seiner Familie vor dem Abmarsch

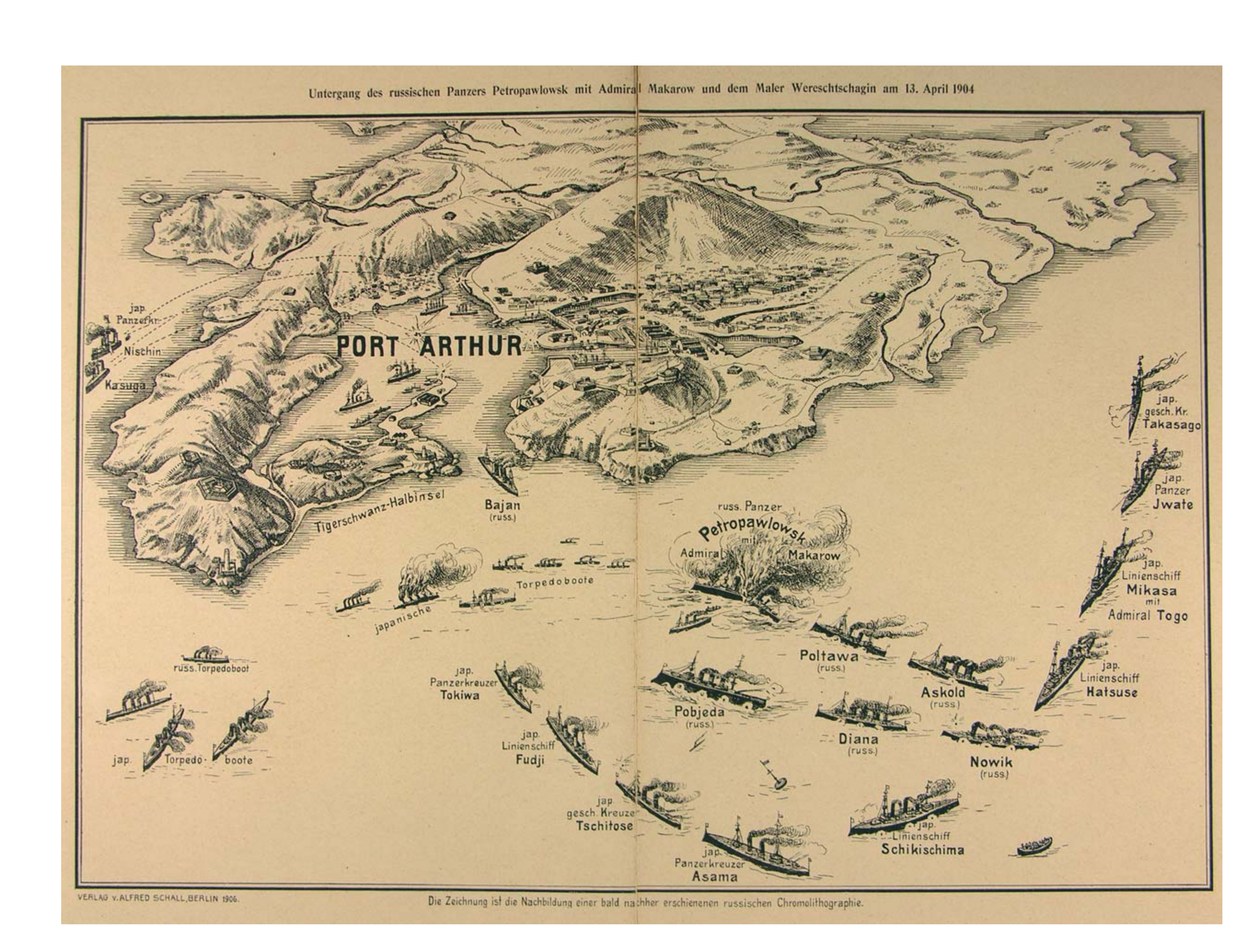


Stereograph Copyright Underwood & Underwood, London and New York

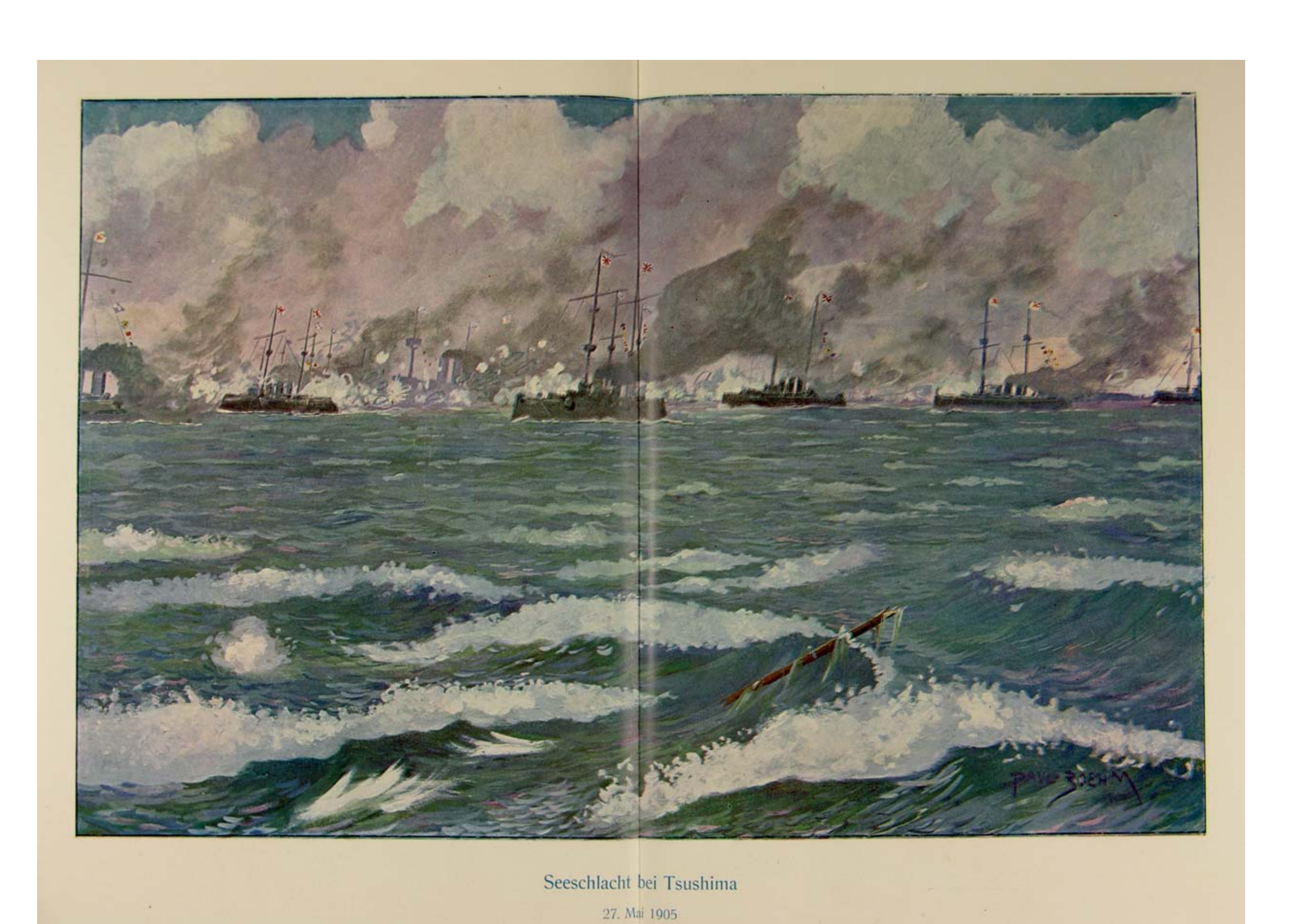
Feldmarschall Oyama in Mukden

Oberbefehlshaber der japanischen Streitkräfte zu Lande

Russen und Japaner im Tode friedlich vereint



Untergang des russischen Panzers Petropawlowsk mit Admiral Makarow und dem Maler Wereschtschagin am 13. April 1904
PORT ARTHUR
jap. Panzerkr.
Nischin
Kasuga
Tigerschwanz-Halbinsel
Bajan (russ.)
russ. Panzer
Petropawlowsk
Admiral
mit
Makarow
japanische Torpedoboote
russ. Torpedoboot
jap. Torpedo-boote
jap. Panzerkreuzer Tokiwa
jap. Linienschiff Fudji
jap. gesch. Kreuzer Tschitose
jap. Panzerkreuzer Asama
Pobjeda (russ.)
Poltawa (russ.)
Diana (russ.)
Askold (russ.)
Nowik (russ.)
jap. Linienschiff Schikischima
jap. Linienschiff Hatsuse
jap. Linienschiff Mikasa mit Admiral Togo
jap. Panzer Jwate
jap. gesch. Kr. Takasago
VERLAG v. ALFRED SCHALL, BERLIN 1906.
Die Zeichnung ist die Nachbildung einer bald nachher erschienenen russischen Chromolithographie.



Seeschlacht bei Tsushima

27. Mai 1905

Die Japaner feuern auf das Flaggschiff »Suwarow« des Admirals Roschdjestwenski (Spitze der russischen Flotte).

日露戦争百周年記念展覧会 『ヨーロッパから観た日露戦争 — 版画新聞、絵葉書、錦絵』

編集者

スヴェン・サーラ、ドイツ－日本研究所

稲葉千晴、名城大学

著者

フローリアン・クルマース、ドイツ－日本研究所

ペーター・パンツァー、ボン大学

ペーター・シュミット、ノイルッピン一枚絵資料センター

ロルフ・ハラルド・ヴィッピヒ、上智大学

翻訳

辻 英史（日本学術振興会研究員）

DER RUSSISCH-JAPANISCHE KRIEG 1904/05 IM SPIEGEL DEUTSCHER BILDERBOGEN

Herausgeber

Prof. Dr. Inaba Chiharu, Meijō University, Nagoya

Dr. Sven Saaler, Deutsches Institut für Japanstudien (DIJ), Tōkyō

Autoren

Prof. Dr. Florian Coulmas, Deutsches Institut für Japanstudien (DIJ), Tōkyō

Prof. Dr. Peter Pantzer, Rheinische Friedrich-Wilhelms-Universität Bonn

Dr. Peter Schmidt, Museum Neuruppin

Prof. Dr. Rolf-Harald Wippich, Sophia University, Tōkyō

Übersetzungen ins Japanische

Tsuji Hidetaka
(Research Fellow, Japan Society for the Promotion of Science)

Grafische Gestaltung
Eveline Gramer-Weichelt, Planegg

Druck
Schoder Druck, Gersthofen

2005